

平成 22 年度
「くらしの文化」の実態及び振興方策に関する
調査研究事業

報 告 書

平成 23 年 3 月

(株)日本能率協会総合研究所

はじめに

本報告書は、平成 22 年度「くらしの文化」の実態及び振興方策に関する調査研究事業の成果をとりまとめたものです。

本調査研究の趣旨とするところは、①「くらしの文化」に係る包括的な実態把握を行うとともに、②「くらしの文化」を取り巻く現状と課題を整理・分析し、③振興方策を講ずるために必要な基礎資料を作成することにあります。その背景として、文化審議会文化政策部会くらしの文化WG「意見のまとめ」¹では、「くらしの文化」に関し、生活様式の変化、少子高齢化や過疎化、経済情勢の変化をはじめ様々な社会変容がもたらす影響を検証する必要性、①発掘・再興、②連携・交流、③発信の局面に応じた振興方策の検討が提言され、「くらしの文化」に関する調査研究の推進、「くらしの文化」の担い手・団体の育成・支援などの方向性が示されたています。

こうしたことを踏まえ、本年度の調査研究では、「くらしの文化」について衣・食・住の分野を中心に、それぞれ発掘・再興、連携・交流、発信を行っている全国の活動事例を既存文献、報道資料等から抽出し、課題についてとりまとめました。

各地域において歴史性、地域性に由来する固有の文化的価値を形成し、人々の生活に密着したものであるがゆえに社会変容の影響を受けやすく、少子高齢化や核家族化、地域コミュニティの衰退、継承者・後継者の不足等による文化の伝承力の低下が危惧されている中で、本報告書が実態の把握と今後の振興方策検討の一助になれば幸いです。

最後に本調査研究を進めるにあたり設置した「くらしの文の実態及び振興方策に関する調査研究会」委員の皆さまには大変貴重なご意見をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月

(株)日本能率協会総合研究所

¹文化審議会文化政策部会「審議経過報告」（平成 22 年 6 月 7 日）別添
文化審議会「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 3 次）について（答申）」（平成 23 年 1 月 31 日）別添

目 次

序-1. 調査の目的	1
序-2. 調査の進め方	1
I. 詳細事例	3
1. 衣関係事例	4
1-1 発掘・再興 伝統の技を伝える、からむし織体験生「織姫・彦星」事業 (福島県昭和村)	4
1-2 連携・交流 和綿を活用した異なる世代間交流事業(栃木県高根沢町)	6
1-3 発信 和魂 in 萩・津和野、美しい町並みに和服が似合うまち (山口県萩市、島根県津和野町)	8
2. 食関連事例	10
2-1 発掘再興 八戸の食文化を全国に発信～伝統食「八戸せんべい汁」を地域の顔に (青森県八戸市)	10
2-2 連携交流 「御食国」若狭おぼまの伝統「食」を中心に捉えた「食のまちづくり」 (福井県小浜市)	12
2-3 発信 ゆずの市場開拓から始まった地域づくり(高知県馬路村)	14
3. 住関連事例	16
3-1 発掘再興 栄光をふたたび! 木曾漆器発祥の地の発掘・再興(長野県木曾町)	16
3-2 連携交流 京町家保存・再生・情報発信活動(京都府京都市)	18
3-3 発信 8000点の民具を只見町方式で整理しインターネットで 検索できるエコミュージアム(福島県只見町)	20
4. その他関連事例	22
4-1 発掘再興 現代版組踊り「肝高(きむたか)の阿麻和利(あまわり)(沖縄県うるま市)	22
4-2 連携交流 「冠太鼓」女太鼓が町に元気を取り戻す(宮崎県東郷町)	24
4-3 発信(1) のへじ昔っこ編集事業(青森県野辺地町)	26
4-3 発信(2) 民有歴史文化資産の保存・活用 プチミュージアムの郷プロジェクト (石川県能登町)	27
II. 概要事例	29
1. 衣関係事例	30
1-1. 発掘・再興	30
1-1-1 麻布・麻くずつぎはぎ/青森発の「ぼろ」世界が高く評価(青森県)	30
1-1-2 作務衣などを着て、まほろば語り部発表会 語り部たちが多彩な民話を披露(山形県高畠町)	30
1-1-3 伝統の技を伝える、からむし織体験生「織姫・彦星」事業(福島県昭和村)	30
1-1-4 「織物伝承講座」開催 (国指定重要有形民俗文化財 裂織りの仕事着やシナ布)(新潟県相川町)	31
1-1-5 廃校使って藤織り紹介 宮津、伝承交流館(京都府宮津市)	31
1-1-6 弥生の衣服「貫頭衣」デザインコンテスト(大阪府泉大津市)	31
1-1-7 地元に残った帆布を使って服飾小物やバックを作成、販売店は観光スポットに (広島県尾道市)	31
1-1-8 沖縄庶民の昔の衣装に触れてもらおうと、「沖縄庶民の装い—明治・大正・昭和 の衣の変遷—」展(沖縄県浦添市)	32
1-1-9 かりゆしウエアを高校生がデザイン(沖縄県)	32

1-2. 連携・交流.....	33
1-2-1 和綿を活用した異なる世代間交流事業.....	33
1-2-2 真岡市民と交流の輪拡大／今夏 外国人に浴衣を／祭りで着用、100着目標／ 商議所が提供呼び掛け(栃木県真岡市).....	33
1-2-3 着物と産地を生糸で結んで 埼玉のブランド繭「いろどり」(埼玉県川越市)....	33
1-2-4 絹のまちの情報誌創刊「シルクのまちづくり市町村協議会」で、絹に関する 情報交流(京都府京丹後市 他).....	34
1-2-5 ネットで千客、地場産業挽回ー交流通じ観光にも一役、桃太郎ジーンズ (岡山県倉敷市).....	34
1-3. 発信	35
1-3-1 「和服で那須烏山の里めぐり」市民対象バスツアー(栃木県那須烏山市)	35
1-3-2 群馬・伊香保温泉に和服女性1000人、石段街を着物を着た女性で埋めるイベ ント(群馬県渋川市)	35
1-3-3 江戸更紗など「染(そめ)の小道」イベントで、染め物の街PR (東京都新宿区落合・中井)	35
1-3-4 朝倉氏遺跡時代衣装パフォーマンス(時代衣装を着用して観光案内サービスや記 念撮影を実施)(福井県福井市)	36
1-3-5 和魂 in 萩・津和野、美しい町並みに和服が似合うまち (山口県萩市、島根県津和野町)	36
1-3-6 道後入浴 女帝スタイルで 古代天皇の衣装復元(愛媛県松山市)	36
1-3-7 紫プロジェクト／染料紫草の復活、紫草染衣装のファッションショー (福岡県筑紫野市)	37
1-3-8 着物姿で投扇興、竹取物語をテーマにした観月会(熊本県菊池市)	37
2. 食関連事例.....	38
2-1. 発掘・再興.....	38
2-1-1 チーズづくりの応援で地域に交流の輪 「チーズ工房酪恵舎」と「グッチーズ」(北海道釧路支庁白糠町)	38
2-1-2 八戸の食文化を全国に発信 ～伝統食「八戸せんべい汁」を地域の顔に～(青森県八戸市)	38
2-1-3 まちへの想いと人をつなぐ製塩事業～まさに「塩結び」～(宮城県塩竈市)	39
2-1-4 女性パワーを核とした“砺波型”地産地消の推進ー学校給食で食農教育を支援ー (富山県砺波市)	39
2-1-5 食材から器までとことんこだわった「能登井」 (石川県輪島市・珠洲市・穴水町・能登町)	40
2-1-6 地元素材にこだわった味噌作りで地域を元気に(福井県清水町)	40
2-1-7 ふるさとの味加工研究会 東和の食文化を体験してみませんか? (山口県東和町)	41
2-1-8 野山の枝葉の商品化による地域おこし(徳島県上勝町)	41
2-1-9 失いかけた伝統茶「碁石茶」で地域再生～「本場の本物」が町の未来を拓く～ (徳島県上勝町)	41
2-1-10 黒にこだわって地域コミュニティを守る 「黒米クラブやまうち」 (佐賀県山内町)	42
2-1-11 霧島で「食文化を大切にする」文化を育てたい(鹿児島県霧島市)	42

2-2. 連携・交流.....	43
2-2-1 稲作体験ツアー（青森県田舎館村）.....	43
2-2-2 そばのオーナー制度による地域おこし（栃木県茂木町）.....	43
2-2-3 越後田舎体験 東頸城3町3村が連携し、多様な体験メニューを用意 （新潟県東頸城郡）.....	43
2-2-4 多様な食や伝統文化を「地域の宝」として活用し、体験交流を展開 （新潟県村上市）.....	44
2-2-5 女性の視点で地元で漆器のファン作り（石川県輪島市）.....	44
2-2-6 「御食国」若狭おばまの伝統「食」を中心に捉えた「食のまちづくり」 （福井県小浜市）.....	45
2-2-7 地域が一つにまとまって都市と交流（静岡県島田市）.....	45
2-2-8 地引き網体験 魚を捕って、さわって、豊かな自然を満喫しよう （京都府丹後町）.....	46
2-2-9 元気な村づくり推進事業 都市との交流で、漁村への理解と水産資源の保護を図 る（岡山県笠岡）.....	46
2-2-10 三谷いしがき棚田オーナー制度（山口県徳地町）.....	47
2-2-11 島の学校（鰯飼付漁体験） 地元の漁師と本当の魚の味・漁の醍醐味を体験する。 （長崎県厳原町）.....	47
2-2-12 イモの縁が町ぐるみの交流に発展「南北ポテトピア交流事業」 （鹿児島県山川町）.....	47
2-3. 発信.....	48
2-3-1 はぼまい昆布しょうゆ（地域団体商標）（北海道根室市）.....	48
2-3-2 「都市と農山漁村の交流」－ゆとりとやすらぎ、食育の場の提供－ （岩手県一関市）.....	48
2-3-3 日間賀島 漁業関係者と協働で、地元で水揚げされる海産物を観光資源化 （愛知県南知多町）.....	48
2-3-4 天然トラフグを通じた地域ブランドの創出（三重県志摩市）.....	49
2-3-5 「水産ブランドどんちっち」－利己的から利他的に－（島根県浜田市）.....	49
2-3-6 ゆずの市場開拓から始まった地域づくり（高知県馬路村）.....	49
2-3-7 吉野梨を、世界へ（熊本県氷川町）.....	50
3. 住関連事例.....	51
3-1. 発掘・再興.....	51
3-1-1 国登録有形文化財旧上藻別駅通所（北海道紋別市）.....	51
3-1-2 百石町展示館（土蔵倉庫）～文化財を芸術文化発信の場に～（青森県弘前市）....	51
3-1-3 地域の潜在資源である「町屋」を観光・交流拠点に「村上町家商人会」 （新潟県村上市）.....	52
3-1-4 かいによ苑～懐かしさと新鮮さを感じる生涯学習の場所づくり～ （富山県砺波市）.....	52
3-1-5 栄光をふたたび！木曾漆器発祥の地の発掘・再興（長野県木曾町）.....	53
3-1-6 彦根にまつわる「赤」を活用した地域振興（滋賀県彦根市）.....	53
3-1-7 木製歌舞伎座「内子座」の保存（愛媛県内子町）.....	54
3-1-8 高齢化で途絶えた祭を復活-木浦鉱山地を離れた若者が継承（大分県佐伯市）...	54

3-2. 連携・交流.....	55
3-2-1 小樽雪あかりの路デザイン・アートから地域創造をめざす.....	55
3-2-2 石蔵を活用したデザイン・アートから地域創造をめざすNPO「アートチャレンジ 滝川」（北海道滝川市）.....	55
3-2-3 奥州街道羽州街道追分を活用した観光振興（福島県桑折町）.....	56
3-2-4 足袋蔵の保存で生まれた、市民のネットワーク「行田足袋蔵ネットワーク」 （埼玉県行田市）.....	56
3-2-5 高田の雁木（新潟県上越市）.....	56
3-2-6 「刃物のまちづくり」で地域を活性化（地域挙げて個性ある産業観光地づくりを推 進）（岐阜県関市）.....	57
3-2-7 職人の街「看板の似合うまちづくり」活動（京都府京都市）.....	57
3-2-8 京町家保存・再生・情報発信活動（京都府京都市）.....	58
3-2-9 盆踊りの継承活動で世代と地域をつなぐ「大見盆踊り保存会」（香川県三野町）	58
3-2-10 秘窯の里、伊万里市大川内山の活動（香川県三野町）.....	58
3-3. 発信.....	59
3-3-1 小樽ガラス市（北海道小樽市）.....	59
3-3-2 8000点の民具を只見町方式で整理しインターネットで検索できるエコミュージ アム（福島県只見町）.....	59
3-3-3 小江戸川越国際都市化支援継続プロジェクト（埼玉県川越市）.....	60
3-3-4 古民家再生プロジェクト（石川県）.....	60
3-3-5 「新七条寺子屋」活動（京都府京都市）.....	60
3-3-6 襖文化の振興活動（大阪府大阪市）.....	61
3-3-7 葉歌人柿本人麻呂と地域の歴史、観光を見つめ直すシンポジウムの開催 （島根県江津市）.....	61
3-3-8 島全体が博物館「竹富島フィールドミュージアム」（沖縄県竹富町）.....	62
4. その他関係事例.....	63
4-1 発掘・再興.....	63
4-1-1 レンガのまちの歴史と連帯感をみつけた「かみゆうべつ20世紀メモリープロジェ クト」（北海道上湧別町）.....	63
4-1-2 「信玄堤の保存・再興（山梨県甲斐市）.....	63
4-1-3 「彩漆会」女性の視点で地元で漆器ファン作り（石川県輪島市）.....	63
4-1-4 町人ゼミで「城下町・岐阜」の歩みを体験（岐阜県岐阜市）.....	64
4-1-5 “謎多き遺跡”石城山神籠石の発掘・再興（山口県光市）.....	64
4-1-6 現代版組踊り「肝高（きむたか）の阿麻和利（あまわり）（沖縄県うるま市）..	65
4-2 連携・交流.....	66
4-2-1 人を育て、地域を育てる演劇工場の運営「ふらの演劇工房」（北海道富良野市）	66
4-2-2 市民手づくりの「街の映画館」を文化復興とまちづくりの拠点に「深谷シネマ （チネ・フェリーチェ）」（埼玉県深谷市）.....	66
4-2-3 小学校で開催される住民総出の冬のイベント「たけだじょんころ雪まつり実行 委員会」（福井県丸岡町）.....	67
4-2-4 盆踊りの継承活動で世代と地域をつなぐ「大見盆踊り保存会」（香川県三野町）	67
4-2-5 「冠太鼓」女太鼓が町に元気を取り戻す（宮崎県東郷町）.....	68

4-3 発信	69
4-3-1 のへじ昔っこ編集事業（青森県野辺地町）	69
4-3-2 みずさわ観光サポーターの会（岩手県水沢市）	70
4-3-3 民有歴史文化資産の保存・活用 プチミュージアムの郷プロジェクト （石川県能登町）	70
4-3-4 伝統のものづくりと音楽のお祭りでコミュニティの活性化 50「天神芸術まつり実 行委員会」（山口県防府市）	70
4-3-5 『ザビエルの道』ウォーキング大会（大分県日出町）	71
Ⅲ. 活動事例から見た現状と課題	72
1. 発掘・再興	72
1-1 現状	72
1-2 課題	72
2. 連携・交流	72
2-1 現状	72
2-2 課題	73
3. 発信	73
3-1 現状	73
3-2 課題	73
Ⅳ. 研究会の開催	75
v. 本調査研究事業を行っていく上での今後の課題	81
参考文献	82

序-1. 調査の目的

「くらしの文化」に関しては、「はじめに」に記したとおり、文化審議会において、生活様式の変化、少子高齢化や過疎化、経済情勢の変化をはじめ様々な社会変容がもたらす影響を検証する必要性、①発掘・再興、②連携・交流、③発信の局面に応じた振興方策の検討が提言され、「くらしの文化」に関する調査研究の推進、「くらしの文化」の担い手・団体の育成・支援、などの方向性が示されたところである。

本調査研究では、①「くらしの文化」に係る包括的な実態把握を行うとともに、②「くらしの文化」を取り巻く現状と課題を整理・分析し、③振興方策を講ずるために必要な基礎資料等を得ることを目的とする。

序-2. 調査の進め方

調査を進めるに当たっては、受注者において「くらしの文化の実態及び振興方策に関する調査研究研究会」を設置し、学識経験者の意見を聴取することとした。

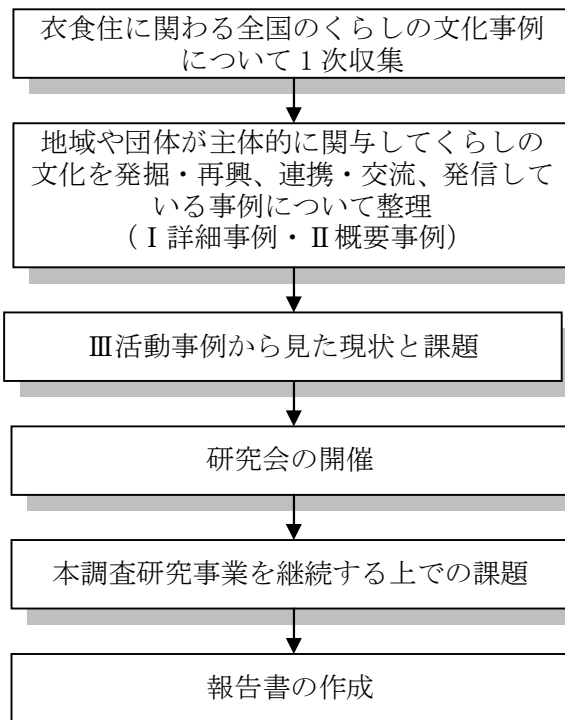
調査の進め方としては、衣・食・住・その他に関わる全国の活動事例を既存文献、報道関係資料等（巻末参考資料参照）から約300事例を抽出し衣食住その他別・都道府県別に表にしてまとめた。

まとめにあたっては、地域的な偏りが出ないように全国を5つのブロック（北海道・東日本・中部・西日本・九州沖縄）に分け、地域や団体が主体的に関与して「くらしの文化」を発掘・再興、連携・交流、発信している事例について約100事例を絞り込み内容をまとめた。

抽出の視点としては、地域が主体的に行っている活動で各主体の役割が明記されている、5つのくらしの文化を見る視点が偏らないこと、活動内容が明確に記載され今後の参考になる事例等とした。

このうち、13事例については詳細な内容が把握できたことから「くらしの文化」振興の経緯、活動のポイント、活動内容、苦心点・課題をまとめ詳細事例集とし、他については活動概要をまとめ概要事例集とした。

これらから「くらしの文化」の振興に関わる現状と課題を整理するとともに、研究会でのご意見を踏まえて報告書としてとりまとめた。



【調査研究の進め方】

I . 詳細事例

1. 衣関係事例

1-1 発掘・再興

事例名	伝統の技を伝える、からむし織体験生「織姫・彦星」事業				
地域	福島県昭和村	地域的特性	農村地域・繊維産地		
目的	発掘・再興	●	連携・交流		発信

●くらしの文化振興活動の概要

からむしは日本最古の原始織物といわれ、苧麻（ちょま、からむし）という植物からとれる繊維を用い、栽培から製糸まですべて手作業で、現在では昭和村と沖縄県宮古島の2カ所でしかつくられていない貴重な文化遺産である。からむしは弾力性に富んだ強い素材で、全国的にも注目されているが、高齢化・過疎化の進行が深刻な問題となっている昭和村では、からむし織の後継者不足が懸念されていた。

そこで、交流人口と定住人口を増やし、独自の物産である「からむし織」の織り手を養成するため、役場職員らの考案によって「織姫体験生制度」を発足、平成6年度から全国へ「織姫体験生」の募集を行った。

●くらしの文化振興の経緯

当初、3年間の期間限定でスタートした「織姫」の募集（10名）は、からむし織と山村生活に興味のある35歳以下の女性を対象に行い、6月から3月までの10カ月間、からむし織関連技術保持者の自宅にホームステイさせ、糸づくりから織りまでの一連の工程を体験させるスケジュールとした。体験に係る経費全額を村が負担、他に毎月報償金5万円を織姫の生活費の援助として支給した。

平成7年度以降は村の施設での共同生活となり、報償金の額を毎月8万円に増額し、平成10年度まで継続した。

平成11年度からは年齢制限を18歳以上として上限をなくすとともに、主に財政的な理由から生活費の補助を打ち切り、各自自前で生活している。なお、体験に係る経費等については現在も村で負担している。

この頃から、体験生から1年間の体験修了後も引き続き村に残り、からむしをより深く学びたいという希望が多数寄せられたことから、平成11年度からその後1年間、体験生の指導補助や各自のテーマに基づき、からむしを研究することを条件として「研修生」制度を導入、生活費の援助として毎月6万円（12月から翌年3月までは5千円加算）の報償金を支給することとした。この「研修生」の期間は、平成12年度から2年間に延長、平成21年度から3年に延長された。

平成13年度からは男性の体験生も「彦星」として受け入れることとし、からむし織体験生（織姫・彦星）事業として現在に至っているが、平成15年度体験生（10期生）から、主に財政的な理由により、受け入れ人数（4名）を若干減らしている。（平成21年度を含め合計84名を受け入れた。）



織姫
夏まつり「からむしフェア」きものショー

●くらしの文化振興活動のポイント

- ・毎年多くの応募者があることは、これまでからむしに携わってきた村民（主に高齢者）に大きな誇りと自信を与え、織姫に熱意をもって技術を伝えることでやりがいと生きがいを与えた。
- ・もう一つ村にとって見逃せない大きな「成果」は、織姫たちの定住と結婚である。村に残った20名のうち7名は地元の男性と結婚、子どもに恵まれた織姫もあり、過疎対策、若者の結婚対策にも予想外の結果をもたらした。

●からむし織体験生「織姫・彦星」事業

1. ねらい

山村の生活文化を再認識していただくことを目的とし、約 11 ヶ月間、からむし織の一連の工程、山村生活等を体験してもらう制度

2. 内容

◆ からむし織の一連の工程

(1) 畑 (5月～7月にかけて)

からむし畑の春から夏にかけての作業(雑草取り、からむし焼き、施肥、垣造り、苗(根)の植え替え、刈り取りなど)



(2) 芋引き (7月～8月にかけて)

刈り取ったからむしから繊維部分を取り出す工程



(3) 糸づくり (芋績み、撚り掛け、染色など 5月～12月にかけて)

繊維を細く裂き、繋ぎ、糸にする工程



(4) 織り (12月～3月にかけて)

高機を用い、平織り帯 1 本を織りあげる工程。3月には、織りあがった帯を多くの方に見ていただくため、作品展を開催。



◆ 山村生活等

下記の体験学習を随時行うとともに、村の各種行事などへの参加。

- (1) 借り上げ畑による家庭菜園程度の畑作業
- (2) 染色(草木染め)、わらじづくりなどの生活工芸
- (3) 郷土料理

3. 応募資格、体験期間等

18歳以上、約 11 ヶ月間

●その他の短期体験コース

上記の長期体験の以外に、織姫交流館では、20～60 分のからむし織体験コース他、生活工芸体験など、2 時間以内で体験できるお手軽体験コースを設定

- ・からむし織体験(高機でコースターや花びん敷を織る)
- ・生活工芸体験(ヒロロ細工やマタタビ細工など)

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・当初、織姫たちと若い女性を暗に結婚対象として捉える村民との意識のズレも生じたが、現在はそれほど大きなものではなくなっている。
- ・今後考えていくべきことは、体験生、研修生修了後の扱いであり、結果として結婚してもしなくても、村で生活していける経済的基盤と、地域の一員として住民のネットワークに入れるような仕組みを考えていかなければならない。

●参照 URL

- ・福島県昭和村 <http://www.vill.showa.fukushima.jp/>

1-2 連携・交流

事例名	和綿を活用した異なる世代間交流事業				
地域	栃木県高根沢町	地域的特性	農村地域・和綿産地		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	

●くらしの文化振興活動の概要

栃木県は真岡木綿で名高い地域性を持ち、高根沢町でも和綿の栽培が盛んに行われていた。その履歴を大切にしていきたいと、和綿の栽培を通じた人づくりから地域の環境を創造していこうとする活動。

「和綿を活用した異世代間交流事業」は、宇都宮大、高根沢町、高根沢町環境学習施設「エコ・ハウスたかねざわ」の共同によるもので、2008年度に始まった。和綿文化を再考し、地域再生につながる狙いがある。老人ホームで和綿の種まきが行われ、摘み取り、紡ぎ作業など各段階で幼児、中学生、愛好者らにかかわってもらい、世代間の交流を促す。

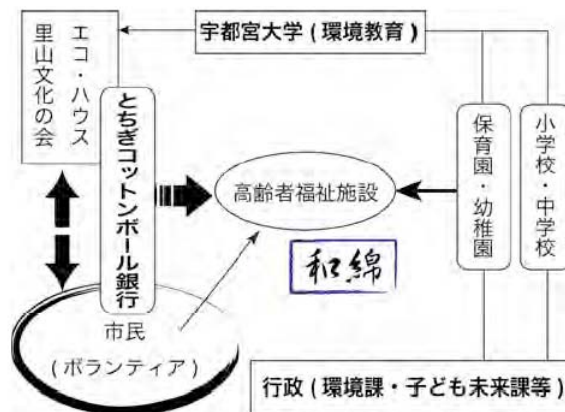
2009度は、栽培面積を約100平方メートルに倍増。経費老人ホーム入居者らによる綿製品づくりまで視野に入れている。入居者6人と、不登校児童・生徒の適応指導教室「町フリースペース ひよこの家」に通う8人が種まきし、秋には、陽だまり保育園の園児らが摘み取り、生涯学習団体「里山文化の会」の会員が紡ぐ予定。

●くらしの文化振興の経緯

2006年に、宇都宮大学教育学部衣生活環境学研究室と高根沢町エコ・ハウスたかねざわの共同主宰で「里山文化の会」が発足。日本人の感性を育ててきた「里山」にスポットをあて、そこで育まれてきた伝統技術や文化から「もの」と「ひと」の関係を学び直そうという主旨をもち、大人と子どもと一緒に染織体験を通して共通の「環境価値」を創造していくことを目的とし、環境学習活動等を展開している。

「里山文化の会」では、体験学習活動を展開する一方で、2008年に、綿をテーマとしたエコマネー（地域通貨）を運営する「とちぎコットンボール銀行」を設立。「とちぎコットンボール銀行」は、

「里山文化の会」が育ててきた日本古来の和綿の種を融資し、収穫できた綿の一部を返済してもらう仕組み。地域や環境のことを考える「人の環づくり」を目指し、会員が栽培した綿はエコマネー（地域通貨）として貯蓄することができ、預かった綿は「里山文化の会」が、手間ひまかけて糸や布にする。



●くらしの文化振興活動のポイント

- ・このような生涯学習プログラムを町の環境教育として機能させる中で、学習者が主体的に地域に関わって行く活動として、事業を实践
- ・町にある資産を最大限に活用していくという視点に立って地域活性化を検証できたことが大きな成果であり、今後の自治体のあるべき姿とも言える
- ・町の施設である環境教育センター「エコ・ハウスたかねざわ」の中に、コットンボール銀行のような自律的・自立的な組織ができたことが行政にとって有益

●「里山文化の会」の体験学習

「里山文化の会」は、和綿栽培から製品化までを自らの手で体験し、伝統的な衣生活から環境問題を考えようと 2006年に発足。

「里山文化の会」では、発足以来、毎年のテーマに沿って環境学習の体験活動を展開

- 2007年：リサイクル風呂敷と里山文化
- 2008年：糸から衣生活を見直す
- 2009年：衣生活から共生をめざす
- 2010年：糸にいのちを吹き込む

2008年度の活動内容(講座)

日程	教室活動	教室外活動
3月23日	わたわたワークショップ	横山畑準備(30日)
4月20日	綿繰りと綿打ち&藍の種蒔き	今のところ予定なし
5月11日	原始コマで糸紡ぎ&綿の種蒔き	横山で藍の定植と綿種蒔き, 第1回CBKオフ会, エコフェスタでCBKのPR活動
6月15日	撚り止めと糸染め	横山除草作業, 第2回CBKオフ会
7月27日	藍の生葉染<夏休特別企画1>	横山沈殿藍づくり
8月17日	藍の生葉染<夏休特別企画2>	横山干葉藍づくり, 第3回CBKオフ会
9月7日	簡単な手織り	今のところ予定なし
10月19日	たぬきの糸車(1)	第4回CBKオフ会
11月16日	たぬきの糸車(2)	地域通貨発行作業
12月14日	地機に挑戦しよう!	CBK決算作業

注) CBKはコットンボール銀行の略

●和綿を活用した異世代間交流事業

「和綿を活用した異世代間交流事業」は、宇都宮大学とエコ・ハウスたかねざわが共同で運営している「里山文化の会」において、和綿を活用した環境教育プログラムを開発しつつ、それを地域に還元していく施策と位置づけ、2008年度から発足した「とちぎコットンボール銀行」を活動拠点として実施されている。



老人ホームで種まき
(老人ホーム入居者と不登校児童・生徒による)



ケアハウス・フローラにおける
異世代間交流事業



綿打ち体験の様子



紡ぎ車による糸紡ぎ体系

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・大学と市民が協働して発展させていく団体を、今後行政側がどのようなスタンスで支援していくか

●参照 URL

- ・里山文化の会 (宇都宮大学教育学部衣生活環境学研究室と高根沢町エコ・ハウスたかねざわが共同主宰) <http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?EcoHouse>
- ・とちぎコットンボール銀行
<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?Cotton>
(宇都宮大学地域貢献事業関係報告書「和綿を活用した異世代間交流事業-伝統文化で明るい農村を築く-」)
- ・エコ・ハウスたかねざわ (高根沢町の環境学習施設) <http://homepage3.nifty.com/ecohouse-t/>

1-3 発信

事例名	和魂 in 萩・津和野、美しい町並みに和服が似合うまち				
地域	山口県萩市、島根県津和野町	地域的特性	城下町		
目的	発掘・再興		連携・交流	発信	●

●くらしの文化振興活動の概要

「萩・津和野」は、全国でも有数の美しく古い町並みが残っている地域であり、これまでこの地域資源を地域ブランドとして全国にPRしてきた。萩・津和野としては、「和服が似合うまち」を定着させるため、これまでそれぞれ単独で開催してきた「和魂 in 津和野（津和野町）」と「着物ウィーク in 萩（萩市）」のイベントを連携して行う「和魂 in 萩・津和野」の取組により、効果的なPRを行うこととした。

「和魂 in 萩・津和野」の期間中には、共通パスポートを発行し、それを持って和装で町歩きをすると、協賛施設で様々なサービスが受けられる。

また、「着物ウィーク in 萩」期間中には、着物のレンタル、無料フォト撮影&プレゼント、カメラレンタルなどのサービスに加え、着物フォトコンテストの開催や和の小物の手作り教室などの和の体験プログラム「和魂10」も実施。

さらに、この期間においては、和のイベントとして、萩市は「萩夏まつり、萩・万灯会、萩・竹灯路物語」を、津和野町は地元の芸術家や日本伝統工芸士の作品を展示・体験する「和魂の手技～津和野アートと伝統工芸士の技～」を開催。

●くらしの文化振興の経緯

山口県萩市は、人口5.6万人で、毛利輝元が1604年に開府して以来、およそ260年間にわたり萩藩36万石の城下町として栄え、当時の町並みや歴史的遺産が数多く残されており、今も「江戸時代の地図がそのまま使えるまち」である。

また、島根県津和野町は、人口は約8900人で、古くから山陰の小京都と呼ばれている。

そして、「萩・津和野」は、全国でも有数の美しく古い町並みが残っている地域であり、これまでこの地域資源を地域ブランドとして全国にPRしてきた。

近年になり、和の伝統文化である「着物・浴衣」がテーマに取り入れられ、町並みとの調和を活かした「和服が似合うまち」というコンセプトが、「萩・津和野」の新たな地域資源として発掘された。

和魂 in 萩・津和野

～夏から秋にかけての萩を「ゆかた・着物」で楽しむ。

6月30日(火)～10月12日(月・祝)



和魂とは・・・

日本には、日本人の心というべきよき文化があります。伝統と風土に根付き、日本人のDNAに刻まれた日本の魂、それが「和魂」。

つい最近までは、古いものや日本的なものが軽視されていましたが、いま再び和に注目が集まっています。和の食文化、和服、和の雑貨、和しつらえや暮らし。衣食住にわたり、和の文化を知っていることは素敵なことです。時代は和へ回帰しています。

萩と津和野には、今もその古きよきまちなみに日本の心が根付き、引き継がれています。それはまちなみだけでなく、萩・津和野の人々に、和魂が生活として身につけているからです。

その日本の心「和魂」を体験していただくのが7月から9月に開催される「和魂in萩・津和野」です。萩・津和野に住む人々が、このイベントを通して和魂をお伝えしていきます。

見て、食べて、学んで、体験して、交流する、様々な和のコト「和魂」を用意してお待ちしております。

ゆかた・着物を着ている方にはいろいろな特典もあります！

萩・津和野の古い町並みをゆかた・着物で小粋に歩いてみませんか？

和魂 in 萩・津和野のホームページ（萩市観光協会公式サイトより）

●くらしの文化振興活動のポイント

- ・市民や観光客の和服に対する関心を高めることができた
- ・萩・津和野の「和服が似合うまち」としてのイメージの向上に大きく貢献
- ・萩・津和野ブランドは、シニア世代には非常に人気があるが、若い世代（20代）にはあまり知られていないのが現状であったが、「和魂 in 萩・津和野」の来訪者は20代から30代の若い女性が大半を占めており、リピーターも多いことがわかった。

●着物ウィーク in 萩

古の城下町の町並みを今もとどめる、風情の漂うまち・萩。その町並みに似合う”着物”を着て、まち歩きを楽しんでいただくイベント（10月1日（木）～12日に実施）。着物を着ることで、日常とはまた違った「和」の世界を楽しむことができる。着物を着ている方は特別割引が受けられる他、「和の学び舎」「写真プレゼント」など、萩ならではの”着物体験”ができる。

- 1) 着物レンタル・着付け
イベント期間中、皆様に気軽に着物を着て萩のまち散策を楽しんでいただけるよう、着物のレンタルサービスを実施
- 2) 着物割引
期間中、着物を着ている方には、お食事やお買物の割引や、和小物のプレゼントなどを実施。協賛店で特典が受けられる「着物ウィーク in 萩パスポート」も発行。
- 3) 和の学び舎
着物を着て、和の心で和を学び、和を楽しむ10の和の体験プログラムを用意。着物を着て体験される方は着物割引有。（木の実でアクセサリづくり、竹小物づくり、アートフラワーでコサージュづくり、歴史トーク「龍馬立志の萩」、岩川旗店オリジナル匂い袋づくり、着物で萩城下町散策、ビーズでかんざしづくり、椿オイルを使ったドレッシングづくり、水引でかんざしづくり、お抹茶入門）
- 4) フォトプレゼント
ボランティアカメラマンが会場のあちこちで着物姿の方の写真を撮影、無料でその写真をプレゼント。自分で撮りたい方には、最新のデジタルカメラを無料で貸出。
- 5) 着物フォトコンテスト
萩の美しいまちなみと着物を写真にとって後世に残していきたいというコンセプトから始まった『着物フォトコンテスト』。受賞作品は翌年の着物ウィークのポスターやパンフレット等に使用。



グランプリ
「天高く！」中島昭雄



雅で賞
「4人の軌跡」河本睦

着物フォトコンテスト 2010 受賞作品

●和魂 in 津和野

期間中、着物・浴衣など和装でお越しの方に、お店や施設でさまざまな特典・割引を提供。

- 1) 津和野アート
町中をギャラリーに、津和野町在住・出身の芸術家・作家の作品を展示。
- 2) 伝統工芸士の手技
日本伝統工芸士の作品展示や講座、教室などを実施。
- 3) 和服ファッションショー（着物 de 冠婚葬祭）
七五三や結婚式など、人生の節目に着ける和服をテーマに開催。
- 4) 和服で夜のイベントへ
期間中、津和野町内では様々なイベントを実施。



●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・若い女性に加え、シニア世代にも働きかけることにより、親子二世代による家族旅行を誘発させ、効果的な観光振興を図ることも期待。
- ・現在は山口県や島根県内からの観光客が中心であるが、今後は広島県、福岡県など近県都市部からの誘客を図ることが求められる。
- ・和服を通年で楽しめる萩・津和野のイメージも定着させていくことが必要。

●参照 URL

- ・萩市観光協会 <http://www.hagishi.com/>
- ・津和野町観光協会 <http://www.tsuwano.ne.jp/kanko/>

2. 食関連事例

2-1 発掘・再興

事例名	八戸の食文化を全国に発信～伝統食「八戸せんべい汁」を地域の顔に～				
地域	青森県八戸市	地域特性	地方都市		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	

●くらしの文化振興活動の概要

八戸市では、平成14年12月の東北新幹線八戸駅の開業に向け、新たな特産品を開発しようとする活動が始まった。この活動の中心となったのは、八戸地域8市町村の経済・産業振興の中核を担う（財）八戸地域地場産業振興センター、愛称ユートリーである。ユートリーは、新幹線開業を5年後に控えた平成9年に新たな特産品の開発に着手した。

開発に当たり、ユートリーは、八戸市、商工会議所、デザイン協会等をメンバーとする開発研究会を立ち上げ、その下に煎餅、菓子、農産加工、水産の4つの部会を設けた。その後、開発は、煎餅組合や菓子商工業組合などの業界を巻き込んで進められ、最終的に「八戸せんべい汁」を含めた10数種類の試作品が完成した。八戸市は、現在、地域の活性化を図るため、市民団体と行政側が一体となって地域の伝統食八戸せんべい汁を商品化し、そのブランド・イメージの確立に努めている。まず八戸せんべい汁の商品化に当たっては、せんべいは各社自社製のものが使用されたが、パッケージやスープは共通のものが使用された。そして、製品レベルの均一化、資材や材料の共同購入、製造・販売の協力・分業化、販売先の取り決めなどを行い、平成11年4月に八戸せんべい汁の販売が八戸市内で一斉に開始された。当初生産販売協力会は、期待と不安が入り混じる中、初年度2千個販売するという販売目標を立てていた。しかし、予想以上の売れ行きが続き、最終的には4万個以上を売り上げ、八戸せんべい汁は販売開始1年目からヒット商品になった。

●くらしの文化振興の経緯

ユートリーによる新たな特産品の開発研究会では、地元の素材等を活用した様々な候補を検討したが、八戸市には江戸時代から200年以上続くこの地方独特の伝統食「八戸せんべい汁」があることに思いが至った。これは、鶏肉や魚で出汁をとった鍋におつゆ用の南部せんべいを割り入れて煮込んだ郷土料理で、地元の人にとってはごくありふれた身近な家庭料理である。その食感は、固いような柔らかいような、いわゆる「パスタのアルデンテのよう」と評される。ユートリーが様々な試作品を全国の200人のモニターに送り試食してもらったところ、「八戸せんべい汁」は回答者の9割以上が「おいしい」と答えるなど高い評価を得た。そこで、ユートリーは、この試作品をつくる技術を煎餅組合に対して移転するとともに、組合員に対し商品化についての説明会を行った。参加者からは、「今更せんべい汁なんて」と商品化に消極的な意見も聞かれたが、最終的に賛同した6社が生産販売協力会を設立し、八戸せんべい汁の商品化が決まった。

●くらしの文化振興経緯図



●くらしの文化振興活動のポイント

- ・「汁研」の活動は市民のボランティアによるものであったが、行政や、煎餅組合、飲食店など関係団体の支援・連携により商品化や普及に結びついた。
- ・八戸せんべい汁のパッケージ商品数や取扱飲食店数の増加などの定量的効果のほか、地元の人たちの意識の変化が大きな成果であり、煎餅以外の業界の関係者は「煎餅でできるなら、自分たちでもできるんじゃないか」と活動に前向きになった。
- ・八戸せんべい汁はB-1グランプリで平成19年から3年連続2位に輝くなど高い評価を受けたことから、市民が八戸せんべい汁の価値に改めて気付き、今では自信を持って人におすすめできる郷土自慢の一品になってきた。

●プロジェクトS

平成15年に、ユートリーは、八戸せんべい汁を全国的なブランドにするとともに、八戸の食文化として情報発信するため、「プロジェクトS（せんべい汁）」と銘打った取組を開始した。そのねらいの一つは「南部せんべいの二の舞にならない」ということであった。南部せんべいの発祥地は八戸地方といわれるが、今では岩手県盛岡市の名物との印象が強くなっている。南部せんべいにはこのようなイメージを持たれてしまったという反省もあり、早急に「八戸せんべい汁」のブランドを確立したいという思いがあった。プロジェクトSの内容は、八戸せんべい汁を扱う飲食店の目印となる小旗やマップの作成、せんべい汁の食エリアを確定して調理法の違い等を把握する歴史・民俗調査、販路開拓や料理・商品の開発のための試食会「おふるまい」の開催等である。こうした事業を進めるにあたっては、ワーキンググループが設けられ、やがてそれが母体となって「八戸せんべい汁研究所」（愛称「汁^レ研」（じるけん））が誕生した。

「汁^レ研」結成の中心となったのは、当時ユートリーの職員で、現在は「汁^レ研」の事務局長でもあり、八戸広域観光推進協議会の観光コーディネーターを務める木村聡さんである。八戸せんべい汁の商品化にあたって中心となった一人で、商品化された後も休日にボランティアで県内のイベント会場などに出向き、「おふるまい」によるPRに努めるなど、八戸とせんべい汁に強い愛着を持った人である。この木村さんの思いに賛同する12人の市民が集まり、「汁^レ研」の活動はスタートした。平成16年には、「汁^レ研」は、市民ボランティア団体として独立し、プロジェクトSで行った活動を継続して実施することとなった。

●B-1 グランプリの開催

平成18年2月には、「汁^レ研」は、“「八戸せんべい汁」ブランドの全国展開”と“食によるまちおこし団体の組織化”を目的として、第1回「B-1 グランプリ」を地元八戸市で開催した。

このB-1 グランプリが生まれたのは、「汁^レ研」のメンバーによる雑談がきっかけだった。当時八戸せんべい汁は土産品としての販売額が順調に推移し、マスコミに取り上げられる回数も増えるなど盛り上がりを見せていたが、あくまで青森県内でのものだと感じていた。そこで、どうすれば八戸せんべい汁のブランドを全国展開できるかと考えた。

自分たち同様ご当地グルメでまちおこしをしている団体は全国にあるが、今まで横の連携がなかったことに改めて気づき、一度みんなで集まれば話題を集めることができ、全国的な情報発信ができるのではないかと考えた。その結果、全国に呼び掛けがなされ、「汁^レ研」のほか静岡県富士宮市の「富士宮やきそば学会」や福岡県久留米市の「久留米やきとり学会」など10団体が参加する形で第1回B-1 グランプリが行われた。この大会には全国から1万7千人もの人々が詰めかけ、マスコミにも大きく取り上げられ、初回から大成功に終わった。

B-1 グランプリには、“「八戸せんべい汁」ブランドの全国展開”のほかに“食によるまちおこし団体の組織化”という目的があった。組織化によって情報発信力を強め、各地のご当地グルメのブランド化に役立てることを意図している。このため、大会初日の夜に出展10団体が集まり、全国規模の「B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」を結成した。この連絡協議会は、「愛Bリーグ」という愛称で呼ばれている。

●八戸市による「八戸ブランド」づくりへの支援

平成18年の商標法改正に合わせ、地域団体商標を出願、登録しようとする団体に対し、その経費を補助する「八戸ブランド商標登録支援事業」を設けている。商標が持つ出所表示機能、品質保証機能、広告宣伝機能を活かし、商品の差別化や高付加価値化を図りブランド化を目指すものがある。「八戸せんべい汁」も、当制度を活用し地域団体商標を出願した。

現在、対象を地域団体商標だけではなく、商標全般に拡充し、またブランド化の基礎となるコンセプトづくりや計画策定等の初期段階に対してもその経費を補助している。加えて、ブランドづくりの概要・意義等を普及啓発するため、セミナー開催や弁理士による相談も実施している。

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

・八戸せんべい汁の商品化で苦労したのは、試作品の開発よりも、実際に製造・販売するシステムづくりと、それを煎餅製造業者に理解して取り組んでもらうまでの過程であった。開発は比較的スムーズであったが、試作品を製造・販売する際、誰が作って・誰が売ることが問題であった。商売敵の煎餅業者同士と一緒に取り組む必要があり、製造から販売に至るまでのシステムや一連の流れを作るのに苦労した。

・現在の課題は、模倣品、便乗品対策。ブランドの価値を守り、料理や店、製造業者や製品のレベルをさらに上げ、八戸せんべい汁のクオリティを高め、信頼されるブランドにするための事業にウェイトを移していくことが重要になってきている。

・活動を行う上での事務局の人手が不足している。

●参照 URL

- ・八戸せんべい汁研究所 <http://www.senbei-jiru.com/>
- ・（財）八戸地域地場産業振興センター <http://www.youtree.com/>
- ・八戸市 <http://www.city.hachinohe.aomori.jp/>

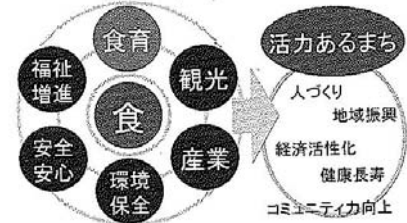
2-2 連携交流

事例名	「御食国」若狭おばまの伝統「食」を中心に捉えた「食のまちづくり」				
地域	福井県小浜市	地域特性		地方都市	
目的	発掘・再生	連携・交流	●	発信	

●くらしの文化振興活動の概要

小浜市には、飛鳥・奈良時代に伊勢・志摩や淡路と並んで、朝廷に食を供給していた「御食国」としての歴史がある。また、平安時代以降は、「若狭もの」という呼称のもと、京の都の食卓も支えていた。

小浜市では、こうした伝統ある食に着目し、食のまちづくりを推進している。食は、地域の伝統・文化・生活と密接な関わりをもっており、食に光をあてることによって、地域の総合的な政策も大きく方向づけることができる。例えば、歴史と伝統ある食文化に着目することは、地域のアイデンティティーの形成に寄与することになる。安全な食をたゆみなく供給するためには、農林水産業をはじめとする産業の振興が欠かせない。また、食を大切にすることは、それを育む自然環境を保全することにつながり、食を通じて人と人との交流も生まれる。そもそも人が生きるうえで欠くことのできない食をとらえることで、教育の大切さも見えてくる。このように、小浜市では、食を広範にとらえてまちづくりを行っていきたいと考えている。地域の財産である豊かな食に着目し、食を起点に、産業、観光、教育、文化、環境、福祉に至るまで、あらゆる分野の施策を一体的に展開する「食のまちづくり」を展開している。



安全な食をたゆみなく供給するためには、農林水産業をはじめとする産業の振興が欠かせない。また、食を大切にすることは、それを育む自然環境を保全することにつながり、食を通じて人と人との交流も生まれる。そもそも人が生きるうえで欠くことのできない食をとらえることで、教育の大切さも見えてくる。このように、小浜市では、食を広範にとらえてまちづくりを行っていきたいと考えている。地域の財産である豊かな食に着目し、食を起点に、産業、観光、教育、文化、環境、福祉に至るまで、あらゆる分野の施策を一体的に展開する「食のまちづくり」を展開している。

●くらしの文化振興の経緯

平成 12 年 8 月に村上利夫氏が市長に就任し、食のまちづくりがスタートした（同市長は平成 20 年 8 月に退任）。食のまちづくりは、「市民一人ひとりがまちづくりの主人公である」との原点に立ち返り、その船出から今日に至るまで、市民の参画を鉄則として進めてきた。

村上市長就任の翌月には、食のまちづくりにかかる各分野別に 15 のプロジェクトチームを設置し、そのすべてに、市民と市職員がメンバーとして加わり、官民協働で食のまちづくりのフレームワーク構築に向けて議論を開始した。食のまちづくりの構想を実現していくため、また、今後、食のまちづくりを持続的に展開していくため、その裏づけとして、平成 13 年 9 月 21 日に小浜市食のまちづくり条例を制定し、平成 14 年 4 月 1 日から施行した。条例の起草にあたっては、平成 13 年 2 月 15 日に起草委員会を設置し、合計 6 回の会議を通して検討した。基本原則や、食のまちづくりの構想を実現していくための基本施策のほか、市民や事業者にも主体的に参画してもらい、互いに理解し合い、協働してまちづくりを進めていくこと等を規定している。

その後、市民参画の輪を市内全域にわたる取組へと広げていくため、平成 13 年度に「いきいきまちづくり事業」を創設し、地区別の事業化を図るなど、様々な取り組みを展開している。

●くらしの文化振興経緯図

組織の動き	村上利夫氏市長就任	15 のプロジェクトチーム設置	まちづくり委員会設置 (12 地区)	中名田農産物生産者グループ設立	食のまちづくり交流協定 (静岡県富士宮市)
再生活動の動き		いきいきまちづくり事業創設	食のまちづくり条例施行	御食国若狭おばま食文化館オープン 各地区別の振興計画策定 キッズキッチンスタート	B-1 グランプリ参加 御食国サミット 若狭おばまブランド認証制度 観光交流人口 183 万人 (H20) ↑ 76 万人 (H11)
	H12	H13	H14	H15	H16～

●くらしの文化振興活動のポイント

- ・市長のトップダウンの構想を契機とし、条例化することによって継続的な取り組みとなった。
- ・食を軸に据えた総合的なまちづくりを、計画段階から実施に至るまで、市民参加・協働をベースに展開することで、全市的に活動が広がってきている。
- ・食資源の活用、生涯食育、地産地消など、一貫して「地元産」にこだわり、まちづくりにお取り組んでいる。
- ・「御食国」としての歴史をはじめ、食に関わる伝統的な資源が豊富にあった。

●御食国若狭おばま食文化館

平成 15 年 9 月には、やはりプロジェクトチームでの検討結果に基づき、食のまちづくりの拠点施設「御食国若狭おばま食文化館」（以下、単に「食文化館」とする）をオープンした。食文化館は、若狭地方や全国各地の食文化の展示ゾーン、調理体験や伝統工芸の体験ゾーン、そして憩いと安らぎの空間を提供する温浴施設により構成される、体験・参加を重視した食の総合ミュージアムである。観光交流の拠点であるとともに、食育や伝統行事、学校の授業など、地域活動の拠点としての性格を併せ持ち、年間約 25 万人もの人々が集う。



●いきいきまちづくり事業

市民参画によるフレームワークづくりが着々と進んでいくのと併行して、次には、市民参画の輪を市内全域にわたる取組へと広げていくため、平成 13 年度に、「いきいきまちづくり事業」を創設した。本市は、旧町村単位を基本とする 12 の地区からなるが、この事業では、まず、地区ごとに、住民による「まちづくり委員会」を組織し、地区の将来ビジョンとまちづくり活動の工程表を盛り込んだ振興計画の策定に着手した。

そして、3 年の時を経た平成 15 年度末、ついに全地区の振興計画が完成した。長い歳月を要したが、その分どの地区も、それぞれの特色を活かした独自のグランドデザインができ上がった。その翌年度からは、まちづくり活動の実践段階へと移行した。

伝統行事の再興に向けた PR 活動、郷土史の編纂やふるさとカルタの作製、若狭湾の海水を原料とした天然塩づくりなど、地区住民の創意と工夫により、それぞれの特色を活かした活動が展開されている。

●地場産学校給食

市内の多くの小中学校では、地域の生産者から提供された米や野菜による地場産学校給食を実施している。先駆けとなったのは、市内山間部の中名田地区にある、全校児童約 50 人が通う中名田小学校である。生産者たちは、年々高齢化が進む中で、学校が求める量の野菜を供給し続けていくことができるだろうかとの懸念からなかなか決心がつかずにいたが、最後は森下校長の熱意に折れ、生産者 8 名が「中名田農産物生産者グループ」を立ち上げ、平成 15 年 1 月から、学校給食への地場産野菜の供給を開始した。

●キッズキッチン

平成 15 年度から市の事業としてスタートした幼児の料理教室キッズキッチンでは、インスタント食品は一切使わず、地場産の米、野菜、魚を材料に、子供たち一人ひとりが包丁やフライパンなどの調理器具を手にとって料理にチャレンジする。

市内の保育園・幼稚園では、キッズキッチンがカリキュラム化されており、すべての年長児が体験できるしくみとなっている（本市では、このしくみを「義務食育」と称している）。週末に実施する公募型キッズキッチンには、市内だけでなく、市外、時には県外から参加する子供もいる。

行政主導でスタートしたキッズキッチンであるが、最近では、子育て世代を中心に設立された市民ボランティア団体「食育サポーター」が、市からの委託を受けてキッズキッチンを実施しており、より地域に根ざした活動へと発展している。



●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・「いきいきまちづくり事業」の事業開始当初は、地区によってまちづくりに対する意識に大きな温度差があり、進捗が遅れる地区もあり、必要に応じて市の職員が話し合いに参加するなどのサポートを行い、軌道に乗せていった。
- ・生涯食育のこれまでの取り組みのさらなる地域への浸透を図り、多くの世代・層での実践へとつなげていく必要がある。
- ・「食のまち」としてのイメージの定着や、観光交流人口の拡大を活かし、地場産業の振興や雇用確保などの活性化へとつなげていく必要がある。

●参照 URL

- ・小浜市 <http://www1.city.obama.fukui.jp/>

2-3 発信

事例名	ゆずの市場開拓から始まった地域づくり				
地域	高知県馬路村	地域特性	農山村		
目的	発掘・再生	連携・交流	発信	●	

●くらしの文化振興活動の概要

昭和50年代半ばには、ゆずの生産が多くなったが、青果出荷の比率が低く、搾汁したゆず酢が売れない為に、新しい市場を求めて関西や関東の百貨店催事に参加した。その中、昭和55年から、将来生き残るためにはエンド・ユーザーへの直接販売・産地直送が必要と考え、試行錯誤の中、取り組むことになった。

お客さんはすぐには増えなかったが、方向は変えずそのチャンスを待った。数年後、大手宅配業者が村まで荷物を集荷に来てくれるなど、地方からの産直に追い風が吹き始め、その時、初めてこの方法で産地が生き残れるかもしれないと思うようになる。

数年を経過した昭和60年代、ゆずを搾ったゆず酢の販売では、簡単に市場が拡大しないと感じ、ゆず加工品の開発に入る。しかし、事業そのものが赤字続きで、商品開発後の設備投資も組織の理解が得られず、販売実績を積みほかなかった。それでも少しずつ商品を増やし、実績は上がっていった。そして昭和63年ヒット商品となる「ごっくん馬路村」の開発に入る。目標とする商品イメージは、村の谷川を流れるような限りなく水に近いゆずドリンクであった。試行錯誤の結果、商品が出来上がるが、当時これほどまでに村の宣伝やイメージアップにつながるとは思っていなかった。

●くらしの文化振興の経緯

馬路村では昭和40年代、農協の指導のもと安定した収入源を確保する方策として、ゆずの栽培が始められた。数年後にはかなりの収穫量になったものの特別な施設があるわけでもなく、農家が1つ1つ手絞りで絞ったものを農協が集め販売する、という途方もなく大変な作業を続けていたが、昭和50年、農協に搾汁施設を作り、これを機に、果汁や皮を使った加工品の開発、生産が始まった。生産者の間から、きれいなゆずの青果を栽培、販売するよりも、ゆず酢の原料となるゆず生産を求める動きが生じたことから、ゆず酢等の加工品の開発、販売に生き残りを賭けることとし、農協職員が中心となって、20年以上に及ぶ商品開発とマーケティング活動が始まった。

昭和61年には、ポン酢しょうゆ「ゆずの村」、昭和63年にはゆずジュース「ごっくん馬路村」(馬路村公認飲料)を商品化した。また、日本の101村展において昭和63年にポン酢しょうゆ「ゆずの村」が最優秀賞、平成2年にゆずジュース「ごっくん馬路村」が農産部門賞を受賞したことも、馬路村を全国区にしたきっかけの一つであり、商品は西武百貨店など大手百貨店を通して全国展開を始める。

『ごっくん馬路村』は、テレビCMの放映の効果でヒット商品となり、全国に『ゆずの馬路村』としての認知度を一気に高め、生産が追いつかない状態にまでなった。生産性を上げるため、平成5年には工場を増設した。後に東京吉祥寺でのアンテナショップ、インターネット販売の取り組みも開始した。

平成7年に「馬路村情報発信計画」が策定され、各種イベントによる交流人口拡大が図られる。

平成8年(1996) 柚子廃棄物利用堆肥センターが完成し、自然循環型ユズづくりが開始される。

平成11年に「馬路村活性化協議会」を設立し、農業、林業、観光を中心とした活性化ビジョン「馬路村まるごと販売術」を作成する。

平成12年からは、ミニテーマパーク「ゆずの森構想」の整備を開始した。

平成16年には、村内の産業を活かした間伐・川漁師・木工体験を行う修学旅行生の受け入れを開始する。

平成18年には営林署貯木場跡地にゆずの森加工場をつくり、生産・加工・販売・交流までの構想を展開している。

●くらしの文化振興活動のポイント

・経営が軌道に乗り始めてからの施設整備等において、農協の組織としての理解が得られたことが取り組みを進展させる大きな力となった。商品開発と施設整備に難航するものの、人のネットワークと組織の理解に支えられて取り組みが進展した。

・他の商品と差別化を図るため、「商品とともに、村を売る」ことに取り組み、ヒット商品などの成功体験を得て、村民意識が前向きに変わっていった。

・東京や大阪に何年も売り込みに行くなど、継続してマーケティングに取り組んだ。その活動の中で、都市の人の求める田舎のイメージが「のんびり」や「ゆっくり」であることを実感し、顧客に送るダイレクト・メールで、商品の情報とともに田舎のゆっくりとした贅沢な時間などを情報として発信し続けた。こうしたブランド化と情報発信を通して、林業以外で村外との交流がなかった「馬路村」への年間6万人をこえる観光交流につながった。

・また、1980年代にはまだ目新しかった「安全なもの売る」ため、農家がゆずの農薬の防除をしなかったことを逆手にとって、「無農薬」を売りの1つとし、他の商品との差別化を図った。今日では本格的な有機栽培に取り組んでおり、ゆず農家だけに留まらない地域全体の取り組みとしている。

●「馬路村」のブランド化

ユズ加工商品に「馬路村」の特徴を出すため、村内に暮らす子供たちやお年寄りを起用し、村の地名や山、川をパンフレットや情報誌で紹介する「馬路村をまるごと売り込む」を馬路村農業協同組合が中心となり開始した。全国区となった馬路村ユズ製品は、約 35 万人の顧客を抱え、売り上げは年間 30 億円に到達。役場より多い 60 人の雇用を担い、全国各地から年間 200～300 団体の視察団を含めた 6 万人の観光人口と馬路村の活性化につながった。

●「馬路村情報発信計画」の交流イベント

平成 7 年の「馬路村情報発信計画」策定に伴い、地域の特徴を活かしたイベントを開催し交流人口拡大の拡大を図ってきた。800 人のランナーが、山道、坂道、くねくね道の心臓やぶりと呼ばれるコースに挑む「おらが村心臓やぶりフルマラソン」や、「山師達人選手権大会」は昔の山（林業）の作業の毎年 300 人が集う競技大会を開催している。

●「ゆずの森構想」の推進

馬路村農協では、農産物直売所「ゆずの森」、パン工房「ゆずの花」や視察客のための研修所や会議室を、森林鉄道の連絡所跡、車庫跡、旧営林署関係施設等を改修して整備した。これらは、新工場や観光客向け施設等を含むミニテーマパーク「ゆずの森構想」の一環で、交流施設の整備と新商品開発により更なる観光受け入れを推進している。

●「まかいちよって家」と馬路村体験コース

本格的なユズ加工商品の販売と同時期（昭和 50 年代中旬）より開始された温泉施設整備や、村のシンボルとして復元された森林鉄道や、急斜面で木材運搬に使われたインクライン（水を動力にしたケーブルカー）の復元、村案内所「まかいちよって屋」からの情報発信は、ユズによるブランド化と相まり、観光客への高い満足感提供に寄与している。



ふるさとセンター
「まかいちよって家」

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

・当初は何もノウハウがないところから商品開発などに取り組んだ。農協の組織としての理解が得られ、農協職員が中心となって継続的に試行錯誤を含めた取り組みを進めてきた。

●参照 URL

- ・馬路村農業協同組合 <http://www.yuzu.or.jp/>
- ・馬路村 <http://www.inforyoma.or.jp/umaji/index.html>

3. 住関連事例

3-1 発掘・再興

事例名	栄光をふたたび！木曾漆器発祥の地の発掘・再興				
地域	長野県木曾町	地域特性	山村		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	

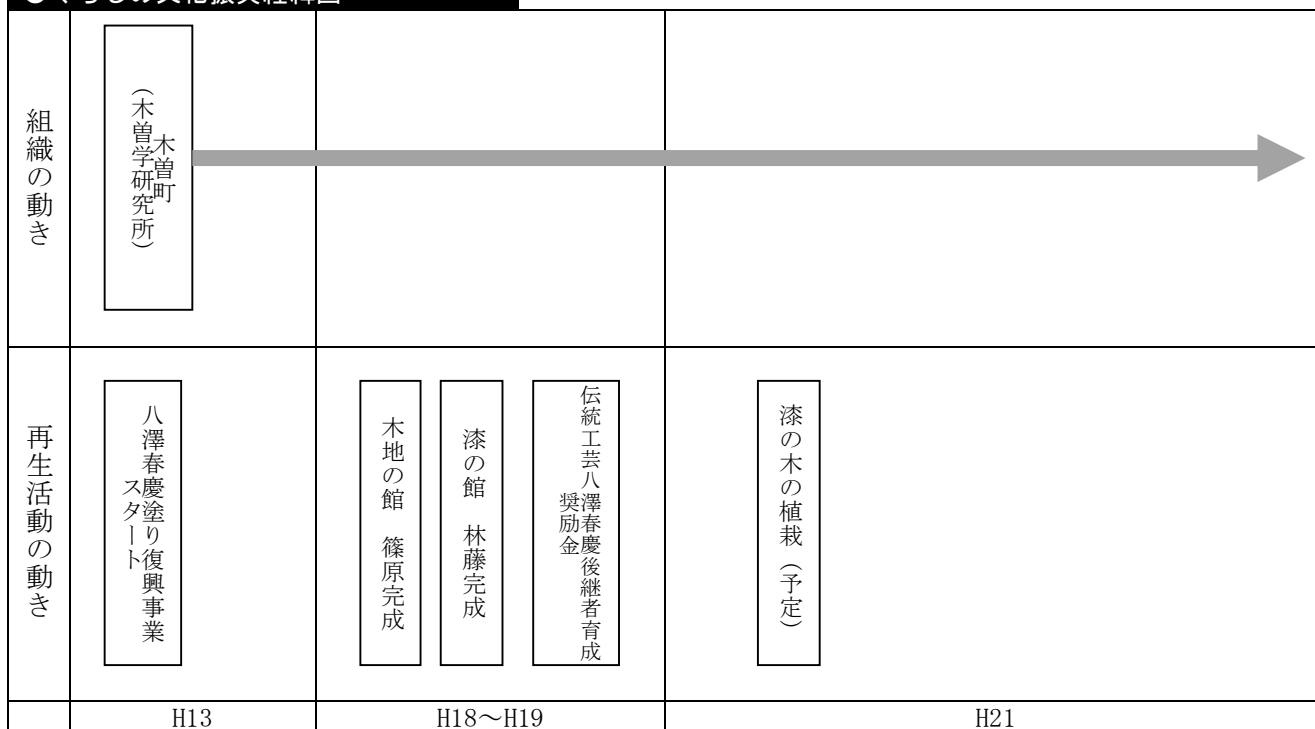
●くらしの文化振興活動の概要

長野県木曾町は、人口13,119人、面積476.06km²の町である（平成21年4月現在）。木曾町福島にある八澤地区は、中山道福島関所で有名な福島宿に位置し、木曾川と支流が交わる山水豊かなところである。木曾ひのきをはじめとした天然の良材と清澄で多湿な空気は、漆器生産に絶好の条件であった。八澤地区は木曾漆器発祥の地となり、「八澤春慶塗」としてその名が伝えられている。八澤春慶塗の特徴は、一般的な漆器と異なり、塗った面の木地が見えることである。このような特徴を持つ八澤春慶塗は、は、俗に「八澤物」と言われ、ひのき・さわらの良材を用い、堅牢をもって名をなし江戸、高崎、京都、大阪などで問屋を経て売りさばかれ、その名が広く知られることとなった。近年になってこの八澤春慶塗の復興の気運が高まり、平成13年から復興事業がスタートすることになった。

●くらしの文化振興の経緯

八澤春慶塗の復興の気運を高めたのは、木曾学研究所の活動である。この研究所は、行政主導で発足したものである。そこでは、住民が主体となり、「過去に学び地域をみつめ、将来を創る」をモットーに地域の歴史文化を学ぶ活動に取り組んでいる。八澤春慶塗の復興事業は、人体や環境に害のない漆器が見直されていることを受け、木曾に生きる人がもっと身近に漆器を使い、八澤春慶塗の伝統産業を守っていききたいとの思いから始まった。町の中心地にある二軒の空き家の寄付を受け、一軒は曲物指物などの木地づくりの拠点として改修し、もう一軒は漆塗りの拠点として改修することとした。この復興の拠点の改修は、平成18年～19年にかけて完了した。その結果、木地の拠点は「木地の館 篠原」となり、塗りの拠点は「漆の館 林藤」となった。また、職人を育成することも必要であった。このため、木地師と塗師の指導者の確保が行われ、それぞれの職人を育成する活動が進められた。

●くらしの文化振興経緯図



●くらしの文化振興活動のポイント

- ・木曾ひのきをはじめとした天然の良材と清澄で多湿な空気は、漆器生産に絶好の条件であった。
- ・木曾町は中山道沿いに発展した街であり交易の拠点であった。
- ・木地屋と塗師屋が近隣で暮らせる環境があった。

●八澤春慶塗の復興事業

八澤春慶塗の復興の気運を高めたのは、木曾学研究所の活動である。この研究所は、行政主導で発足したものである。そこでは、住民が主体となり、「過去に学び地域をみつめ、将来を創る」をモットーに地域の歴史文化を学ぶ活動に取り組んでいる。

八澤春慶塗の復興事業は、人体や環境に害のない漆器が見直されていることを受け、木曾に生きる人がもっと身近に漆器を使い、八澤春慶塗の伝統産業を守っていききたいとの思いから始まった。この事業の目標は、地元産の木材や漆を使って、木曾在住の木地師・塗師が作り、地域の良さ、実用品の素朴さ及び質の高さを重視した八澤春慶塗を復興することである。

こうして「木の香りあふれる豊かな木曾らしさ」の実現に向けた活動が具体的に動き出した。この活動は、中心市街地の活性化を通じた伝統文化の保護を担うことも期待された。

活動にあたっては、まず復興の拠点が必要であった。そこで、町の中心地にある二軒の空き家の寄付を受け、一軒は曲物指物などの木地づくりの拠点として改修し、もう一軒は漆塗りの拠点として改修することとした。この復興の拠点の改修は、平成18年～19年にかけて完了した。その結果、木地の拠点は「木地の館 篠原」となり、塗りの拠点は「漆の館 林藤」となった。

また、職人を育成することも必要であった。このため、木地師と塗師の指導者の確保が行われ、それぞれの職人を育成する活動が進められた。



漆の館（木曾町福島上の段）

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・木曾町は、職人の後継者を育てるために伝統工芸八澤春慶後継者育成奨励金を支給しているが、5年の期限が一つの節目であるため、その後の独立が課題となっている。
- ・また、漆器は製作に手がかかり、価格が高額になるため、その売れ行きは景気に左右されやすく、安定した販路を確保する必要がある。今後、宿泊・飲食業者への使用の提案や地元の特産物等とのパッケージ企画なども検討しなければならない。
- ・さらに、漆器は塗り直すことで永く使用できるので環境にやさしいという認識を広めることも必要である。

●参照 URL

- ・木曾漆器工業協同組合 <http://kiso.shikkikumiai.com/main.html>

3-2 連携・交流

事例名	京の町屋の保存・再生				
地域	京都府京都市	地域特性		町家	
目的	発掘・再興	連携・交流		発信	●

●くらしの文化振興活動の概要

千年の都、京都の町家。平安京の町割りを下敷きに中世、近世を経て洗練と完成を見た伝統的な都市住宅が京町家と呼ばれている。ひとつひとつの町家が伝統工法の優れた技術の集まりであると同時に、町家はそれぞれが連なり、向き合うことで、奥行きのある京都の町並みをつくり上げてきた。隣りあって住むなかで培われた作法、四季を愛でる工夫や年中行事、そのような都市の生活と文化を継承する受け皿が京町家である。

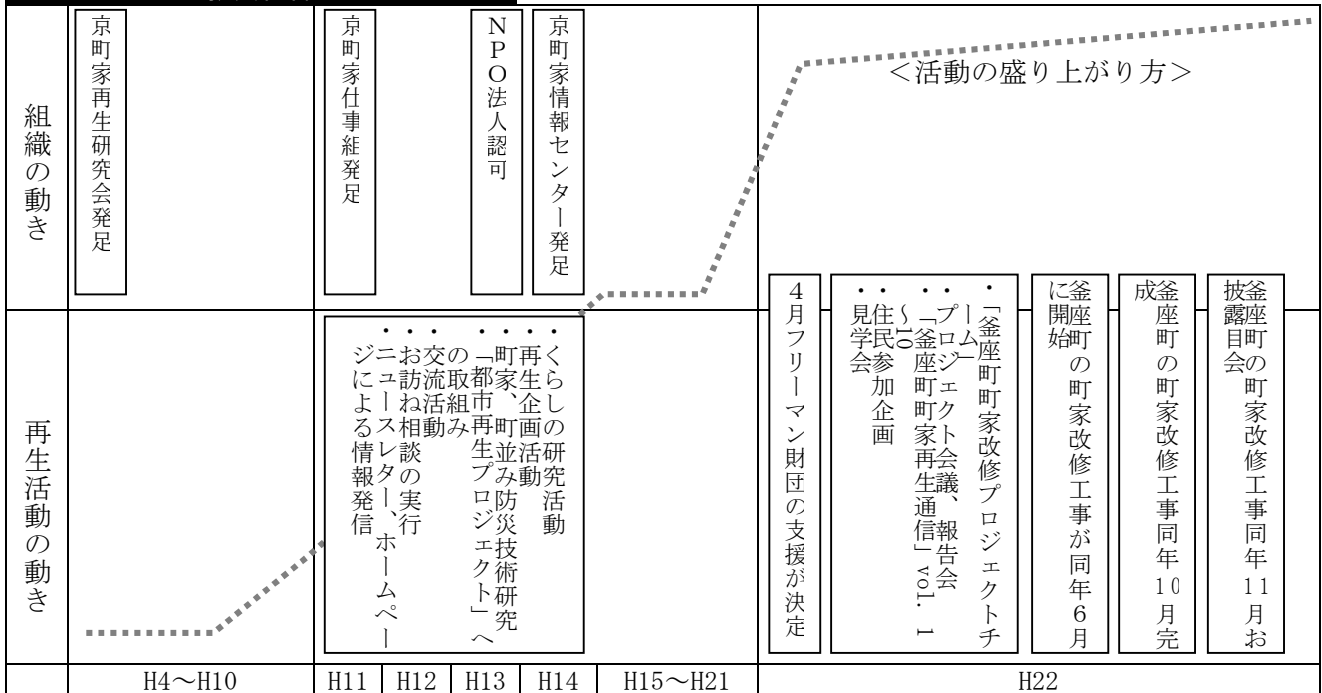
伝統的町家の継承といっても、町家を昔のままただ保存していくだけでは、現在の多様な生活条件、社会状況に対応できない面がある。まず、ここに暮らす人々に対して住まい易さ、安全性などが確保されなければならない。また、本来、職住共存の場であった町家の経済基盤として、新しい活用する方法を考えることも必要である。長年に亘って、京町家の中に蓄積されてきた暮らしと建物の様々な知恵や工夫を再評価し、それを現代に生かす形で町家を継承していくことが必要であり、これが京町家の再生である。



●くらしの文化振興の経緯

高度経済成長期から、バブル経済期以降、多くの伝統的な町家が壊され、歴史的な町並みが経済価値優先の流れの中で失われてきた。この状況を何とかしたいと町家の保全・再生を望む有志によって、平成4年先人の知恵の賜物である京町家を継承しようと町家再生研究会が発足した。その後、京町家の保全、改修を行なう技術的な実践部隊として平成11年京町家仕事組が生まれ、同時にそれを見守りながら、実際に町家に住む人たちが中心となり、京町家の暮らしや文化の継承を目指す京町家友の会が誕生した。そして、京町家に住みたい人と貸したい人の橋渡しをする京町家情報センターが地元不動産業者との協働体として平成14年に設立された。

●くらしの文化振興経緯図



●くらしの文化振興活動のポイント

- ・町家を保存しようという地域の土壌があった
- ・建築専門家の熱意ある行動
- ・ワールドモニュメントファンド（World Monument Fund（以下 WMF）の Watch List）への指定
- ・フリーマン財団からの支援。
- ・保存の熱意だけでなく居住者、地域住民、専門家、関心ある多くの人のネットワークの存在。
- ・実際に町家を改造した職人の存在（町家作業組）と日々伝統工法による町家再生の技術的継承努力・技術伝承活動。
- ・実際に生活している町家の実態を踏まえ生活の場としての町家の再生という特性を踏まえて一般の町家居住者、所有者からの改造、再生依頼を受けて工事を担当し暮らしの中で使う、住む町家を保存している。
- ・また、京町家研究会、京町家作業組、京町家友の会、京町家情報インターという組織的な保存活動が建物という形だけでなく、そこで行われる生活そのものも再生するという京町家ならではの特性を十分理解した活動

●釜座町町家改修プロジェクト

一方で、釜座町の町家が空いていて、借り手を探しているという話が明倫学区のまちづくり委員会から再生研にあり、作事組の事務局として借りてはどうかという案が持ち上がっていた。釜座町は何か広がりのある使い方を望んでいるということで作事組の事務局のみならず、京町家ネットがここをセンターとしての活用できればいいという意見がまとまった。この家は釜座町の町内会所有であることも後に判明。その後、今回の企画がフリーマン財団の支援の下、実現されることが決まり、5月10日に京都市での発表、授与式を終え、6月15日から釜座町の町家改修が始まった。



釜座町町家改修計画図



釜座町町家改修プロジェクト会



見学会

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・保存町家の活用方法。
- ・地域への取組。
- ・行政との連携を如何におこなうか。
- ・町内（住民）の力（明倫学区まちづくり委員会）とNPOとの連携を如何に行うか。
- ・町家を中心としてこの地区の景観計画の必要性和行政との連携。
- ・地域連携型ネットワークについてシンポジウム等を通じた全国への発信の強化
- ・町家に住んでもらう人の募集。
- ・築年代との関係と施主の予算との関係で町家として保存再生が可能かの折り合いの付け方



●参照 URL

- ・京町家再生研究会 <http://www.kyomachiya.net/saisei/index.html>

3-3 発信

事例名	8000 点の民具を只見町方式で整理しインターネットで検索できるエコミュージアム				
地域	福島県只見町	地域特性	町家		
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●	

●くらしの文化振興活動の概要

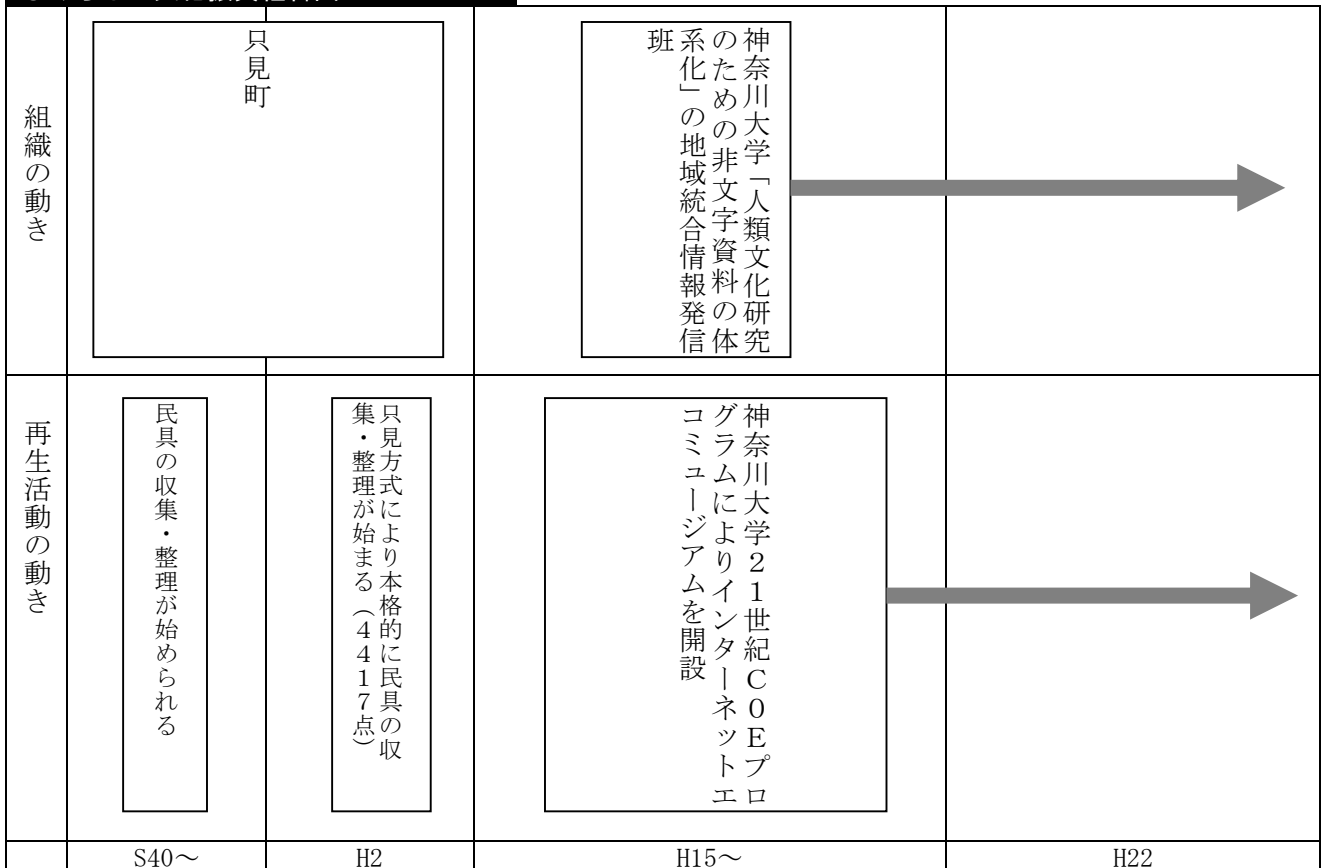
福島県南会津郡只見町は、福島県の北西部に位置している。只見町は特に雪が多く、3m以上も積雪することがある。生業は、農業を中心としているが、只見町の大半が山林であるために、これを利用する伐採業も盛んに行われていた。冬季は、雪におおわれ農業を行うことができないため、雪を利用した木材搬出、関東稼ぎと呼ばれる出稼ぎによる屋根葺等が行われ、春～秋までは農業、冬季には別の職業という具合に兼業を行う家が多く、それらの職に関する民具が多く確認されている。こうした只見町の豊富な民具であるが、使用者が整理作業を行うという独特な整理スタイルを確立し、一般的に“只見町方式”という呼び方で、これから民具整理を行う自治体の注目を浴びてきた。只見町では、使用者＝調査者になることで、細かい民具の情報までがカードに記入され、今まで、研究者が着目してこなかった民具の情報が盛り込まれている。

“只見町方式”によって整理された民具は、4,417点にのぼり、1992年に『図説 会津只見の民具』という報告書にまとめられている。それ以降も継続して整理作業が進められ、現在では8,000点以上の民具が収蔵・整理されている。神奈川大学 21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の地域統合情報発信班では、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」を中心に、只見町の豊富な資料を体系化し、わかりやすく総合的に提示できるようなインターネット上のシステムを開発することにした。1960年代にジョールジュ＝アンリ・リヴィエール (G. H. Rivière) によって提唱されたエコミュージアムの概念にならってこのネットのエコミュージアムは民具を通して自然と人間の相互関係を紹介している。只見町インターネット・エコミュージアムは「只見町の風景」「自然と暮らし」「只見町の屋根葺職人」「只見町所蔵民具検索」の四つの部門で構成されている。

●くらしの文化振興の経緯

1965（昭和40）年ごろ、農作業の機械化、集中豪雨による集落移転などを背景に、民具はほうっておけば消滅する恐れがあった。町は町民とともに60年代後半から収集を始め、20年以上にわたって町内から膨大な数の民具を集めた。88年にスタートした町史編さん事業で民具の価値が再認識されると、町は90年から本格的な民具の整理に着手。実際に民具を使っていた高齢者を中心に作業は進められた。民具に詳しい町民を主体としたこの整理法は「只見方式」と呼ばれ、全国から注目を集めた。同町黒谷の旧朝日公民館に保管されている。

●くらしの文化振興経緯図



●くらしの文化振興活動のポイント

- ・只見町の町民によって膨大な民具が集められたこと。
- ・町によって全国的にも例を見ない只見方式と呼ばれる分類方法で整理を行ったこと。
- ・4千点以上の民具が整理され報告書にまとめられていたこと。
- ・会津只見の生産用具と仕事着コレクション」という形で、2,333点の民具が国指定重要有形民俗文化財に指定されたこと。

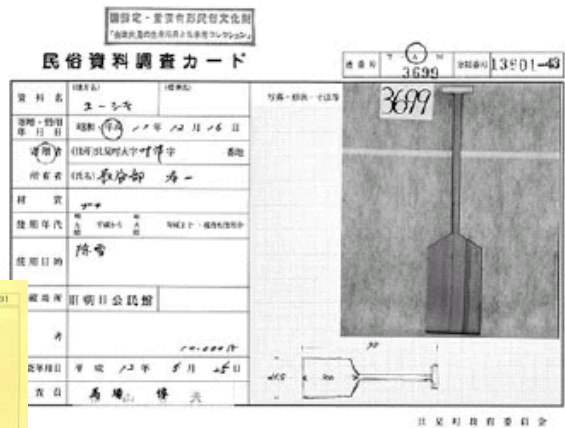
●只見町エコミュージアム

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の地域統合情報発信班では、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」を中心に、只見町の豊富な資料を体系化し、わかりやすく総合的に提示できるようなインターネット上のシステムを開発することにした。1960年代にジョールジュ＝アンリ・リヴィエール (G. H. Rivière) によって提唱されたエコミュージアムの概念にならってこのネットのエコミュージアムは民具を通して自然と人間の相互関係を紹介している。

只見町インターネット・エコミュージアムは「只見町の風景」「自然と暮らし」「只見町の屋根葺職人」「只見町所蔵民具検索」の四つの部門で構成されている。「只見町の風景」では、只見町の小林地区と梁取地区の俯瞰画像から只見町の民俗文化財をクローズアップし、景観とともに映像や解説を見ることができる。「自然と暮らし」では、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の情報を利用し、「山」「川」「里」といった只見町をめぐる環境と「人」を表した概念図からそれぞれに関わる生業を示し、各生業の作業工程を提示している。「只見町の屋根葺職人」は、博物館でいうところの特別展のようなもので、「自然と暮らし」において扱った生業の中から屋根葺職人を選び、さらに詳しい解説を行っている。「只見町所蔵民具検索」は、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として指定された2,333点の民具を検索することができる。また、「自然と暮らし」「只見町の屋根葺職人」と連動しており、文字で示された民具を選択することでそれぞれの民具カードを閲覧することができるようになっている。



只見エコミュージアムトップ画面



民具の調査カード

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・閲覧者が検索しやすい分類が必要であるがそれを優先すると民具の分類が適切でなくなる恐れがあること。
- ・民具名称は、まさに民具につけられた名前であるが、地域ごと、村ごと、家ごと、さらには個人ごとにその名前は違う可能性をはらんでいる。また、複数の作業で使われる民具では、作業によって同一の民具であっても、その作業に特化した名称で呼ばれることがある。
- ・民具は単独で成立する道具ではなく様々な道具と併用されて民俗として成り立っていることを理解してもらうような構成にすること。

●参照 URL

- ・只見町インターネットエコミュージアム <http://www.himoji.jp/tadami-item/>

4. その他関連事例

4-1 発掘・再興

事例名	現代版組踊り「肝高（きむたか）の阿麻和利（あまわり）」					
地域	沖縄県うるま市	地域特性	世界遺産所在地			
目的	発掘・再興	●	連携・交流		発信	●

●くらしの文化振興活動の概要

沖縄県うるま市は、人口117,487人、面積86.01km²の都市であり、沖縄本島中部の東海岸に位置している。現在のうるま市は、平成17年4月1日に具志川市、石川市、勝連町及び与那城町が合併して誕生した。「うるま」とは、沖縄の言葉で「サンゴの島」という意味を持ち、市内には、世界遺産の勝連城跡をはじめとする歴史的遺跡のほか、緑豊かな公園、植物園、ゴルフ場等があり、県外からの観光客や県内の行楽客でにぎわう町である。地域の誇れる資源である「勝連城跡」と英雄と讃えられる勝連城10代目城主「阿麻和利」に着目し、これを題材に地域に伝わる組踊りと組み合わせる現代版組踊り「肝高の阿麻和利」として中学生に演じてもらうことで地域の誇りを再認識し、子どもたちの健全な育成を図る活動を町を挙げて行った取組である。「肝高」は、「きむたか」と読む。これは、「おもろさうし」に見られる古語で、「気高い」、「心豊か」などを意味するものである。

●くらしの文化振興の経緯

平成12年ごろ、当時の勝連町教育委員会教育長の上江洲安吉さんは、無表情で覇気がなく、控え目で挨拶もまともにできない子どもたちを見て、将来に危機感を募らせていた。上江洲さんが活用すべき地域資源として着目したのは、地域の宝である「勝連城跡」と「阿麻和利」であった。曲輪と舎殿跡勝連城跡は、旧勝連町にある世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つである。「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、平成12年に首里城、玉陵など9つの歴史文化遺産が世界遺産として登録されたものである。グスクとは、沖縄県の方言で城を意味する。この勝連城には、15世紀中ごろに阿麻和利という城主がいた。以前から勝連城跡と阿麻和利は地域の人々にとって「地域の誇るべき宝である」という認識が浸透していたのである。旧勝連町では、地域の誇りを再認識し、子どもたちの健全な育成を図ることを目的として、町をあげて現代版組踊り「肝高の阿麻和利」の取組を始めることとした。

●くらしの文化振興経緯図

組織の動き	上江洲安吉氏子ども達の将来に危機感を募らせる	「勝連城跡」と「阿麻和利」に着目	旧勝連町に引き継がれ、「電源地域産業育成支援補助事業」の採択を受けたことから町の事業として本格的に開始	町からの補助金がなくなる	「あまわり浪漫の会」発足			
再生活動の動き	「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産に登録される	平成12年3月勝連城跡地で第1回「肝高の阿麻和利」公演が開催された	平成13年「きむたかホール（収容人数516人）」完成によって継続公演		関東公演・国立劇場おきなわ公演	ハワイ公演開催	倉敷・東京・盛岡公演。公演回数延べ160回、10万人の観客動員	
	H11～12		H13	H14	H15～19	H20	H21	

●くらしの文化振興活動のポイント

- ・元教員であった上江洲安吉さんの子ども達への愛情と将来への悲観が取組を運だこと
- ・子ども達もそれに応えて活動を行おうと思ったこと
- ・郷土の文化資源を自分達の誇りと感じていたこと
- ・町が賛同し本格的に動き出したこと
- ・地域の住民が自分達の活動という意識を持って公共から受け継ぎ活動を継続したこと
- ・町だけに止まらず全国に発信して広く認められることでモチベーションの高まりに繋いだこと

●現代組踊「肝高の阿麻和利」

最初のオリエンテーションに集った子どもの数は、わずか7名。しかし、本番までの3ヶ月間、教育委員会や演出家の平田大一さんらによって行われた地道な努力が功を奏し、2000年3月下旬に行われた舞台本番当日、最終的に集った出演者の数は150名。観劇者数は2日間公演で4,200名にも及んだ。この「勝連城跡」にて実現した奇跡の舞台が、今も続く「肝高の阿麻和利」の記念すべき第1回目の公演となった。

物語のあらすじ：「真夜中の勝連城跡。学校内では、年に一度の「幻の村祭り」なるものが噂になっていた。その真偽を確かめるため、こっそりと城跡に忍び込んだ子供達。そこで、子供達は、雷鳴の中現れた謎の老人「長者の大主」と出会う。彼から渡された巻物には「阿麻和利の乱」の真実が書き記されていた。勝連城10代目城主だった阿麻和利とは、一体どんな人物だったのか？ きむたかの子たちは、巻物の内容を読み解くうちに、1456年当時の勝連にさかのぼり、歴史の闇に閉ざされた民草の王としての、真の阿麻和利の姿に近づいていく…。」



当初、公演は1回限りの予定でしたが、出演した子ども達が再演の願いを込め、感想文と嘆願書を作成し、教育委員会へ提出。その熱意により、「勝連城跡」での再演が決定。

その際、生徒達に対して、よりきめ細やかなフォローを実現するために、現在の「あまわり浪漫の会」の前進でもある「父母の会」が設立され、子ども達を支援する仕組みを作り上げた。また、出演対象者も広がり、新たに与勝高校の生徒も含め、与勝地域の中学生と高校生による活動が開始することになった。平成12年3月初演以来、公演回数175回を数え、観客動員は延べ11万余人を達成！舞台だけでなく、子ども達の居場所づくりや人材育成、地域づくりの場として県内外から注目を浴びている。

●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・舞台経験のない地域の人々が手探りで始めなければならなかったこと。
- ・単なる子ども達の劇と思われぬように組織化を図り活動を軌道に乗せるまでの苦労。
- ・地域の活動から始まったこの取組は今や全国的にも知られるようになったが組織の維持や継続に力が注がれ、本来受け継ぐべきことが伝わらないといったことがないようにすること。
- ・この活動が雇用の創出や交流人口に繋がるよう宿泊施設との連携によって滞在客が増え観光振興に繋がるようなものとする。

●参照 URL

- ・肝高の阿麻和利 <http://amawari.com/>

4-2 連携・交流

事例名	「冠太鼓」女太鼓が町に元気を取り戻す				
地域	宮崎県東郷町	地域特性	農村		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	

●くらしの文化振興活動の概要

宮崎県東郷町（とうごうちょう）は日向市の西隣に位置する人口5千人強の町。明治の歌人、若山牧水が生まれた町。町には牧水の生家、牧水記念館、牧水公園のほか、歌碑が数多くある。この町に、平成6年、女性だけの太鼓のグループ「冠太鼓（かんむりだいこ）」（代表：田原千春さん）が結成された。町の補助金で太鼓を買い、和太鼓専任の講師に指導を5回受け、郷土の歌人若山牧水をイメージした自分達の曲の作曲をしてもらい演奏している。宮崎の延岡周辺は昔の内藤藩で、「ばんば太鼓」という伝統的な太鼓があり、地域の人は太鼓に馴染みがある。宮崎県下で和太鼓のチームは75団体くらいあるが、女性だけのグループは珍しく、いろいろな機会にお呼びがかかる。地区の祭り・イベントのほか春の牧水つつじ祭り、秋の産業文化祭にまで出演し地域を元気にしたいと活動している。

●くらしの文化振興の経緯

きっかけは、保育園でチビッコ太鼓をやっていたところ、保護者が「面白そうなので自分達も叩きたい」といだし、平成5年に先生と母親による太鼓たたきグループを作ったこと。「大人の叩ける太鼓が欲しいか？」と町にいったところ、町から「郷土芸能保存と町の活性化策として独立して活動すれば補助する」といわれ、平成6年7月、町内の13名の女性で「冠太鼓」を作った。名前は、東郷町のシンボルでもある冠岳（標高438m、町の中心部に近く、周囲に森や滝、椿の群生地などもあり、いくつもの登山ルートが整備されている町民の憩いの場）のように町民に親しまれるようにと名付けた。

●くらしの文化振興経緯図

組織の動き	保育年の先生と母親により太鼓たたきグループが出来る	町内の女性13名が集まり女性だけの太鼓のグループ「冠太鼓」を結成	ふるさと創世資金500万円を活用して和太鼓と講師の指導を受けるとともに若山牧水をイメージした作曲をしてもらう
	再生活動の動き		地区の祭り・イベントのほか春の牧水つつじ祭り、秋の産業文化祭にまで出演 地域活性化団体表彰（平成15年5月） 中学生の和太鼓指導 町内外イベント フラワーフェスタ 牧水公園つつじ祭 牧水の里の秋まつり等に出演
	H5	H6	H7～H22

●くらしの文化振興活動のポイント

- ・伝統的に伝わる郷土芸能文化を元気につなげたいとした発意者の熱意。
- ・町による財政的援助。
- ・ばんば太鼓という伝統的音楽に地域の人々が馴染んでいた地域性。
- ・しっかりした専門家による指導を受けて本物を目指したこと。

●冠太鼓

宮崎の延岡周辺は昔の内藤藩で、「ばんば太鼓」という伝統的な太鼓があり、地域の人々は太鼓に馴染みがある。宮崎県下で和太鼓のチームは75団体くらいあるが、女性だけのグループは珍しく、いろいろな機会にお呼びがかかる。地区の祭り・イベントのほか春の牧水つつじ祭り、秋の産業文化祭にまで出演している。

練習は月に3～4回、町の文化センターで行っている。子供は中学生になるとテニス、バレーや野球などの部活動があり、大人は仕事の都合で全員揃って練習することはほとんどできない。それぞれ自分のパートに責任を持って、可能な限り懸命に練習している。始めた頃は正規の指導を受けたが、普段は自分達だけで練習する。しかし、自己流にならないように日本太鼓連盟の資格をとるようにしている。5級から始めて3級の資格までとり、地域の子供達に指導もしている。

「冠太鼓」は現在9名で活動している。代表の田原千春さんは、「中学校で音楽を教えていたが、昔から男性の勇壮な太鼓にあこがれていた。一生懸命にやれば観客に伝わるのが太鼓で、数分間のスターになれる気持ちは最高」という。ただ、何年か続けてきて聞く人達も冠太鼓に慣れてきた。太鼓のよさをよく分かってもらえる面もあるが、愛着から聞き手としての厳しさが欠けてくる面もあり、常に演奏レベルの向上をめざし、観客に甘えないようにと自戒している。

好きで始めたが、活動を維持し継続することは簡単ではない。止める人もいるし、新しく入ってくる人には一から教えないといけない。初期に補助はあったが、その後は自分達で会費を集め、演奏に出かけて少しの出演料をもらい、太鼓を修理したり新しい曲を注文したりして活動を維持している。また、皆忙しい生活を送っているのも、どうしても練習をさぼることが多くなる。太鼓は練習でしか上達しない。素人でも人に聞いてもらえるレベルを維持するにはかなりの練習が必要だ。



●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・年々演奏してきて太鼓に演者も聞く方の観客も慣れてきてしまうこと。
- ・発足当初は町からの支援もあったが今は自前で経費を工面しないとならないこと。
- ・普通の主婦や働く女性が会員のため練習時間がなかなか取れない。
- ・地域活動に関心を持つ若い人が少なく辞める人もいて活動の継続と活性化を図る必要があること。
- ・ジュニア太鼓や他の地域の団体も呼んで東郷町の文化センターで和太鼓のコンサートを開くこと。

●参照 URL

- ・宮崎県東郷町 <http://www.town.aichi-togo.lg.jp/>

4-3 発信(1)

事例名	のへじ昔っこ編集事業				
地域	青森県野辺地町	地域特性	町家		
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●	

●くらしの文化振興活動の概要

青森県野辺地町は人口1万5千人の町である。町には古くから伝わるいくつかの伝説や民話があるが、本としての媒体がないことから、世代が変わるにつれ、親から子へ語り継がれることが少なくなり、町の歴史・文化の継承が薄れていくことが危惧されていた。そこで町では、町の伝説・民話を本として制作し、子どもたちに伝えていくことで、郷土「野辺地」に対する興味や関心、愛着を深めるとともに、子どもたちの豊かな情操を培うことを目的としてこの事業を実施することになった。町に伝わる6つの伝説・民話の掘り起こしを行い、「のへじ昔っこ」として本を制作し、教育・福祉等関係機関での活用を図るものである。併せて、うち2～3話を紙芝居形式でCD-ROM化し、インターネット上で電子紙芝居として閲覧できるようにした。地域の歴史・文化の継承につながることはもちろんであるが、本の読み聞かせを通して、親と子のコミュニケーション、さらには地域のお年寄り子どもたちとの世代間交流も図ることができる。本の冒頭に伝説場所のマップと写真を添付し、本を手にした人たちが訪れてみたくなるような工夫を図る。また、紙芝居形式で制作するCD-ROMは、共通語のほかに野辺地の方言でも吹き込みし、町民の誰もが親しむことができるようにする。町で過去に制作した、「野辺地方言集」と「のへじふるさとカルタ」とも連動した事業展開を図ることにより、相乗的な効果が期待される。

●くらしの文化振興の経緯

町には古くから伝わるいくつかの伝説や民話があるが、本としての媒体がないことから、世代が変わるにつれ、親から子へ語り継がれることが少なくなり、町の歴史・文化の継承が薄れていくことが危惧されていた。そこで町では、町の伝説・民話を本として制作し、子どもたちに伝えていくことで、郷土「野辺地」に対する興味や関心、愛着を深めるとともに、子どもたちの豊かな情操を培うことを目的としてこの事業を実施することになった。

●のへじ昔っこの編集・刊行

「のへじの昔っこ」は、野辺地の伝説や民話を子どもたちに伝えていくことで、郷土「野辺地」に対する興味や関心、愛着を深めてもらうとともに、子ども達の豊かな情操を培うことを目的として平成21年3月に発行した。文と絵は、教育委員の野坂幸子さんが、担当した。「のへじの昔っこ」は、「枇杷野川の夜泣石」や「オオカミ悲話」など野辺地の7つの伝説を基にして再話したものです。伝説の場所を訪れることができるように、伝説マップや方言による昔語りも掲載している。

町に伝わる6つの伝説・民話の掘り起こしを行い、「のへじ昔っこ」として本を制作し、教育・福祉等関係機関での活用を図るものである。併せて、うち2～3話を紙芝居形式でCD-ROM化し、インターネット上で電子紙芝居として閲覧できるようにする。



●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・本の冒頭に伝説場所のマップと写真を添付し、本を手にした人たちが訪れてみたくなるような工夫を図る。
- ・また、紙芝居形式で制作するCD-ROMは、共通語のほかに野辺地の方言でも吹き込みし、町民の誰もが親しむことができるようにする。・

4-3 発信(2)

事例名	民有歴史文化資産の保存・活用 プチミュージアムの郷プロジェクト				
地域	石川県能登町	地域特性	農山漁村		
目的	発掘・再興		連携・交流	発信	●

●くらしの文化振興活動の概要

地域に眠る個人所有の歴史文化資産を民家や店舗の一角に展示するミニ博物館を、地域全域に 50 館を目標に整備する。整備にあたっては、すべて「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」が費用を負担する。町の予算書には一切これにかかる費用は計上なし。

●くらしの文化振興の経緯

平成 18 年 2 月、民家の土蔵に眠る古文書や書画などを地域振興に生かそうと地域住民の有志で構成される「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」が発足。

町総合計画策定にあたり、審議会公募委員を務め「プチミュージアムの郷プロジェクト」を提唱し、まちづくりのアイデア特別賞を受賞。

これを受けて、町公益信託助成事業の助成金を使用するなどして、町全域に 50 館のプチミュージアムの建設、郷の整備に地域住民が取り組んでいる。プチミュージアムとは、地域に眠る個人所有の歴史文化資産を民家や店舗の一角に展示するミニ博物館のことを称している。

●プチミュージアムの郷プロジェクト

①候補リスト作成、②「歴史文化」資産の所有者とのヒアリング、③公開に対する合意形成、④展示内容の検討 ここで言うプチミュージアムとは ①町内や個人の土蔵に保存されている「歴史文化」資産をその家の一角を小さな展示場にして、そこに公開するもの。②館主は定年後のボランティアで、家の留守を兼ねる。(人件費が不要) ③談話コーナーを設ける。(地域住民の交流の場ともなる) ④50 館を目標、「奥能登トリビア蔵」との名称でパッケージ化。



●くらしの文化振興活動の苦心点・課題

- ・ (1) プロジェクトを実現するための整備費（建設費）の調達
 - 整備にあたっては、すべて「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」が費用を負担し、町からは一切これにかかる費用の補助金はない。ただ、幸いなことに「公益信託による助成制度」がありこれを活用した。
 - 現在のところ、5/50 館の整備がなされているものの、今後の増館に多々課題が蓄積されている。
- (2) 歴史文化資産所有者への理解と協力
 - 民家の一部や店舗の一部を改修することとなるので、資産の所有者の承諾がないことには整備、改修することができない。いわゆる営業活動が日々行われる。
- (3) プチミュージアムと行政とのかかわり
 - 町広報誌、CATV、観光情報誌などに掲載し側面的に支援。また、「いしかわ地域づくり表彰」や、「『新たな公』によるコミュニティ創生支援モデル事業」への推薦など、積極的に側面的支援を行っている。

II. 概要事例

1. 衣関係事例

1-1. 発掘・再興

事例名	1-1-1 麻布・麻くずつぎはぎ／青森発の「ぼろ」世界が高く 評価	ジャンル	衣
地域	青森県	地域的特性	農村地域
目的	発掘・再興 ●	連携・交流	発信

◆概要

麻布や麻くずをつぎはぎして衣類などに仕立てた青森県の「ぼろ」（江戸一大正時代）が、世界的に評価が高まっている。青森市の民俗学者・田中忠三郎さんの40年にもわたるコレクションが、都内の展覧会や出版物で紹介されたのをきっかけに、アートとして、究極のリサイクルとして注目されている。

ぼろが注目され始めたのは一九九七年夏、東京・上野の森美術館で「裂織の起源 田中忠三郎コレクション」が開かれてから。京都や旭川で展覧会を重ねるうちに注目度は増し、今年一月、アспект社から「BORO—つぎ、はぎ、いかす。青森のぼろ布文化」（編集・小出由紀子、都築響一）が出版されて以降、さらに国内の愛好家、海外のコレクターの問い合わせが急増。フランスやスウェーデンから展覧会開催の話も来ている。アспект社の担当者は「外国人からの問い合わせが目立つ」と話す。

ぼろが注目される理由としては、大量消費、使い捨て文化の中で、もったいないという機運が高まり、本物のエコロジーとして注目を浴びているのではないかとされる。

事例名	1-1-2 作務衣などを着て、まほろば語り部発表会 語り部たちが多彩な民話を披露	ジャンル	衣
地域	山形県高島町	地域的特性	農村地域
目的	発掘・再興 ●	連携・交流	発信

◆概要

高島町内で民話語りの伝承活動に取り組む人たちによる「まほろば語り部発表会」は、会員の語り部21人は町内各地区で民話語りや子どもたちへの指導といった活動を繰り返しており、8年目を迎える。

発表会は、まほろば語り部の会が主催し、会が発足した翌年に開いて以来、2回目の開催で、同様に町内で活動するたかはた地区語り部の会、二井宿語り部の会の協力を得て開催した。

作務衣（さむえ）などを着た語り部たちは古民家の一室を模した舞台上「むがしあったけど」と語り始め、多彩な民話を披露。こっけいさを強調したり、しんみり聞かせたりしながら、欲を戒めて正直な生き方を論ずる民話の世界に聴衆を引き込む。

事例名	1-1-3 伝統の技を伝える、からむし織体験生「織姫・彦星」 事業	ジャンル	衣
地域	福島県昭和村	地域的特性	農村地域・繊維産地
目的	発掘・再興 ●	連携・交流	発信

◆概要

からむしは日本最古の原始織物といわれ、苧麻（ちょま、からむし）という植物からとれる繊維を用い、栽培から製糸まですべて手作業で、現在では昭和村と沖縄県宮古島の2カ所でしかつくられていない貴重な文化遺産である。からむしは弾力性に富んだ強い素材で、全国的にも注目されているが、高齢化・過疎化の進行が深刻な問題となっている村では、からむし織の後継者不足が懸念されていた。

そこで、交流人口と定住人口を増やし、独自の物産である「からむし織」の織り手を養成するため、役場職員らの考案によって「織姫体験生制度」を発足、平成6年度から全国へ「織姫体験生」の募集を行った。

毎年多くの応募者があることは、これまでからむしに携わってきた村民（主に高齢者）に大きな誇りと自信を与え、織姫に熱意をもって技術を伝えることでやりがいと生きがいを与えた。もう一つ村にとって見逃せない大きな「成果」は、織姫たちの定住と結婚である。村に残った20名のうち7名は地元の男性と結婚、子どもに恵まれた織姫もあり、過疎対策、若者の結婚対策にも予想外の結果をもたらした。

事例名	1-1-4 「織物伝承講座」開催(国指定重要有形民俗文化財 裂織りの仕事着やシナ布)			ジャンル	衣
地域	新潟県相川町	地域的特性	農村地域・織物産地		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	
<p>◆概要</p> <p>裂織りは、古木綿を細く裂いたものをヨコ糸に使った織物である。木綿の栽培に適さなかった北日本の各地で工夫され、仕事着として着用されてきた。</p> <p>相川郷土博物館は、裂織りの仕事着やシナ布を中心とした国指定重要有形民俗文化財「佐渡海府の紡織用具と製品」(昭和51年指定)を所蔵している。<u>指定を受けた民俗文化財への理解を深めるためと、伝承者を育てるために「織物伝承講座」を開いてきた。</u></p> <p>昭和55・56年頃から、体験学習を取り入れた修学旅行が始まり、裂織りの体験希望が出るようになった。講座の受講者から指導者も育ってきたので、受け入れを始めた。</p>					

事例名	1-1-5 廃校使って藤織り紹介 宮津、伝承交流館			ジャンル	衣
地域	京都府宮津市	地域的特性	農村地域		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	
<p>◆概要</p> <p>廃校になった宮津市上世屋の日置中学校世屋上分校が改修され、世屋高原に残る生活文化と自然を紹介する「藤織り伝承交流館」に生まれ変わった。</p> <p>平屋建て約180平方メートルで廊下沿いに作品展示室、工房など5部屋がある。<u>藤のツルの皮から作る藤織りの作務衣(さむえ)、海藻を入れるスマブクロなどと織機を展示。</u></p> <p>整備費は600万円。館を運営するのは「丹後藤織り保存会」。開館は基本的に土日。</p>					

事例名	1-1-6 弥生の衣服「貫頭衣」デザインコンテスト			ジャンル	衣
地域	大阪府泉大津市	地域的特性	遺跡地域		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	
<p>◆概要</p> <p>泉大津市は、<u>弥生時代の環濠(かんごう)集落遺跡にある「池上曾根史跡公園」で催す「農業まつり」で、貫頭衣(かんとうい)のデザインコンテストを初めて開催。</u>貫頭衣は、米作りの始まった弥生時代の衣服とされ、市は「ユニークな発想で現代によみがえらせてほしい」としている。</p> <p>野菜や果物、魚介類など食べ物をイメージした「大自然の恵み」と、泉北地域の歴史や未来をイメージした「泉北のチカラ」がテーマ。作品は原則、生地中央に開けた穴に頭を通し、腰ひもで結ぶようにする。応募は実物に限り、<u>まつり当日、入賞作品のファッションショーをする。</u>小学生、中高生、専門学校生・大学生、一般の4部門で、それぞれ入賞作品6点を選ぶ。</p>					

事例名	1-1-7 地元に残った帆布を使って服飾小物やバックを作成、販売店は観光スポットに			ジャンル	衣
地域	広島県尾道市	地域的特性	—		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	
<p>◆概要</p> <p>NPO工房おのみち帆布は、<u>尾道で生産される帆布を使って、バッグや小物を製造・販売する。</u>さまざまな帆布商品のアイデアを次々に出し、地元の帽子店や家具店、紙問屋などとの共同開発から、広島カープ、今治タオルなどとのコラボレーションまで、商品開発の対象は非常に幅広い。</p> <p>また、尾道市商店街連合会は地域コミュニティ再生に対する意識が高く、商店街内での尾道帆布展やワークショップの開催に対しても、商店との折衝や費用補助などを通じて積極的にサポートしている。2003年の事業開始以降、帆布製品の販売は右肩上がり伸びており、07年度は5,300万円に達している。購買客の98%は市外からの観光客であり、当初の目標の一つである、尾道の新たな土産物としての認知は着実に広がっている。同時に、旅行雑誌等への掲載を通じて、尾道の立ち寄りスポットとしての位置付けも高まっており、商店街への観光客流入に少なからず寄与している。</p>					

事例名	1-1-8 沖縄庶民の昔の衣装に触れてもらおうと、「沖縄庶民の装い—明治・大正・昭和の衣の変遷—」展			ジャンル	衣
地域	沖縄県浦添市	地域的特性	—		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	

◆概要

沖縄本島の中北部や周辺地域、八重山地方などの沖縄庶民の昔の衣装に触れてもらおうと、「沖縄庶民の装い—明治・大正・昭和の衣の変遷—」（琉球大学教育学部染織研究会、同展実行委員会主催）が、浦添市美術館で開催。

個人所蔵の約800点の中から、えりすぐりの織物や染料など約200点を展示。庶民の姿が描かれた「沖縄風俗絵巻」や「八重山蔵元絵師画稿集」などの資料も紹介しており、実際に展示された衣服資料と見比べることができる。色あざやかな勝連の「サージ」や、葬式行列に用いた道幕（みちまく）などもある。

「来場者の中には『懐かしい』という声や、当時の使用法を教えてくれる人もいた。できるだけ多くの人に昔の生活文化に触れてもらいたい」と来場を呼び掛け。

事例名	1-1-9 かりゆしウエアを高校生がデザイン			ジャンル	衣
地域	沖縄県	地域的特性	—		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	

◆概要

6月1日に『かりゆしウエアの日』が制定され、県外にも注目されはじめてきた沖縄県産品のかりゆしウエアだが、南部商業高校の部活・マーケティング部ので、高校生が若い感性でかりゆしウエアのデザインと販売に挑戦。デザインも“ジンバイザメ”や“シーサー”“シーサーの足跡”に三つ巴の紋章の組み合わせなど、発想が斬新。

沖縄県内の店舗数点で販売する他、東京で開催される沖縄物産展『めんそーれ沖縄展』にも出店。

1-2. 連携・交流

事例名	1-2-1 和綿を活用した異なる世代間交流事業			ジャンル	衣
地域	栃木県高根沢町	地域的特性	農村地域・和綿産地		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	

◆概要

この活動は、宇都宮大、町、町環境学習施設「エコ・ハウスたかねざわ」の共同による「和綿を活用した異世代間交流事業」で、2008年度に始まった。和綿文化を再考し、地域再生につなげる狙いがある。老人ホームで和綿の種まきが行われ、摘み取り、紡ぎ作業など各段階で幼児、中学生、愛好者らにかかわってもらい、世代間の交流を促す。

2009度は、栽培面積を約100平方メートルに倍増。経費老人ホーム入居者らによる綿製品づくりまで視野に入れている。入居者六人と、不登校児童・生徒の適応指導教室「町フリースペース ひよこの家」に通う8人が種まきし、秋には、陽だまり保育園の園児らが摘み取り、生涯学習団体「里山文化の会」の会員が紡ぐ予定。

主導する宇都宮大の佐々木和也准教授は「各段階でさまざまな価値が生まれる。綿製品を販売して基金を作り、地域通貨に発展できれば」と構想を述べる。

事例名	1-2-2 真岡市民と交流の輪拡大／今夏 外国人に浴衣を／祭り りで着用、100着目標／商議所が提供呼び掛け			ジャンル	衣
地域	栃木県真岡市	地域的特性	繊維産地		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	

◆概要

日本の伝統文化の浴衣を市内に暮らす多くの外国人に提供しようと、真岡商工会議所は不用になった浴衣や帯の提供を呼び掛けている。100着を目標にしており、今夏の「真岡夏祭り」や「もおか木綿踊り」に、浴衣姿で参加してもらうことを目指している。

日本人のブラジル移民百周年の今年、市民と市内在住外国人の交流の輪を、さらに発展させたい考え。真岡市内の外国人登録者は、宇都宮、小山に次いで県内第三位。最多はブラジル人で、人口に占める外国人登録者数の割合は、県内最多の5・2%。

例年約二万人が訪れる「木綿踊り」には、昨年、輪踊りのほか創作踊り部門が新設された。そこにブラジル人学校「コレージオ・ピタゴラス・ブラジル真岡校」の生徒約二十人も参加。その際、保護者らから「できれば浴衣で参加したい」という要望が出されていたこともあり、今回初めて提供を呼び掛けた。寄付された浴衣は同校にも贈られる。

事例名	1-2-3 着物と産地を生糸で結んで 埼玉のブランド繭「いろどり」			ジャンル	衣
地域	埼玉県川越市	地域的特性	養蚕産地		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	

◆概要

着物文化の普及を通じてまちの活性化を目指す川越市のNPO法人が、県が品種改良した埼玉のブランド繭（まゆ）「いろどり」の生糸を使った「顔の見える着物づくり」に取り組んでいる。

このNPO法人は川越きもの散歩（会員20人）。月に1度、会員たちが着物姿で川越の蔵造りの街を歩く愛好団体を母体に、2月にNPO法人化した。

会員たちは、2008年6月に「埼玉の養蚕を知る」と題した講演会を、9月にはブランド繭の生産地、秩父地域の養蚕農家の見学会を開催。一方で「顔の見える着物づくり」に向け、夏には「いろどり」繭の生糸10反分（約10キロ）を注文。仕上がった生糸のうち4反分は、ペニバナやクチナンの実などを使って草木染にしたあと、本庄市の織物業者に依頼して試作品が完成した。

同法人は今後、この反物を使って着物を仕立てるための和裁講習会を開いたり、仕上がった着物を着ての「里帰り会」を計画したりするなど生産者との交流を深める。また、「いろどり」繭の生糸を使ってくれる織物作家らをプロ、アマ問わず募っていく考え。

事例名	1-2-4 絹のまちの情報誌創刊「シルクのまちづくり市町村協議会」で、絹に関する情報交流		ジャンル	衣
地域	京都府京丹後市 他	地域的特性	繊維産地	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

京丹後市や京都市など絹にゆかりの深い全国25の自治体が「シルクのまちづくり市区町村協議会」を結成。着物の販売不振や生産の海外移転などで繊維業界が冷え込む中、絹をキーワードに新産業の創出や地域活性化を狙う。

協議会は、丹後ちりめんの産地・京丹後市が呼びかけた。京都市や宮津市、与謝野町のほか、官営工場・富岡製糸場が置かれた群馬県富岡市や、加賀友禅で知られる金沢市などが参加。また、経済産業省や農林水産省の担当職員が特別会員になり、服飾関係者9人を顧問に迎える。絹産業の関係団体も協賛する。

協議会では、絹にまつわる産業や文化の振興に向けて政策の研究や提言をするほか、絹の魅力の発信、新産業の創出も視野に会員間の情報交換を行うという。

事例名	1-2-5 ネットで千客、地場産業挽回—交流通じ観光にも一役、桃太郎ジーンズ		ジャンル	衣
地域	岡山県倉敷市	地域的特性	繊維産地	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

ジャパンプルーフグループ（岡山県倉敷市）の桃太郎ジーンズは、1本2万円超、高い物では18万円もするという高級ジーンズだが、高級素材と藍（あい）染め技術にこだわり、ファッション通を中心に高い人気を集めている。

同社は、顧客用のネットやツイッターに地元の情報を意識的に盛り込んでいるほか、商工会議所と協力してジーンズストリートとして商店街の再生に取り組んでいる。400メートルほどの商店街には児島産のオリジナルジーンズの店舗5件が軒を連ねている。店先では児島ジーンズのこだわりである職人による藍染めや織り機の見学ができる工房を併設するなど、観光要素も盛り込んだ。また、ジーンズショップ同士をつなぐジーンズバスも運行する。

地元の人ですらジーンズの聖地ということを知らない人も多いという。今後は地域全体のブランディングを進めて、児島ジーンズの価値をさらに高めていく。

もともと繊維産業が盛んだった児島でジーンズの製造が始まったのは、東京オリンピックが開催された1960年代。若者の間でジーンズファッションが人気になると大手綿紡績などを中心にジーンズ製造への参入が相次いだ。このため染色から生地、縫製、型紙作り、加工まですべてのインフラが整っている。最近では若者が2～3人で起業する例なども増え「ブランド数は10年には32まで増えた」（倉敷ファッションセンター）という。産業がさらに集積し、町が発展していく好循環に向けた道筋づくりが進んでいる。

1-3. 発信

事例名	1-3-1「和服で那須烏山の里めぐり」市民対象バスツアー	ジャンル	衣
地域	栃木県那須烏山市	地域的特性	城下町
目的	発掘・再興	連携・交流	発信 ●

◆概要

主婦ら市民6人でつくる「街に賑（にぎ）わいを興す会」、龍門の滝や島崎酒造のどうくつ酒蔵などを巡るバスツアーを実施。和服での参加が特徴で、「烏山は城下町。和服や浴衣で街中を散策できる活動に取り組み、和服を広めたい」とされる。

同会は、市内外の着物愛好者に城下町である烏山市街地を散策してもらい、地域活性化を図ろうと2010年6月に発足。市のまちづくり団体支援事業の補助金15万円を受けた。

今回は活動の第1弾で、まず市民対象に「和服で那須烏山の里めぐり」としてバスツアーを手掛ける。午前10時に烏山公民館を出発し、八雲神社、龍門の滝、島崎酒造どうくつ酒蔵、興野大橋、境橋、烏山大橋を巡る。昼食は烏山カントリー倶楽部の和食処「臥（が）龍（りゅう）閣（かく）」。山形の庄屋の建物を移築した合掌造りの店で、和の風情を堪能してもらう。雨天の場合は和服の所作や着付け講習を行う。

同会は、7月の山あげ祭や8月のいかんべ祭りの際などに街中で撮影した浴衣や着物姿の写真のコンクールも計画しており、和服や浴衣の普及に努める。

事例名	1-3-2 群馬・伊香保温泉に和服女性1000人、石段街を着物を着た女性で埋めるイベント)	ジャンル	衣
地域	群馬県渋川市	地域的特性	温泉地
目的	発掘・再興	連携・交流	発信 ●

◆概要

伊香保温泉観光振興協議会（群馬県渋川市）は2010年8月、同温泉の中心にある石段街を着物を着た女性で埋めるイベントを開催。伊香保温泉がポスターに使う場面を再現する。

現在のポスターは昭和初期の写真で、前橋市内の繭工場の女子従業員が慰安旅行で温泉街を訪れた時のもの。今回は最大1000人の和服姿の女性を集めて撮影する。参加者は前日に温泉街に宿泊することが条件。着物がなければ旅館の備え付けの浴衣で参加できる。独自性のあるイベントで集客を目指す。

事例名	1-3-3 江戸更紗など「染（そめ）の小道」イベントで、染め物の街PR	ジャンル	衣
地域	東京都新宿区落合・中井	地域的特性	染物産地
目的	発掘・再興	連携・交流	発信 ●

◆概要

地場産業を知ってもらおうと2011年2月に開催予定のイベント「染（そめ）の小道」に向けたデモンストレーションとして、新宿区落合・中井地区を流れる妙正寺川で、着物の布地が川筋の空中を舞い、江戸の伝統を受け継ぐ美しく繊細な染めの技巧が目をつけた。「地域の結びつきを強める機会に」と地元住民らが準備を進めている。

神田川沿いでは江戸時代から染色産業が栄えた。古くは神田や浅草で発展したが、きれいな水を求めて明治、大正と上流へと移った。ピークの1960年代には、落合・中井地区だけで300軒以上の染色関連業者がいたという。当時は神田川や支流の妙正寺川で、染めた生地を水洗いする姿があちこちで見られた。その後、川にコンクリートの護岸が築かれ、水辺に下りられなくなった。水も汚れ、布は工場で洗うようになった。区内には今も業者が約100軒あるが、染色が地場産業だと知らない住民も増えた。当時の風情を呼び起こし、もっと染色産業を身近にした、との地元住民の願いが「川のギャラリー」を企画するきっかけになった。

イベントは次回で3年目だが、染色工房やギャラリーなど数店舗が中心だった過去2回に比べ、格段に盛り上がりそうだ。

事例名	1-3-4 朝倉氏遺跡時代衣装パフォーマンス(時代衣装を着用して観光案内サービスや記念撮影を実施)		ジャンル	衣
地域	福井県福井市	地域的特性	城下町	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

朝倉氏の栄えた戦国時代の衣装をまとって、遺跡の復元武家屋敷や唐門周辺を歩いたり、また作業したりすることで、当時の雰囲気を作り出し、史跡の観光資源としての魅力を高める。「ふるさと雇用再生特別基金事業(観光分野)」として、(社)朝倉氏遺跡保存協会が市から委託を受け、時代衣装を着用して観光案内サービスや記念撮影を実施。

事業目的としては、復元町並み・庭園・唐門などの遺跡を情景として眺めるだけでなく、時代衣装のパフォーマンスによるおもてなしを実施することにより、時代雰囲気を醸し出し、訪れる観光客の満足度を高める。

実施内容としては、武家屋敷や唐門など、朝倉氏遺跡内で戦国時代の時代衣装を装った武士や町人などが歩いたり、作業をしていることで、より時代雰囲気を醸し出すとともに、観光客との写真撮影に応じたり、簡単な案内も行う。また、観光客が甲冑を着て記念写真を撮ることができるようイベントも実施する。

事例名	1-3-5 和魂 in 萩・津和野、美しい町並みに和服が似合うまち		ジャンル	衣
地域	山口県萩市、島根県津和野町	地域的特性	城下町	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

「萩・津和野」は、全国でも有数の美しく古い町並みが残っている地域であり、これまでこの地域資源を地域ブランドとして全国にPRしてきた。萩・津和野としては、「和服が似合うまち」を定着させるため、これまでそれぞれ単独で開催してきた「和魂 in 津和野(津和野町)」と「着物ウィーク in 萩(萩市)」のイベントを連携して行う「和魂 in 萩・津和野」の取組により、効果的なPRを行うこととした。

「和魂 in 萩・津和野」の間中には、共通パスポートを発行し、それを持って和装で町歩きをすると、協賛施設で様々なサービスが受けられる。

また、「着物ウィーク in 萩」期間中には、着物のレンタル、無料フォト撮影&プレゼント、カメラレンタルなどのサービスに加え、着物フォトコンテストの開催や和小物の手作り教室などの和の体験プログラム「和魂10」も実施。

さらに、この期間においては、和のイベントとして、萩市は「萩夏まつり、萩・万灯会、萩・竹灯路物語」を、津和野町は地元の芸術家や日本伝統工芸士の作品を展示・体験する「和魂の手技～津和野アートと伝統工芸士の技～」を開催。

事例名	1-3-6 道後入浴 女帝スタイルで 古代天皇の衣装復元		ジャンル	衣
地域	愛媛県松山市	地域的特性	城下町	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

道後温泉誇れるまちづくり推進協議会は2010年度から、古代の入浴スタイルを再現する「女帝の湯復元プロジェクト」を進めている。

同協議会は、道後温泉本館改修工事に備え、道後温泉本館、椿の湯に続く「第3の外湯建設計画」の検討を1992年に開始。女帝の湯プロジェクトは飛鳥時代に斉明天皇や持統天皇が道後温泉に入湯した史実に着想して企画。

プロジェクトでは、「湯帳(ゆちょう)」と呼ばれる麻の衣装を着用したまま入浴したという文献に基づき、現代風にアレンジした湯帳を身にまとう入浴スタイルを復元し、観光客らに体験してもらうメニューを検討。県内繊維産業と連携し、湯帳やオリジナル浴衣などの開発も目指す。

「悠久の歴史を感じられるような、道後温泉ならではの観光地づくりを進めたい」とされる。

事例名	1-3-7 紫プロジェクト／染料紫草の復活、紫草染衣装のファッションショー		ジャンル	衣
地域	福岡県筑紫野市	地域的特性	染料産地	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

19年6月末に施行された「中小企業地域資源活用促進法」の「地域資源活用企業化コーディネート活動等支援事業」の採択事業「二日市温泉活性化のための九州国立博物館からの顧客誘致と紫をキーワードとした特産品開発」を受けて、平成19年9月に温泉活性化プロジェクトと紫プロジェクトを立ち上げて、1年間各界の専門家の意見を聞き、取りまとめのシンポジウムを平成20年9月に九州国立博物館で開催、併せて紫草染衣装のファッションショーを開催、国博エントランスホールで紫草染衣装展を開催。

温泉活性化については、観光協会と一緒に福岡県で初めての「スパトライアスロン大会」の開催実現に努め、浴衣姿で温泉街などを走ったり、足湯に浸かったり、十二単衣レースをしたり、また、数々の芸能人の参加などによって、たいへん盛り上がり、二日市温泉の知名度を大きく広げた。

事例名	1-3-8 着物姿で投扇興、竹取物語をテーマにした観月会		ジャンル	衣
地域	熊本県菊池市	地域的特性	染料産地	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

菊池市のNPO法人「菊池まちづくり千年の風」は「竹取物語」をテーマにした観月会を開催。同市隈府の集客スペース「千年の風の館」を会場に、江戸時代に流行した遊び「投扇興（とうせんきょう）」なども催す。

投扇興は、台の上の的をめがけて、少し離れた場所から扇を投げ、台と的と扇の位置を百人一首の歌に見立てて得点を競う。男女用の打ち掛け計5着を用意しており、参加者に着物姿で優雅な遊びを楽しんでもらう。会場周辺は竹灯籠（とうろう）で飾る。

「和の雰囲気の中で、投扇興やお月さまを楽しんでもらいたい」とのねらい。

2. 食関連事例

2-1. 発掘・再興

事例名	2-1-1 チーズづくりの応援で地域に交流の輪 「チーズ工房酪恵舎」と「グッチーズ」		ジャンル	食
地域	北海道釧路支庁白糠町	地域的特性	酪農地	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>酪農地の白糠だが、ここで生産された牛乳を白糠の人は飲むことが出来ない。しぼられた生乳は釧路市の乳業メーカーの向上に運ばれて牛乳となり、釧路港から海路、関東へ送られて首都圏のスーパーで「北海道牛乳」として売られている。一方、地元の人が買う牛乳は十勝の牛乳である。生乳の流通は品質・衛生管理と酪農家の経営支援のため、しっかり統制されている。農業改良普及員として若手酪農家を指導していた井ノ口和良さんは、生乳の付加価値を上げ、地元の生乳を地元で生かす方法としてチーズ作りを考えた。約5年間にわたりチーズ製造を研究、平成12年8月「白糠チーズ研究会」を設立。それを母体として平成13年4月にチーズ工房「株式会社 白糠酪恵舎」を立ち上げた。資本金1,000万円、町内の若手酪農家(14牧場)を中心としたメンバー20人で設立した。白糠チーズは町内のスーパーを始め、釧路、帯広、札幌市でも販売されており、食材としても30以上の飲食店で利用されている。</p> <p>しろぬかチーズ友の会「グッチーズ」は、白糠チーズの応援団として酪恵舎設立の2カ月後に結成された。白糠は酪農地域ではあるが消費地ではない。チーズを食べる文化がなく、たまに食べるのもプロセスチーズで、ナチュラルチーズを食べたことがない人が多かった。チーズを作るだけでなく、食べる文化を育てる必要を感じたのが会のスタートで、今では白糠に豊富にある山海の美味しい食材とすばらしい人材の交流の場となっている。</p>				

事例名	2-1-2 八戸の食文化を全国に発信 ～伝統食「八戸せんべい汁」を地域の顔に～		ジャンル	食
地域	青森県八戸市	地域的特性	地方都市	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>八戸市では、平成14年12月の東北新幹線八戸駅の開業に向け、新たな特産品を開発しようとする活動が始まった。この活動の中心となったのは、八戸地域8市町村の経済・産業振興の中核を担う(財)八戸地域地場産業振興センター、愛称ユートリーである。ユートリーは、新幹線開業を5年後に控えた平成9年に新たな特産品の開発に着手した。</p> <p>開発に当たり、ユートリーは、八戸市、商工会議所、デザイン協会等をメンバーとする開発研究会を立ち上げ、その下に煎餅、菓子、農産加工、水産の4つの部会を設けた。その後、開発は、煎餅組合や菓子商工業組合などの業界を巻き込んで進められ、最終的に「八戸せんべい汁」を含めた10数種類の試作品が完成した。八戸市は、現在、地域の活性化を図るため、市民団体と行政側が一体となって地域の伝統食八戸せんべい汁を商品化し、そのブランド・イメージの確立に努めている。まず八戸せんべい汁の商品化に当たっては、せんべいは各社自社製のものが使用されたが、パッケージやスープは共通のものが使用された。そして、製品レベルの均一化、資材や材料の共同購入、製造・販売の協力・分業化、販売先の取り決めなどを行い、平成11年4月に八戸せんべい汁の販売が八戸市内で一斉に開始された。当初生産販売協力会は、期待と不安が入り混じる中、初年度2千個販売するという販売目標を立てていた。しかし、予想以上の売れ行きが続き、最終的には4万個以上を売り上げ、八戸せんべい汁は販売開始1年目からヒット商品になった。</p>				

事例名	2-1-3 まちへの想いと人をつなぐ製塩事業 ～まさに「塩結び」～		ジャンル	食
地域	宮城県塩竈市	地域的特性	地方都市・港湾地区	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>市内にある御釜神社には、古代から4口の竈が安置されている。その竈を使って、塩土老翁神（しおつちおじのかみ）が製塩を行ったと伝えられており、このことがまちの名の由来となっている。まちづくり会社の設立を模索するワークショップでは、「塩」が活用すべき資源として取り上げられたことがきっかけとなり、「有限責任事業組合 顔晴れ（がんばんれ）塩竈（しおがま）」（以下「顔晴れ塩竈」）の設立という形で結実し、「塩づくり」の取組が始まった。平成21年4月10日には「塩竈石製の製塩竈」に火が灯され、塩土老翁神が伝えた製塩の地、塩竈に塩づくりがよみがえった。「塩竈石製の製塩竈」では、現在は月約200キロの「塩竈の藻塩」の製造販売が行われ、地元産の塩に共鳴してくれる多くの協力店により、菓子、ラーメンなどに使用され、多様な広がりを見せ始めている。「塩竈の藻塩」は、まちに対する想いの結晶である。応援してくれる人も多くなり、市内の販売協力店のみならず、間に立ってくれる企業の助力により、平成21年8月上旬には宮城県、福島県及び青森県の生協で販売が開始された。また、10月には宮城県、JR東日本、日本レストランエンタープライズ等の応援を得て、塩竈の名産を詰め合わせた駅弁「塩竈の藻塩弁当」が登場し、好評を博している。有限責任事業組合だった「顔晴れ塩竈」も、安定経営のために合同会社となり、市の委託事業などで雇用を増やし、体制を強化することができた。</p>				

事例名	2-1-4 女性パワーを核とした“砺波型”地産地消の 推進－学校給食で食農教育を支援－		ジャンル	食
地域	富山県砺波市	地域的特性	農村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>砺波市管内では、昭和60年頃から農地の受委託や営農の組織化が進み、余剰化した労力で野菜作りに取り組む女性グループが増加し、これらのグループを中心に協議会を設立した。平成3年に、輸入農産物の農薬問題でグループ内から、新鮮で安全な地元の野菜を学校給食の食材に活用する提案が出されたので、普及センター、グループ連絡協議会や砺波市学校給食センターの協力を得、試行的に月2～4回学校給食への食材供給を始めた。その後、この活動が徐々に拡大してきたので、このシステムがより安定するように計画的な野菜栽培や供給体制を確立した。また、学校給食への食材供給が定着してきたのを機会に、学校給食センターと連携して子どもたちに「地元産野菜」を認識させ、農業に関心をもたせる食農教育に取り組んだ。給食センターの利用計画に合わせて、計画的に供給できるよう栽培講習会を開催し、野菜の作付け計画や栽培技術の向上を図っている。野菜栽培に取り組む営農組合や中核農家もメンバーに加え、柿やりんご等の果物やハウスを利用した軟弱野菜やネギなど多品目の出荷ができるようになり、地域と連携した食材の供給体制を確立した。学校給食のメニューに、干しなす・大根等の乾物や郷土料理を加えられたことにより、品数の少ない冬場の品目が拡大し、年間を通じて供給できるようになった。</p>				

事例名	2-1-5 食材から器までとことんこだわった「能登井」		ジャンル	食	
地域	石川県輪島市・珠洲市・ 穴水町・能登町	地域的特性	地方都市・農山漁村		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	
<p>◆概要</p> <p>平成19年5月に、奥能登地域の活性化と交流人口の拡大を目指し、石川県及び奥能登2市2町、民間事業者、地域づくり団体等で構成する「奥能登ウェルカムプロジェクト推進協議会」（以下「協議会」という。）が設立された。協議会は、活かすべき地域資源のテーマとして「食」、「風景」及び「体験」の3つを取り上げ、それぞれ「奥能登食彩紀行」、「能登回廊再発見」及び「奥能登感動体験」という3つのプロジェクトを立ち上げた。これらは、具体的には、それぞれのプロジェクトごとに行政と民間の若手キーパーソンによるプロジェクトチーム（以下「PT」という。）を編成し、市町の枠を越えた広域的な連携による地域資源の利活用について議論を重ねるといふ形で進められた。</p> <p>その結果、「奥能登食彩紀行」プロジェクトの取組として、奥能登の豊富な食と、豊かな食文化を誘客素材として活用することが決定され、平成19年12月には、食材から食器までとことん地元産にこだわった「能登井」が誕生した。海の幸、山の幸がともに豊富な奥能登の食材を活かすため、「井」のご飯の上にそれぞれ自慢の地元食材をのせてPRすればどうかという結論に至った。こうしてあえてメニューを統一しないことで、様々なジャンルの飲食店が幅広く参加しやすくなり各店舗オリジナルの「能登井」が生まれることとなった。</p> <p>また、食材だけでなく、食器及び箸についても、地元産のものを使用するよう「能登井」の定義を定めた。平成21年7月からは、顧客満足度の向上を目指し、スタンプラリーやホームページを活用して「能登井」の参加店舗に対する評価制度を導入している。</p>					

事例名	2-1-6 地元素材にこだわった味噌作りで地域を元気に		ジャンル	食	
地域	福井県清水町	地域的特性	農村地域		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	
<p>◆概要</p> <p>「清水町大豆加工施設 青空グループ」は、清水町清水山の新保地区で手作り味噌を作っている女性6名のグループである。手作り、自然、健康をコンセプトに、味噌（新ちゃんみそ）のほか、蒸し大豆、人参や大根の味噌漬け、きなこ豆、甘みそ、たまり醤油などの製造、販売をしている。地元特産の大豆や米などを使い、米麴を丁寧に作ることで添加物を使わず塩分を控えた、安全・安心な食材の提供を行っている。</p> <p>「青空グループ」の歴史は古く、昭和35年から稲の苗作りや洋服のリフォームなどの活動をしてきた。昭和54年に一村一品運動として特産品作りを勧められた時に、地元の大豆や米で味噌を作ることを思い立ち、皆で麴作りから習い始めた。</p> <p>最初は試行錯誤の連続で大変難しいものだった。味噌作りは温度、湿度や振動など環境に大きく影響されるため、何度も失敗して途中で廃棄したという。1年ねかせて翌年から出荷するようになったが、生産量は1樽（100kg）程度で地元販売が中心だった。その後、町の物産展などを通じて、手作り無添加の味が次第に評価されるようになった。町外からも注文が入るようになったことから、自宅作業では間に合わなくなり、昭和60年に大豆加工施設を建てた。現在の生産量は10倍の1トンに増えている。</p> <p>農村地域の活動として様々な賞を受けたが、平成14年には福井県が地元の原材料使った加工食品を対象にしている「厳選ふくいの味＝認証Eマーク」を味噌では最初に認定される栄誉を得ている。</p> <p>「新ちゃんみそ」の製法には1つの秘密がある。それは発酵の過程で音楽を聞かせていること。朝の7時から夜の7時までスピーカーからクラシックが流れている。夜は人間と同じで静かに寝かせているという。</p>					

事例名	2-1-7 ふるさとの味加工研究会 東和の食文化を体験してみませんか？		ジャンル	食
地域	山口県東和町	地域的特性	農漁村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>東和町には、町内にある漁協婦人部や生活改善実行グループ連絡協議会など8つの女性団体と改善士を加えた「東和町農漁村女性連けい会議」がある。「連けい会議」とは、町内に暮らす女性の連携活動を促進し、地域の新しい活力を生み出すために“知恵”“技”“力”を出し合い、「意識をかたちに行動を起こすこと」を目標とする実践グループである。</p> <p>その活動のひとつに「宝さがし」がある。「連けい会議」のメンバー一人一人が宝探しカードを使い、地域資源の点検を行ったのである。集めてみると1,280余りもの宝が出てきた。その出てきた様々な宝をつなぎあわせ、どんな交流ができるか話し合った。そうして、宝の一つである郷土食「お茶粥」をベースに、町内で取れる山海の幸を使った「茶がゆ御膳」、むらとまちの共生を目指した交流活動、特産品であるみかんなどを使った加工体験を組み合わせ「ふるさとの味体験教室」が生まれた。</p>				

事例名	2-1-8 野山の枝葉の商品化による地域おこし		ジャンル	食
地域	徳島県上勝町	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>上勝町では、第三セクター方式による株式会社いんどりを組織し、中山間地のどこにでもある地域資源のさくらやもみじなどを利用し、「つまもの」生産販売事業「彩」（いんどり）事業を実施してきた。その内容は、地域に暮らす高齢者の方々を中心に、野山の枝葉を商品として出荷販売する仕組みをさまざまな観点から組み立て事業化を果たした。1986年出荷が始まり、初年度116万円に過ぎなかった売り上げが、2003年度には2億円を超えるなど、大きな成果がもたらされている。株式会社いんどりは、第三セクター方式で1999年4月に設立され、町長が社長となり経営をおこなっている。現在、株いんどりの組合員は185名おり、平均年齢は67歳と高齢者を中心とした産業で、同時に女性の参加が多いことに特徴がある。この高齢者の方々が、商品を受注し出荷する上で大きな戦力になっているのが、IT活用のネットワークシステムである。</p> <p>現在、「彩」の商品売り上げベスト3は、モミジ・南天・笹の葉であるが、このような商品開発にも、県の農業改良普及所が連携し携わっている。また、料亭を中心としたニーズのくみ上げは現在でも徹底されており、例えば季節ごとの要望にこたえる商品開発などがおこなわれた結果、春の七草セット、節分・お盆・正月などの歳時記に合わせた商品が出荷されている。</p>				

事例名	2-1-9 失いかけた伝統茶「碁石茶」で地域再生 ～「本場の本物」が町の未来を拓く～		ジャンル	食
地域	高知県大豊町	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>碁石茶は、全国でも珍しい微生物発酵茶で、褐色でほどよく酸味のあるお茶であるといわれる。その味わいは独特であるが、その製法も独特である。碁石茶は、藩政後期の資料にも記載されるほどの主要産物であったが、昭和50年代には過疎化と高齢化によって生産者が全国でただ1軒のみとなり、まさに風前の灯であった。ところが、昨今の健康ブームの中で、「碁石茶は美容に良い、便秘に良い」とテレビ放送されたことにより、全国で唯一の碁石茶の産地である大豊町に注目が集まることになった。生産者のみならず、町役場にも問い合わせが殺到し、地元でも手に入らないほどの碁石茶の需要が発生した。碁石茶生産の唯一の伝承者として尽力してきた小笠原章富さんを中心に碁石茶生産組合が設立され、組合として一定の栽培・製造方法の確立を図ることになった。小笠原さんは、自らが培ってきた“秘伝のカビ”を惜しみなく分け与え、新しい生産者のバックアップをしていった。</p>				

事例名	2-1-10 黒にこだわって地域コミュニティを守る 「黒米クラブやまうち」		ジャンル	食
地域	佐賀県山内町	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>山内町は佐賀県西部、有名な有田市や伊万里市に接し、陶芸の里として窯元も多い人口 9,800 人の小さな町。町のシンボルは、奇岩・巨岩が多く、自然がいっぱいでスケールの大きな黒髪山（標高 516m）。この黒髪山にちなんだ“黒い”製品作りに取り組んでいるのが、山内町商工会青年部を中心メンバーとする「黒米クラブやまうち」（前身「やってみらんば隊」）である。</p> <p>毎年ゴールデンウィークには、有田大陶器市に大勢の観光客が訪れる。このため、多くの観光バスや自家用車が山内町内の国道 35 号を素通りしていた。平成 6 年、この観光客の一部でも山内に寄ってもらえないかと、商工会青年部は「やってみらんば隊」を結成、「路の駅」の誘致活動や地域特産品開発（黒米作り）に取り組んだ。さらに、黒米を使って菓子、うどん、そば、酒、味噌を作ったほか、黒米を使ったお弁当やラーメン、シュークリーム、おばあちゃんの手作りのまんじゅうやおはぎなど、企画を考えては町内を説得に回り、少しずつ委託生産者を増やしていった。活動は黒米を縁に自然保護や焼物作りなどにも広がった。黒へのこだわりは黒米だけではない。これまでに黒いスイカや黒い大根に挑戦し、今は黒い柿作りを行っている。黒米は霊峰黒髪山の湧水を使い、無農薬・有機栽培とした。</p>				

事例名	2-1-11 霧島で「食文化を大切にする」文化を育てた い		ジャンル	食
地域	鹿児島県霧島市	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>霧島町(平成 17 年 11 月市町村合併により、現在霧島市霧島地区)は人口 5 8 0 0 人、高齢化率 30% と少子高齢化の進む山間地にある。食に携わる関係者が、霧島の食の現状を把握し、栄養学や関連する学問の成果、実践を活用し、「霧島の食育」を推進する必要があると考え、平成 16 年 1 月、現代表千葉しのぶ（管理栄養士）が呼びかけて町民の自主グループ「霧島食育研究会」を発足させ、霧島の生活スタイルに適応した食育活動を行なうこととした。</p> <p>メンバーは町内に居住または勤務する管理栄養士・栄養士・食生活改善推進員・教員・社会福祉士・読み聞かせグループ代表・公務員・農業家・公社職員・看護師などで現在 15 名。平成 17 年 9 月鹿児島県より N P O 法人の認証を受ける。</p> <p>霧島に残る行事食「霧島講」などの人生の中の節目の食等の展示、昭和初期のいろり・ちゃぶ台のある霧島の食卓再現などを行う「霧島・食の文化祭」などを実施している。</p>				

2-2. 連携・交流

事例名	2-2-1 稲作体験ツアー		ジャンル	食
地域	青森県田舎館村	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信
◆概要 田舎館村は、弥生時代の遺跡である「垂柳遺跡（たれやなぎいせき）」から約2000年前の水田跡が発見され、古くから米づくりが行われてきた村であることから、日本の食文化をこれまで支えてきた米を最大限に活用した「稲作体験ツアー」を企画した。農業経験のない人の参加が多数で、地元の経験豊富な方と一緒に汗を流し、和やかな雰囲気の中で楽しく体験している。古代米といわれている「紫稲」や「黄稲」、そして「つがるロマン」の3品種を使い、田んぼに絵文字を描くもの。この事業には、村民がいろいろな方面で協力しており、収穫までの田んぼの管理や田植え、稲刈りの仕方・束ね方の指導は農協女性部が担当している。また、ツアー終了後の昼食は、村婦人会会員による手作り料理である。食卓には、農協女性部の加工部会員が作った「豆腐」や「味噌」、地元で採れたブドウやリンゴで作ったジュース等も振る舞われ、参加者同士が和やかに親睦を深めた。紫稲は「祝い亀」の材料として使われる。都市部の常連客のほか、アメリカ人やイギリス人、フランス人の参加者も年々多くなり、国際色豊かとなっている。				

事例名	2-2-2 そばのオーナー制度による地域おこし		ジャンル	食
地域	栃木県茂木町	地域的特性	農村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信
◆概要 荒廃が進む地区内の農地を蘇らせようと、平成10年地域住民が牧野地区むらづくり協議会を発足し、そば畑のオーナー制度とそば作付に取り組んだ。今年で7年目を迎えるオーナー制度では、年間約100組のオーナーが誕生し、地域住民との交流を楽しんでいる。そば作付面積は年々増加しており、平成15年度は約8haを作付けた。協議会では製粉機械を導入し、そば粉の販売にも取り組んでいる。平成13年には、地域で採れるそばや山菜、野菜などを提供する農村レストランを整備しようと、地区内18名の出資者が集い、そばの里まぎの協議会を発足させた。 平成15年3月には、「そばの里まぎの」と茂木町北部地区交流事業の拠点となる活性化施設「まぎのふるさと交流館」が完成した。地元産のそばはもちろん、茂木町ならではの手づくりの季節の味が楽しめるとあって、平成15年4月のオープン以来2万人を超える集客に恵まれている。レストラン営業と同時に、そば打ち体験の受け入れも行っており、各種交流事業を展開している。				

事例名	2-2-3 越後田舎体験 東頸城3町3村が連携し、多様な体験メニューを用意		ジャンル	食
地域	新潟県東頸城郡	地域的特性	農山村地域・豪雪地帯	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信
◆概要 日本でも屈指の豪雪地帯である新潟県東頸城郡は、ブナの原生林が広がる関田山脈からは日本海が望め、山の頂にせり上がるかのような棚田や茅葺き屋根の民家が随所に点在し、さながら日本の原風景ともいふべきたたずまいを残す地域である。この美しい風景を舞台装置に、自然とふれあう機会を都市生活者にも提供しようと、郡内の6町村（安塚町、浦川原村、松代町、松之山町、大島村、牧村）が共に手を携えて、平成10年度から行っている体験事業が「越後田舎体験」である。事業運営については、6町村と事業に賛同する地元の旅館・民宿や体験施設が協力して「越後田舎 体験推進協議会」を組織し、町村負担金と参加施設からの会費で事業費用を賄っている。体験事業の内容は多岐にわたり、春山遊歩や紅葉狩りなどの自然体験プログラム、ホテル観察や雪おろし作業などの環境学習プログラム、田植え・稲刈りや田舎料理づくりなどの農業・味覚体験プログラム、陶芸やわら細工などの伝統工芸・クラフト体験、スキーやパラグライダーなどのスポーツ体験と、全部で70を超えるメニューを揃え、「発見と感動のある本物の自然・田舎体験」をモットーとして事業を展開している。				

事例名	2-2-4 多様な食や伝統文化を「地域の宝」として活用し、体験交流を展開		ジャンル	食	
地域	新潟県村上市	地域的特性	農山村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>平成 20 年より 4 月より村上市と合併した旧山北町（以下、山北町と表記）は、地域の 9 割以上を山林が占め、林業を主とした第一次産業及び建設業が主要産業となっている。国の伝統工芸品「しな布」（木材の繊維を原料とする古代布）や古代農法の「焼畑」等、代々受け継がれた森林文化が残る一方、海岸線は奇岩と澄み切った海の国指定名勝天然記念物「笹川流れ」として有名で、夏場を中心に多くの観光客が訪れる。山北町では、平成元年度より地域住民主体の「魅力ある集落づくり事業」を開始。町内 48 の全集落に委員会を設置して地域資源（「地域の宝」）の再評価と活用に取り組んできた。平成 9 年には、住民・行政連携事業として「笹川流れ波物語」と銘打った体験交流プログラムの整備が始まった。平成 10 年には、公募の住民 14 名で構成される「さんぼく未来づくり検討委員会」が策定した「未来づくり構想」の中に、体験観光の整備、イベントの創設、特産品開発・振興等を内容とする「ふるさと山北まるごと体験事業」が位置付けられた。この検討委員会メンバーが発起人となって 1,000 万円の出資を募り、平成 13 年、「さんぼく体験交流企業組合」が設立された。山北町では海、山、川、田、畑という多様な自然の中で 256 種類もの食材が生産されており、各集落や家庭に伝わる伝統料理や行事食も数多い。「交流の館・八幡」内に設置された食事施設「食の工房・かがり火」において、様々な食の体験を提供するとともに、平成 18 年度からは実行委員会を組織し、「スローフード料理研修会」「さんぼくごっつお快議」「スローフードフェスタ in さんぼく」など、地域の食材・食文化を切り口にした様々な取組を展開している。</p>					

事例名	2-2-5 女性の視点で地元で漆器のファン作り		ジャンル	食	
地域	石川県輪島市	地域的特性	地方都市		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>輪島の代名詞といえば伝統工芸の輪島塗。だが後継者不足や高齢化などで従業者数、事業所数ともに落ち込み、生産額はピーク時の半分になったといわれている。そんななか、現代の生活の中に輪島漆器を取り入れてもらおうと活動しているのが「彩漆会（さいしつかい）」である。彩漆会のメンバーはそれぞれ何らかのかたちで輪島塗に関連している女性達である。彩漆会は輪島塗の職人ではないが、伝統を誇る輪島塗を少し遠巻きにおそるおそる眺めている人達に「もっと漆器を身近に、生活の中で使ってほしい、そして漆器の魅力を知ってほしい」と活動している。会の結成は、平成 9 年、10 年度に輪島漆器商工業協同組合主催の「輪島塗新商品開発事業」への参加がきっかけ。商品開発研究会のメンバーとして新しい輪島塗のコンセプトを提案し商品開発を行った。平成 11 年 2 月の東京ドームテーブルウェアフェスティバルに参加し、テーブルコーディネートを試みて事業は終了した。しかし、「このまま終えるのは惜しい、輪島塗の普及に自分達でできることをしたい」と、研究会メンバーを中心とする 8 名により平成 11 年 4 月に彩漆会は結成された。テーブルウェアフェスティバルに 3 年間出品を続けたところで、「日常生活に漆器を」という想いを実現するには、東京のフェスティバルの活動だけでは足りないのではないか、地元でも活動が必要と考えた。そこで、ターゲットを子供とそのお母さん達、お年寄りに絞り、小学校での輪島塗の家具膳に給食を盛り付けてお食事会など、地元で新たな活動を始めた。</p>					

事例名	2-2-6 御食国」若狭おぼまの伝統「食」を中心に捉えた「食のまちづくり」		ジャンル	食	
地域	福井県小浜市	地域的特性	地方都市		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>小浜市には、飛鳥・奈良時代に伊勢・志摩や淡路と並んで、朝廷に食を供給していた「御食国」としての歴史がある。また、平安時代以降は、「若狭もの」という呼称のもと、京の都の食卓も支えていた。小浜市では、こうした伝統ある食に着目し、食のまちづくりを推進している。食は、地域の伝統・文化・生活と密接な関わりをもっており、食に光をあてることによって、地域の総合的な政策も大きく方向づけることができる。例えば、歴史と伝統ある食文化に着目することは、地域のアイデンティティーの形成に寄与することになる。安全な食をたゆみなく供給するためには、農林水産業をはじめとする産業の振興が欠かせない。また、食を大切にすることは、それを育む自然環境を保全することにつながり、食を通じて人と人との交流も生まれる。そもそも人が生きるうえで欠くことのできない食をとらえることで、教育の大切さも見えてくる。</p> <p>このように、小浜市では、食を広範にとらえてまちづくりを行っていきたいと考えている。地域の財産である豊かな食に着目し、食を起点に、産業、観光、教育、文化、環境、福祉に至るまで、あらゆる分野の施策を一体的に展開する「食のまちづくり」を展開している。</p>					

事例名	2-2-7 地域が一つにまとまって都市と交流		ジャンル	食	
地域	静岡県島田市	地域的特性	農山村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>江戸時代、東海道の難所の一つとして数えられていた大井川が流れ、お茶の生産地としても有名な静岡県島田市の最北部伊久身地区に、地域の特産品販売とそば打ちなどの食育体験やガラス細工の加工体験などのできる農産物加工体験施設「やまゆり」がある。「農事組合法人いくみ」は、この施設の管理運営をするとともに、ここを拠点にしながら、地域全体で都市との交流を図り、伊久身地区のファンを作って活性化を目指す活動を展開している団体である。「農事法人いくみ」は、体験河口部、交流企画部、地域振興部、物産販売部で構成されている。体験加工部は、農家女性を中心となって「やまゆり」を運営している。「やまゆり」では、地元食材を使った手作りのこだわり商品（黒米パンや味噌、ほう葉もちなど）を加工・販売するほか、惣菜や仕出し弁当の製造、蕎麦打ちやパン作り、味噌作り、ガラス細工などの体験教室を実施している。体験教室は予約制となっているが、週末を中心に市内外の主婦グループなどの参加申し込みが多い。</p> <p>また、体験加工部の製造した商品は、直売野菜とともに市内のスーパーや病院などの安定した需要先を持っており、加えて、物産販売部と連携しながら、静岡駅のコンコースなど地域外での出張販売も定期的実施している。販売活動が順調なことから、「やまゆり」は地元女性の雇用の場となっている。さらに、地元高齢者が生産する少量農産物などを買い上げることにより、生きがい作りの効果を生み出している。交流企画部の活動は、主に子供を対象とした農業体験や自然体験の受入れである。「あぐりわくわく探検隊」では、島田市近郊の小学校高学年を対象とした年5回の活動で、黒米の田植えや収穫、お茶摘みや釜入り茶作りなどの農作業体験や、川遊びやヤマメのつかみ取りなどの自然体験、キャンプを通した伝統行事体験などを実施している。</p>					

事例名	2-2-8 地引き網体験 魚を捕って、さわって、豊かな自然を満喫しよう		ジャンル	食	
地域	京都府丹後町	地域的特性	漁村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>昭和 62 年 5 月、友好町である木津町（京都府）の小学校の修学旅行団が、初めて丹後町を訪れ、海遊び、地引き網、民話等の体験をした。修学旅行の自然体験型への移行がいられているが、丹後町がその適地として認められるようになり、以後多くの修学旅行団が豊かな自然とのふれあい、体験を求めて訪れるようになった。中でも、修学旅行における一番の人気はやはり地引き網体験で、初めて日本海を見る子供も多く、砂浜に駆け下りて、約 1 時間 30 分前に網が入られた場所で引き上げの合図を待っている。合図とともに 2 本のロープが子供たちの手によって引き上げられ、約 30 分後、日本海の荒波で育った鯛、スズキ、キスなどが姿を現した瞬間、地響きのような歓声がわき上がる。とれた魚は夕食のおかずとして子供たちの前に並べられ、自然のすばらしさを改めて感じる事となるのである。</p> <p>都会の人達に丹後町の豊かな自然を満喫してもらおうと始めた地引き網体験。中には初めて魚をさわる子もいて、賑やかに行われる。はしうど荘を宿泊地とした修学旅行の受け入れは、都会ではできない体験や地元の人々との交流を通じてさまざまなことが学べる機会として好評である。</p>					

事例名	2-2-9 元気な村づくり推進事業 都市との交流で、漁村への理解と水産資源の保護を図る		ジャンル	食	
地域	岡山県笠岡	地域的特性	漁村地域・島しょ		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>笠岡市は瀬戸内海に面し、大小 30 の島々が浮かぶ笠岡諸島を有する風光明媚な魅力あるまちである。『潮風のかおるまち笠岡』を本市のキャッチフレーズとして、笠岡諸島の主産業である漁業を全国的にアピールするため、豊富な自然を活かした笠岡諸島の特色ある体験漁業を展開しながら、参加者のニーズに応える事業に取り組み、魅力ある漁村・組合づくりと漁村の活性化に繋がる都市漁村交流推進事業を平成 9 年度から実施した。本事業は、漁村についての正確な理解と、水産資源・環境保護についての意識の醸成に資することを目的としている。事業の実施に際しては、地元漁協が主体となり、地区住民が一体となって実施していくために、漁協・婦人部・青壮年部・観光協会の代表者で協議会を組織し、推進員等関係者間の情報交換と連絡体制の整備を図った。その協議会の中で、本市ならではの特色ある体験漁業のプログラムを策定した。そして、漁協を有する全ての地区がそのプログラムの体験会場となるよう心がけた。具体的な取組みとしては次のとおりである。島しょ部の白石島では、家族連れを中心に、海洋探検、打瀬網体験、マリンスポーツ体験、水産教室、筏釣り体験等を実施し、真鍋島では底曳網・地曳網体験、海ポタル採取、花卉の整備等、島の生活を体験する事業を実施した。高齢化の進んでいる島しょ部では島の活性化にも繋がるということで、子ども達の受け入れに大変積極的であり、島での生活を満喫させるため 2～3 人で各家庭にホームステイさせて 1 泊 2 日の漁業体験を実施したり、地元の民宿の協力を得て掃除、風呂洗い等ボランティア活動体験を実施するなど、島を挙げての行事となった。また、陸地部では、笠岡市大島で地元小学生を対象に、課外授業の中で、中間育成した稚エビの放流から親魚になるまでのトータルな資源管理の学習に取り組み、海苔養殖の海苔網及び加工場見学、定置網・底曳網体験・魚つかみ取り体験・料理教室・水産教室等を開催した。</p>					

事例名	2-2-10 三谷いしがき棚田オーナー制度			ジャンル	食
地域	山口県徳地町	地域的特性	農山村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>徳地町の耕作地の約30%は山間に在り急峻な石垣で築かれた棚田である。オーナー制度を行っている大字三谷地区もそうした地域の一つで、20度から40度近い傾斜地の農地は高い石垣による棚田で、近代農業を阻み担い手の高齢化と相俟って耕作放棄地が家の側まで迫っている。</p> <p>そうした背景の下、平成13年に（社）徳地町農業公社が県と町の補助を受け“農地の保全”“都市住民との交流による農村の活性化”を旗印に大字三谷地区の2集落を対象に準備を進め、平成14年に「三谷いしがき棚田オーナー制度」が発足した。事業運営は地元主体で行うことを第一義とし、全戸を会員とする「三谷いしがき棚田会」を結成、事業は会が主体となって行っている。作業体験を始め事業内容やオーナー料金も地元運営の可能な範囲で設定し、4回の農業体験、3回の交流事業、2回の農産物の送付をオーナーへの特典とし、オーナー料金は三谷に因んで「1a当たり3万2千円」とした。また、行事の都度“地元野菜市”等も開催、オーナーには好評で、些少なながら地元住民に現金収入をもたらしている。行政や（社）徳地町農業公社は事業推進の補佐役となり事業を側面から支援している。</p>					

事例名	2-2-11 島の学校（鰯飼付漁体験） 地元の漁師と本当の魚の味・漁の醍醐味を体験する			ジャンル	食
地域	長崎県厳原町	地域的特性	漁村・島しょ		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>町では、農林・水産・観光商工・国際交流の担当など、6～7名の職員で役場内に横断的組織を結成し、地元資源の掘り起こしを行っていった。そこで、対馬が持つ様々な資源を有効活用するには体験型の観光が適していると結論し、長年培ってきた技術と島のありのままの姿を都市住民に教授する「島の学校」事業を立ち上げたという。その中の一つがこの「鰯飼付漁体験学校」である。「鰯飼付漁」とは聞き慣れない言葉だが、決して養殖ものを釣るようなものではない。対馬海流に乗って回遊してくる天然の鰯を毎日同じ場所同じ時間に餌を撒くことで飼いつづらす。飼いつづらされた鰯が集まってきたところを手投げ釣りで釣りまくる、という漁である。</p> <p>9～11月初旬までのシーズン中、漁は朝と午後の2回行われる。『鰯飼付漁体験学校』を開く際には、通常2艘の船を出す。本船にはプロの漁師が十数人乗り、鰯飼付組合の組合員への配当を稼ぐための漁を行う。こちらは遊びではなく、仕事である。一方、体験学習用の船は予備船と呼ばれ、漁師が3人乗るが、これは本来なら引退している年代の漁師で、予備船に乗ることで、賃金は出る、現場にいたいという気持ちも満足できる、人のお世話もできる、といったメリットにつながっている</p>					

事例名	2-2-12 イモの縁が町ぐるみの交流に発展「南北ポテトピア交流事業」			ジャンル	食
地域	鹿児島県山川町	地域的特性	農村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	
<p>◆概要</p> <p>鹿児島県薩摩半島の最南端の揖宿郡山川町（いぶすきぐんやまがわちょう）は、サツマイモ伝来の地。1705年に前田利右衛門が琉球から種芋を持ち込み、この山川で初めて栽培に成功したという。最近の芋焼酎人気でこの名前を目にする機会も増えている。当然さつまいもの出荷量は鹿児島県が最も多く、全国の4割を占める。一方、北海道の倶知安はジャガイモの大産地。この北と南の町をつないだのが「いも」であった。倶知安に転勤になった鹿児島県の農業試験場に勤務していた人から、倶知安はジャガイモの産地だと聞いて、いもの産地同士で何かやれないかと山川町から交流を申し込んだのが平成元年。さっそく倶知安からその年行われた山川町の「さつまいもフェスティバル」を視察に来た。冬の時期に北海道では色が少ないだろうと12月に花をプレゼントした。翌年3月には倶知安から山川町に雪がプレゼントされ、6月にはすずらんも。今度は倶知安の「じゃが祭」に山川町から参加。両町のこのような交流が定着し盛んになっていった。</p> <p>平成7年には姉妹都市提携を行い、南北ジュニア・ポテトピア交流が始まった。これは両町の小学生がお互いにホームステイをして、他地域を内側から詳しく知るとともに、家族的なつながりも深める交流となっている。海の無い倶知安からは、夏に山川町を訪れ、地熱発電所、フラワーパークや砂蒸し風呂を体験し、カヌーやバナナボートで海を満喫している。また、山川町からは春休みに倶知安を訪れて雪遊びを楽しんでいる。</p>					

2-3. 発信

事例名	2-3-1 はぼまい昆布しょうゆ（地域団体商標）		ジャンル	食
地域	北海道根室市	地域的特性	漁村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●
<p>◆概要</p> <p>組合員の多くが従事している「昆布漁業」に着目し、「昆布」を使用した付加価値商品の開発を行い、試行錯誤の結果、平成2年に全国で初となる昆布しょうゆを販売した。その後、大手のナショナルブランドメーカーを始めとする多数の競合他社が「昆布しょうゆ」を発売し、熾烈な競争を強いられるようになったため、それら競合商品との差別化及びブランド保護・促進を目的として、地域団体商標を出願した。地域団体商標に登録されたことにより、加工業務用として『はぼまい昆布しょうゆ』を使用したコンビニ米飯商品や漬物、魚卵加工品等からの引き合いがあり、それら商品にロゴマークを付した商品展開がなされている。また、地域団体商標取得を契機に、製造元である大手醸造メーカーと道外販売の販売代理店契約を締結したことで、道外販売分が道内販売分に乗せられるようになった。</p>				

事例名	2-3-2 「都市と農山漁村の交流」 —ゆとりとやすらぎ、食育の場の提供—		ジャンル	食
地域	岩手県一関市	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●
<p>◆概要</p> <p>岩手県一関市花泉町は岩手県の南の玄関口に位置し、昔からの水田地帯である。美味しいもち米（コガネモチ）という品種も収穫され、餅料理は花泉地方の郷土食であり、今でも冠婚葬祭等の行事のたびに餅を食べる習慣が残っている。しかし、臼と杵を使って餅つきをする風景は近年めっきり見られなくなり、このままでは伝統の餅つきの姿も見られなくなるとの思いから、平成5年、村おこし事業で地域の郷土食を守り、伝統食である餅を普及させようと提案したのが「出前餅つき」の案であった。お客が来るのを待つばかりではなく、自ら出向いてアピールしたいとの発想で、伝統食のお餅を平成6年より全国にアピールしてきた。また、伝統食として餅料理を普及する活動を県内外、海外と広く活動する一方で、町内で餅料理を提供する方法はないのかと、アグリビジネス講座等を受講し、農家のたたずまいの中でもっと餅をゆっくり味わって貰おうと平成12年に農家レストランを開店した。開業当時はまだ農家レストランは少なかったため、研修の場として提供していたが、利用者の口コミによって来場者が増加した。地区200年以上の屋敷や大正時代の漆器を活用して、餅料理に山菜や野草の料理を添えて、季節感のある食卓を提供するとともに、山菜や野草の調理法、効用についても紹介している。</p>				

事例名	2-3-3 日間賀島 漁業関係者と協働で、地元で水揚げされる海産物を観光資源化		ジャンル	食
地域	愛知県南知多町	地域的特性	漁村地域・島しょ	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信
<p>◆概要</p> <p>昭和57年頃より地元で水揚げされるタコを島のキャラクターとして誘致活動を行っている。その後、冬の閑散期の誘客として、地元で水揚げされ西日本へ流通されていたとらふぐを冬場の観光資源にできないかどうか着目した。この案は、冬場の漁業関係者の奥さん等の雇用確保に繋がるということで、漁業関係者の協力が得られることとなり、講師を招き調理の勉強を行った結果、現在では約70軒で安価なフグ料理が出せるまでになった。現在も毎年10月に「てっさコンテスト」を行い調理の腕を競っている。PR活動として鉄道会社との商品開発や各地へのキャラバン誘客活動、そして、グルメブームにのり、現在、宿泊者数は秋冬期が約11万人となり、春夏期約9万人を凌いでいる。また、全国的に海苔の価格が低迷する中、漁業及び観光協会関係者により「島のり会」を発足させた。高品質の養殖海苔を「島のり」のネーミングでブランド化するとともに、その他の海苔についても漁業関係者が島内の海苔加工団地で製品化したものを販売するのに観光協会も協力している。</p>				

事例名	2-3-4 天然トラフグを通じた地域ブランドの創出		ジャンル	食	
地域	三重県志摩市	地域的特性	漁村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●	
<p>◆概要</p> <p>東海地域でのトラフグ漁は、昭和 59 年頃から志摩市阿児町安乗地区の漁業者の主導により、厳しい資源管理施策を設定し、県外の漁業者にも働きかけることで全国でもトップクラスの漁獲量を誇るまでになった。こうした漁業者主による広域の資源管理の成功例は全国でも少ない。漁業者の自発的な資源管理の努力により漁獲量が増大したトラフグを、平成 11 年に主要水揚漁港である安乗漁港の名称を冠し「あおりふぐ」と命名し、漁業者によるブランド化への試みが始まった。あおりふぐ協議会はこうした事業を推進する組織として、平成 15 年 8 月に漁業者や旅館、観光関係団体が集まって設立され、活動を行っている。協議会はトラフグ漁業者と認定店から選出された理事と、関係団体等からなる助言者により構成され、あおりふぐのブランド化に必要と思われる事業を推進している。漁業者は資源管理の努力を継続して安定供給を図るとともに、あおりふぐを取り扱う飲食店等を志摩市内の「認定店」のみに限定している。取扱店では調理研修の実施などにより天然トラフグとしての商品価値の維持や、地域への集客の向上を図っている。</p>					

事例名	2-3-5 「水産ブランドどんちっち」 ー利己的から利他的にー		ジャンル	食	
地域	島根県浜田市	地域的特性	漁村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●	
<p>◆概要</p> <p>浜田市水産物ブランド化戦略会議は、ブランド化による付加価値向上を行うことで低迷する魚価を打破し、地元水産物の活性化を図ることを目的に平成 14 年 3 月 22 日に浜田市内水産関係 11 団体（生産者、市場関係者、漁業協同組合、水産加工業協同組合、研究機関、行政等）により設立された。（事務局は浜田市水産課）水産物戦略会議の、設立により実施した各年度の事業内容を簡単に説明すると以下のとおりとなる。1 年目：ブランド漁の選定、そのブランド名及びブランドキャラクターの決定 2 年目：ブランド名の商標登録、その商標登録を活用したブランド管理体制の構築及び、ブランド規格の策定 3 年目：ブランド鮮魚・加工品の販売、ブランド魚の地産地消の推進（地元飲食・宿泊施設による認証制度の構築、運用） 4 年目：販売を開始したブランド商品の品質の向上、流通量の拡大、地産地消の更なる推進といった 3 項目を柱として事業を展開この戦略会議の事業は、島根県の進める「しまね県産品ブランド化の重点 5 品目」に選定されており、この事業は、東京を主要販路と定め、少量でも高品質な食材をブランド化することを目的としていることから、東京の消費者団体（食の会）と提携しブランド商品のモニター制度を立上げ、消費者の意見を反映させたブランド作りを行っている。</p>					

事例名	2-3-6 ゆずの市場開拓から始まった地域づくり		ジャンル	食	
地域	高知県馬路村	地域的特性	農山村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●	
<p>◆概要</p> <p>昭和 50 年代半ばには、ゆずの生産が多くなったが、青果出荷の比率が低く、搾汁したゆず酢が売れない為に、新しい市場を求めて関西や関東の百貨店催事に参加した。その中、昭和 55 年から、将来生き残るためにはエンド・ユーザーへの直接販売・産地直送が必要と考え、試行錯誤の中、取り組むことになった。お客さんはすぐには増えなかったが、方向は変えずそのチャンスを待った。数年後、大手宅配業者が村まで荷物を集荷に来てくれるなど、地方からの産直に追い風が吹き始め、その時、初めてこの方法で産地が生き残れるかもしれないと思うようになる。数年を経過した昭和 60 年代、ゆずを搾ったゆず酢の販売では、簡単に市場が拡大しないと感じ、ゆず加工品の開発に入る。しかし、事業そのものが赤字続きで、商品開発後の設備投資も組織の理解が得られず、販売実績を積みほかなかった。それでも少しずつ商品を増やし、実績は上がっていった。そして昭和 63 年ヒット商品となる「ごっくん馬路村」の開発に入る。目標とする商品イメージは、村の谷川を流れるような限りなく水に近いゆずドリンクであった。試行錯誤の結果、商品が出来上がるが、当時これほどまでに村の宣伝やイメージアップにつながるとは思っていなかった。</p>					

事例名	2-3-7 吉野梨を、世界へ		ジャンル	食	
地域	熊本県氷川町	地域的特性	農山村地域		
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●	
<p>◆概要</p> <p>国内経済の低迷が続く中で、贈答用に売り出していた大玉梨の売れ行きが悪く、販売単価の下落が続いていた。新たな販売拡大を模索していた時、「日本産ブランド輸出促進事業」の話が町よりあり、海外輸出への取組が始まった。「日本産ブランド輸出促進事業」に取り組んだ平成16年度には、台風18号で大きな被害を受けた中、ジャンボ梨「新高」760ケース（3,800kg）を台湾に試験的に輸出した。輸出に伴い、梨部会員やJA やつしろ、町等の関係者により、宣伝販売隊を結成し、台湾の大型量販店等で販売促進活動を行った。台湾では秋の収穫を祝う「中秋節」に贈り物を贈る習慣があり、この贈答需要を狙ったことで、高価格で販売されたにも関わらず完売した。また、現地での評価も高く、手応えを得るテスト輸出となった。翌年の平成17年度には、前年の好評を受け、12,000ケース（60t）を輸出した。平成18年度には、15,360ケース（76t）を輸出している。毎年、宣伝販売隊を送り込み、販売促進活動を行うことで、年を追うごとに、台北でも「吉野梨」が知られるようになり、徐々にブランド化しつつある。</p>					

3. 住関係事例

3-1. 発掘・再興

事例名	3-1-1 国登録有形文化財旧上藻別駅通所		ジャンル	住
地域	北海道 紋別市	地域的特性	北方集落 開拓地	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

駅通所とは、北海道開拓時代の馬と共に泊まれる宿泊所であり、人馬の貸し出し、貨物の運送、郵便の取扱いなどの業務も担う北海道独自の制度によって設置された施設である。大正15年に建設された上藻別駅通所は、かつて「東洋一の金山」と云われた旧鴻之舞金山と紋別市街の中継点として、昭和15年まで活用されましたが、その後老朽化が進み、その歴史を閉じようとしていた。そこで、往時の賑わいを今に伝えるただ一つの建造物であるこの消えかけた遺産を守ろうと平成16年、元鉱山関係者5人の有志が立ち上がり、「上藻別駅通所保存会」を結成した。旧鴻之舞金山の歴史を後世に語り継ぐ資料館として、「駅通所を当時の姿に必ず蘇らせる」という会の熱い思いが地域住民の共感を呼び、活動初期から地域ぐるみの手づくりで、少しずつ修復が行われた。展示物の多くは住民からの寄贈によるもので、平成17年に歴史博物館として開館した。その後も、地域が一丸となって駅通所周辺施設の修復活動を続けるとともに、歴史の伝承活動を続け、今では、地域住民と他地域の交流、高齢者と若年者の交流など、開拓時代に駅通所が持っていた交流の場としての役割が現代に蘇っている。また、平成20年には、国の登録有形文化財に指定された他、韓国映画のロケ地にも採用されるなど、その知名度も上がっており、多くの観光客にも注目されるまでになっている。

事例名	3-1-2 百石町展示館(土蔵倉庫)～文化財を芸術文化発信の場に～		ジャンル	住
地域	青森県弘前市	地域的特性	城下町	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

百石町展示館は、明治13年に1,064戸を焼失した大惨事「弘前大火」を教訓に、燃えない建物をと、明治16年、宮本甚兵衛が土蔵造りの建物を「角三」呉服店の店舗として新築したのが始めの姿である。大正6年、津軽銀行がこれを買収し、多少の改装を加え、銀行本店として営業する。のちに、青森銀行に合併し平成10年10月まで営業していた建物で、現在でも二階からは土蔵倉庫に漆喰工法で表示してある「角三」の屋号を見ることができる。平成13年4月に、青森銀行から市に建物が寄贈され、市では、明治・大正期の建築手法を残す貴重な建造物として、平成14年1月に有形文化財に指定し、保存活用のための整備をした。整備に当たっては、市内の芸術団体からの美術館建設の要望や市民団体によるワークショップの意見を取り入れ、「市民の文化活動を支援する施設」「人々が集う施設」を中心としながら、「文化財としての特性を活かした施設」の三点を建物の性格として位置づけた。施設は、美術展示を中心とした文化活動の発表、鑑賞等の場として提供するとともに、情報コーナー、休憩コーナーや喫茶コーナー、また、屋外にはポケットパークを配置し、中心市街地の活性化にも期待している。さらに、市内最古の洋風木造建築物として無料公開するほか、歴史を振り返り、郷土意識の高揚が図れるよう、古い町並みの写真パネル等を紹介している。市民が集える場、憩える場ということで、喫茶コーナー「西洋茶寮 salon de 甚兵衛」では、昼食時にソフトアルコール(りんごシードル)、午後5時以降は、アルコール類の提供もしている。

事例名	3-1-3 地域の潜在資源である「町屋」を観光・交流拠点に「村上町家商人会」		ジャンル	住
地域	新潟県村上市	地域的特性	町家	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

村上市では 300 軒ほど残るといわれる町屋については、観光資源としてはほとんど重視してこなかった。村上の町屋はこれまでの商店街整備によって、外観はある程度近代化されているが、一歩店の奥に進むと、囲炉裏や梁、大黒柱に神棚、仏壇、そして豪快な吹き抜けの造りが現れ、江戸時代にタイムスリップしたような感覚を呼び覚ます。しかし、現在も人が住み、日々の生活や家業を営むこの町屋の内部こそが村上の宝なのだということに気づく人は、商店主の間でもほとんどおらず、「暗くて寒くて不便なただの古い家」という認識しかなかった。東京からUターンした吉川真嗣さんは、全国町並み保存連盟会長であり会津復古会の創設者でもある会津若松の五十嵐大祐氏との偶然の出会いをきっかけに、沈滞する村上のまちを町屋の魅力をもって再生しようと思立った。平成 10 年、吉川さんは町人町の店舗を 1 軒 1 軒巡り、町屋の内部を観光客に見せてもらうよう呼びかけ、和菓子、鮭珍味、地酒、郷土料理、染物、工芸品など村上の伝統産業に携わる老舗 22 店舗の参加により「村上町屋商人会」が結成され、吉川さんが会長となった。この取り組みは、「今まで店先だけで帰っていたお客様を一步中の町屋まで通して内部を見せる」というシンプルな活動ながら、町屋という歴史的建造物をまとめた数で、常時無料で公開するというのは全国的に見ても珍しい活動である。平成 12 年 3 月には町屋の茶の間にそれぞれの家に伝わる人形を飾り、お客様に巡って見ていただくという「町屋の人形さま巡り」という催しを企画した。「人形さま巡り」はその後毎年開催され、参加総数も 75 軒（平成 19 年実績）まで増えた。活動当初より、「地域活性化大賞」の受賞（平成 12 年度、翌 13 年には過去 10 年間の最高賞であるベスト・オブ・ベスト賞も受賞）、商人会副会長で染物店を営む会員がデザインした切り絵ポスターの新潟広告賞・優秀賞受賞（平成 14 年）、J R 東日本との連携による「S L 村上ひな街道号」運行（平成 14 年）、「総務省・地域づくり総務大臣表彰」（平成 16 年）など矢継ぎ早に話題を提供し、来場者数は順調に増加中である。

事例名	3-1-4 かいにょ苑～懐かしさと新鮮さを感じる生涯学習の場所づくり～		ジャンル	住
地域	富山県砺波市	地域的特性	農村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

「旧金岡家住宅」は砺波地方における典型的な姿を残す農家建築物であり、茅葺き屋根をもつ近年では稀有な建築物であることから、文化財としての価値をもつとして、平成 14 年 3 月 20 日に市指定文化財として指定された。ただし、指定において砺波市文化財保護審議会からは、保存のみならず広く市民への活用を図ることが重要であること、建築当時の姿を後世へ残す重要性から一部改修が必要、との意見があった。その意見を受けて、砺波市では平成 14 年に「旧金岡家住宅」の改修工事を行い、市民への利用を促すこととした。さらに、親しみをもたせるために愛称の公募を行い、砺波平野では屋敷の周囲の木々を「カイニョ」と呼ぶことから、その姿を残す建物として「かいにょ苑」と名付けられた。平成 15 年 4 月の開館以降、各種会合や、俳句・民謡・将棋などの生涯学習団体の活動の場として利用されてきた。また、敷地内での畑利用地では、近隣の保育園や幼稚園の授業の一環として、また市の事業である子育て支援活動としてサツマイモを育てている。

事例名	3-1-5 栄光をふたたび！木曾漆器発祥の地の発掘・再興		ジャンル	住
地域	長野県木曾町	地域的特性	スギ、ヒノキ産地	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

長野県木曾町は、人口13,119人、面積476.06km²の町である（平成21年4月現在）。木曾町福島にある八澤地区は、中山道福島関所で有名な福島宿に位置し、木曾川と支流が交わる山水豊かなところである。木曾ひのきをはじめとした天然の良材と清澄で多湿な空気は、漆器生産に絶好の条件であった。八澤地区は木曾漆器発祥の地となり、「八澤春慶塗」としてその名が伝えられている。八澤春慶塗の特徴は、一般的な漆器と異なり、塗った面の木地が見えることである。このような特徴を持つ八澤春慶塗は、は、俗に「八澤物」と言われ、ひのき・さわらの良材を用い、堅牢をもって名をなし江戸、高崎、京都、大阪などで問屋を経て売りさばかれ、その名が広く知られることとなった。八澤春慶塗の復興の気運を高めたのは、木曾学研究所の活動である。この研究所は、行政主導で発足したものである。ここでは、住民が主体となり、「過去に学び地域をみつめ、将来を創る」をモットーに地域の歴史文化を学ぶ活動に取り組んでいる。八澤春慶塗の復興事業は、人体や環境に害のない漆器が見直されていることを受け、木曾に生きる人がもっと身近に漆器を使い、八澤春慶塗の伝統産業を守っていききたいとの思いから始まった。町の中心地にある二軒の空き家の寄付を受け、一軒は曲物指物などの木地づくりの拠点として改修し、もう一軒は漆塗りの拠点として改修することとした。この復興の拠点の改修は、平成18年～19年にかけて完了した。その結果、木地の拠点は「木地の館 篠原」となり、塗りの拠点は「漆の館 林藤」となった。また、職人を育成することも必要であった。このため、木地師と塗師の指導者の確保が行われ、それぞれの職人を育成する活動が進められた。

事例名	3-1-6 彦根にまつわる「赤」を活用した地域振興		ジャンル	住
地域	滋賀県彦根市	地域的特性	城下町	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

滋賀県彦根市は、人口111,278人、面積196.84km²の市である（平成21年4月現在）。彦根市では、彦根城を資源とした観光施策や城下町としての街づくりが進められてきた。しかし、大都市への人口流出や若年層の街づくりへの関心が低下してきたことを受け、幅広い世代が関心を持ち、若者が積極的に市民活動に参加できるような環境が必要となった。そこで、彦根ゆかりの「井伊の赤備え」や「赤鬼」の歴史に着目して、「赤色」を地域資源として確立することが市民によって計画された。彦根市では、市民団体を中心に幅広い年代を巻き込んだ地域振興を図るため、「赤色」を地域資源として確立する取組が進められている。平成19年度の「国宝彦根城築城400年祭」並びに平成20年度から平成21年度の「井伊直弼と開国150年祭」においては、「赤色」が垂れ幕や法被などに使用されたこともあり、「彦根＝赤色」のイメージが市民に浸透してきた。「ひこね赤祭り」を主催する「彦根 RED 計画」では、「彦根＝赤色」のイメージを全国に発信することを当面の目的とする取組を進めている。具体的には、平成19年から毎年400台以上の赤い車を全国から集め、ライブイベントや屋台村の設営などを行い、7,000人以上を動員している。特に、彦根市内の道路を赤い車が埋め尽くすパレードは圧巻であり、観光客や市民からは彦根の新しい祭として注目を浴びている。

事例名	3-1-7 木製歌舞伎座「内子座」の保存		ジャンル	住
地域	愛媛県内子町	地域的特性	農山村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

この劇場は、木蠟や生糸等の生産で経済的にゆとりのある時代に、芸術、芸能を愛してやまない人々の熱意で生まれた木造の劇場です。あるときは、歌舞伎、人形芝居、あるときは落語、映画等、農閑期には、もてはやされ出し物が内子座を彩り、人々の心の糧として大切にされた。名前を「内子座」と言う。内子座は、大正5年2月(1916)大正天皇即位を祝い、創建。木造2階建て瓦葺き入母屋造り。ホールとして活用後、老朽化のために取り壊されるところ、町民の熱意で復元。昭和60年10月、劇場として再出発。現在では年間7万余人が見学し、1万6000余人が劇場活用。約650人で劇場は一杯となった。平成2年(1990)10月30日は、内子座復元後、初の歌舞伎公演とあって、町は湧きに湧いた。江戸末期から明治にかけて、和紙と木蠟で栄えた内子は、豊かな富の蓄積が、文化の殿堂“内子座”建設へと拍車をかけた。“内子座”は、大正天皇即位を祝いに建設された本格的な歌舞伎劇場である。柿落としの興業は、「吉田伝治郎」の人形芝居であった。当時の人々の楽しみといえば、大阪歌舞伎とこの人形芝居で、弁当、酒、肴持参で見物に出かけたそうである。

事例名	3-1-8 高齢化で途絶えた祭を復活-木浦鉱山地を離れた若者が継承-		ジャンル	住
地域	大分県佐伯市	地域的特性	鉱山地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

大分県の南端にある佐伯市宇目木浦鉱山地区では、四百年以上前から銀や錫を中心とした鉱石の産出が行われ、山間奥地の狭小な地形にもかかわらず映画館やパチンコ店、遊郭までも立ち並び、地名どおり鉱山で賑わいを見せた村であった。しかし、昭和19年に閉山し、一時期新鉱石の発見で持ち直したが平成二十一年に再び休山となった。鉱業のない木浦鉱山がかつての鉱山らしい賑わいを見せる瞬間が二年に一度だけある「木浦すみつけ祭り」である。しかし、「高齢化」により平成十八年末に行われた木浦鉱山地区総会で、木浦すみつけ祭りは、中止されることが決まった。それから約半年が経過し、これまで一緒に荒神舞をしていた同僚から「このまま伝統ある木浦鉱山の文化を途絶えさせていいのだろうか。地元のお年寄りたちをもう一度やる気にさせることはできないだろうか」と相談があった。その後、今まで祭りに携わっていた若者計五人で集まり、木浦鉱山区の方々に祭りを継承しなければならないという使命感が欠落していたことを詫言、「どうにかわれわれの手で祭りを実施させてもらえないか」と交渉した。その結果、「祭りの再開を若者に任せると」の結論をいただき、平成二十年二月の祭りの実行が決定された。私たちは、祭りの意義を問われれば、木浦鉱山区の方々にそこで居住していることの誇りを持ってもらうこと、そして木浦鉱山区を離れていった方々にそこ生誕した者としての自覚を持ってもらうこと、などと認識している。

3-2 連携・交流

事例名	3-2-1 小樽雪あかりの路デザイン・アートから地域創造をめざす		ジャンル	住
地域	北海道小樽市	地域的特性	商業都市	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

夏は観光客でにぎわう小樽も、冬は雪の音が聴こえそうなほどひっそりと静まりかえる。人々も心をとざしがちになる、この「冬」を逆手にとって、歴史的建造物等を数多く有する街並みや景観を有効活用した新しいイベントが開催できないか、通過型観光から宿泊型観光にしていくにはどういった方策があるのか、こんな発想から官民一体となった議論の末、心あたたまるイベント「小樽雪あかりの路」が11年前にスタートした。運河、旧手宮線という北の歴史の最重要スポットを会場に、今では市街中心部をはじめ小樽全域に広がりを見せ、約15万本のろうそくと、運河の水面に浮かべた400個の浮き玉キャンドルや散策路に設置されたスノーキャンドル・オブジェなどの温かな「あかり」が小樽を訪れる人々を魅了し、北海道の冬の風物詩までに成長している。イベント名は小樽ゆかりの作家伊藤整の詩集「雪明りの路」（大正15年出版）に由来。平成10年11月に市民らで構成される小樽観光誘致促進協議会が実行委員会を立ち上げ、平成11年2月に第1回小樽雪あかりの路が11日間にわたり開催される。『小樽雪あかりの路2000年カウントダウン』と銘打ち、平成11年12月31日から平成12年1月1日にかけて小樽運河に2,000本のキャンドルを灯すなど、開催期間中以外にもプレイベントを実施し、雪あかりの路をPR。平成12年2月～コンサートを企画、来場者が気軽に体験出来る参加型のイベントなども企画し、好評を得ている。平成16年11月国土交通省より「手づくり郷土賞」（地域活動部門）を受賞。平成18年3月「第10回ふるさとイベント大賞」において、道内イベントで初となる大賞（総務大臣表彰）を受賞。平成19年1月「第2回JTB交流文化賞」において、歴史的遺産を活用したまちづくりとして最優秀賞を受賞した。

事例名	3-2-2 石蔵を活用したデザイン・アートから地域創造をめざすZMP0「アートチャレンジ滝川」		ジャンル	住
地域	北海道滝川市	地域的特性	鉱山地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

2000年秋、滝川市出身の世界的デザイナーで彫刻家・五十嵐威暢さんが、公園モニュメント制作やJR札幌駅デザイン・アートワークのため、44年ぶりに帰郷した。五十嵐さんは、デザイナーとしていち早く世界にデビューし、ニューヨークの近代美術館のカレンダー制作や国内大手企業のロゴマーク・デザインを数多く手がけ、その後彫刻家となって活躍している。04年には、仕事の本拠地をロサンゼルスから日本に移し、現在は神奈川県横須賀市にアトリエを構えている。五十嵐さんは、滝川市の商店街の変わり果てた姿や活気のなさに、何とかしなくてはいけないと思った矢先、同級生の一人が「お祖父さんの建てた石蔵でコンサートをさせて欲しい」との一言から、太郎吉蔵の改修に向けて行動が始まった。地域が輝くには、未来に向けての夢や理念が必要である。五十嵐さんは、まちの美しい景観や快適な環境が活かされていない現実に気づいた。日本や世界の優れたアーティストやデザイナーの力を得れば、世界中から人びとが訪れる魅力ある芸術文化都市に生まれ変わることが出来ると考え、友人達と「芸術公園都市構想」を作成して滝川市に提案した。五十嵐威暢さんは、この構想を実現するためには持続した活動が必要と、「アートチャレンジ滝川（A.C.T.）」を設立する。03年11月、NPO法人として認証を受けて、芸術公園都市の実現をめざして『理想の田舎をつくる運動』を展開している。地元の人にとって「魅力的な滝川」、外の人にとって「理想の田舎」を実現することは、全国や世界の才能ある人とネットワークを構築することから可能になると信じ、挑戦を継続して行なっている。

事例名	3-2-3 奥州街道羽州街道追分を活用した観光振興	ジャンル	住
地域	福島県桑折町	地域的特性	街道街
目的	発掘・再興	連携・交流	● 発信

◆概要

奥州街道・羽州街道追分は一般住宅地となっていた奥州街道から羽州街道へ分岐点（追分）を「古の街道」に因んだまちづくりの大いなる財産にしようという地元住民の熱意と自治体の協力により平成18年度に整備された公園である。整備に際して地元自治会（追分地区まちづくりを考える会）や街道に関心のある人々が中止となって絵画や地元の方の話しを下に道標、柳の木、御休憩所等が忠実に再現された結果、人や物、情報の往来で賑わう「追分長寿会」による花植え、草刈りが行われるほか、御休憩所への俳句・絵手紙の提示により、訪れた客が楽しめる工夫がされ、地元より東北各地から街道や歴史愛好家が訪れる交流の場としても活用されている。また、「追分」の整備をきっかけに追分周辺を歩いて楽しめる地域づくり懇談会の設立や商工会、桑折町、女性団体連絡協議会による地域のアンテナ所婦「桑折御地蔵」が整備され町の観光・物産情報の案内や来訪者へのおもてなしが行われるようになるなど「追分」を中心とした住民主体の地域づくりが広がっている。

事例名	3-2-4 足袋蔵の保存で生まれた、市民のネットワーク「行田足袋蔵ネットワーク」	ジャンル	住
地域	埼玉県行田市	地域的特性	城下町
目的	発掘・再興	連携・交流	● 発信

◆概要

埼玉県行田市（ぎょうだし）は古代蓮の里で知られるが、忍（おし）城下として栄えた歴史のある町であり、かつては足袋の一大産地であった。最盛期には年間8,400万足が作られ、全国シェアは80%に達していた。まさに町全体が足袋工場のような状況で、箱屋、印刷屋など関連産業も盛んだったという。足袋の出荷が10月頃に集中することから、江戸末期から昭和30年代にかけて保管用に多くの足袋蔵が建てられた。行田市では平成12年から商工会議所を中心に複数の大学の協力を得て委員会を設置し、市内に70棟余りが残る足袋蔵や歴史ある街並みを活用したまちづくりの検討を進めていたが、平成15年、蔵の1つが取り壊されるという話が出た。昭和初期に建てられた店蔵で、早速、持ち主を説得するとともに行政の支援を引き出して、保全のための修復に取り掛かった。まちづくりの検討はいつの間にか実行の段階に入ったが、建物の傷みが思ったより激しく、当初の見通しよりもかなり大掛かりな事業になったが30～40代のサラリーマン、自営業者、建築家、大学の先生など現在40名により平成16年に「NPO法人 ぎょうだ足袋蔵ネットワーク」が設立され、蔵は、「忠次郎蔵」と名付けられ、今では国登録有形文化財になっている。2階はネットワークの事務所・集会室であるが、1階では本格的な手打ちそば屋を営業している。また、解体予定の足袋工場についても所有者の協力を得て、足袋の博物館として活用している。

事例名	3-2-5 高田の雁木	ジャンル	住
地域	新潟県上越市	地域的特性	豪雪地帯
目的	発掘・再興	連携・交流	● 発信

◆概要

雁木とは積雪時に通路を確保するため、家屋の一部やひさしを連続的に張り出したもの。雁木は、私有地を提供して雪に埋もれる道を協力して確保しようという、雪国の生活の知恵であり助け合いの象徴といえる。雁木は雪国高田の代名詞にもなっており、地域において歴史的資産として認識されている。豪雪地帯高田の風土と雁木は切っても切れない関係であり、降雪時のみならず日常の重要な生活通路として住民に広く利用されている。現在でも約14kmという日本一の総延長を残している事実は雁木が地域に根付いていることの証拠ともいえる。また、雁木通りにおいてお祭りイベントである時代まつりを開催したり、角巻（昔の防寒着）を身につけ雁木通りを練り歩くあわゆき道中などのあらたな活動も生まれており、雁木の魅力を高めている。「雁木シンポジウム」の開催は、まったく官が開催に関与していない、雁木をもつ地域住民による開催であり、社会資本としての雁木が地域の住民に親しまれ、積極的に維持、活用し、個性的で魅力的な地域を作り上げていこうという表れといえる。

事例名	「3-2-6 刃物のまちづくり」で地域を活性化 —地域挙げて個性ある産業観光地づくりを推進—		ジャンル	住
地域	岐阜県関市	地域的特性	刃物の産地	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

関市は、岐阜県のほぼ中心に位置し、鶉飼と清流で名高い長良川の中流部にあつて、「西のゾーリンゲン 東のセキ」と言われ、世界的な刃物産地である独・ゾーリンゲンと並び称される、世界を代表する刃物産地でもある。関市の刀鍛冶の起源は、鎌倉時代に刀匠「元重」がこの地に住み着いた時に始まるといわれている。「関の孫六」で有名な孫六兼元（二代目兼元）や兼定らの有名な刀匠を生み、最盛期には三百人もの刀匠を擁する刃物の産地として栄えた。関市の一大イベント「刃物まつり」は、十月の体育の日の前の土・日曜日に開催される。刀祖・元重の遺徳をしのび、「刃物のまち・岐阜県関市」を内外に広く宣伝し、刃物産業の発展に資するとともに、健康で文化的な祭典を目的に、昭和四十三年に第一回を開催し、平成二十年で四十一回目を迎えた。刃物まつりを通して「刃物の正しい使い方」「身の回りの道具としての便利さ」をPRするため、毎年内容を充実し開催している。「関の刃物とまちおこし」が五月十七、十八の両日、市中心市街地の本町通り商店街を会場にして開催された。これは、関商工会議所が主催となつて、「関の刃物」ブランドを高めるとともに、市街地の活性化、農村部の再生を図るために行われた新しいイベントであり、平成二十年で二回目となる。

事例名	3-2-7 職人の街「看板の似合うまちづくり」活動		ジャンル	住
地域	京都府京都市	地域的特性	商業都市・町家	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

姉小路界限は、京都の都心にあつて、様々な業種を営む老舗と小さな商店と町家を含むごく普通の住宅が建ち並ぶ、やさしい落ち着いたまちである。低中層の町並みからはどことなくまちの人の生活の匂いを感じ取ることができ、昔から住のあたたかみと職の活気が響きあい、育みあつて栄えてきた職住共存のまちです。そんな界限において、平成7年6月に11階建てのマンション建設計画が持ち上がりました。対象地は旧京都ガス発祥の地で所有者の好意で敷地の一部はひろばとして開放され、界限の人に親しまれてきた場所であつた。周辺町内会からは高さを低くしてほしいとの要望が出され、活発な反対運動に展開していった。反対運動を契機に将来のまちづくりを見込んだ組織づくりと活動の展開についての学習会を重ね、姉小路通を中心に、南北は御池通と三条通、東西は河原町通と烏丸通間の住民により、7年10月に「姉小路界限を考える会」が発足した。会の最初の活動は、界限に点在する老舗に著名な書家による木彫の看板が掲げられて「まちの顔」となっていることに着目し、「看板の似合うまちづくり」に取り組んだ。この界限には特色ある老舗とともに、非常に洗練された伝統技術を持つ職人の工房も数多く見受けられ、会では界限に住む老舗の主人や職人の方にお話を伺い、紹介していく「姉小路にんげんマップ」シリーズを企画した。これは大変好評を博し、活動の重要な柱の一つとなっている。また、会設立以来、「京のまちかど姉小路界限より」と題して、活動内容を会報として発行している（現在までに26号を発行）。看板や町家のライトアップの企画を進める内に、昔町内を照らしていた辻行灯の話に広がり、界限のお宅から古い行灯が見つかり、夏の夜の灯りをテーマとしたイベントに展開した。地藏盆の夜、通りに手作りの行灯を並べ、ライトアップした看板や町家を見やりながら、子どもたちはペットボトルの提灯を持って通りを行き来する、「灯りでむすぶ姉小路界限」と題したこの企画は、平成9年度から継続され今では都心界限の夏の風物詩となっている。

事例名	3-2-8 京町家保存・再生・情報発信活動		ジャンル	住
地域	京都府京都市	地域的特性	商業都市・町家	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

千年の都、京都の町家。平安京の町割りを下敷きに中世、近世を経て洗練と完成を見た伝統的な都市住宅が京町家と呼ばれている。ひとつひとつの町家が伝統工法の優れた技術の集まりであると同時に、町家はそれぞれが連なり、向き合うことで、奥行きのある京都の町並みをつくり上げてきた。隣りあって住むなかで培われた作法、四季を愛でる工夫や年中行事、そのような都市の生活と文化を継承する受け皿が京町家である。伝統的町家の継承といっても、町家を昔のままただ保存していくだけでは、現在の多様な生活条件、社会状況に対応できない面がある。まず、ここに暮らす人々に対して住まい易さ、安全性などが確保されなければならない。また、本来、職住共存の場であった町家の経済基盤として、新しい活用の方法を考えることも必要である。長年に亘って、京町家の中に蓄積されてきた暮らしと建物の様々な知恵や工夫を再評価し、それを現代に生かす形で町家を継承していくことが必要であり、これが京町家の再生である。

事例名	3-2-9 盆踊りの継承活動で世代と地域をつなぐ「大見盆踊り保存会」		ジャンル	住
地域	香川県三野町	地域的特性	農山魚業地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

香川県の西部にある三野町（みのちょう）は、人口1万人の農林水産業の町。「三野町大見盆踊り保存会」は三野町大見地区の公民館を活動拠点として、子供達に昔から伝わる盆踊りを継承する活動で、世代間、地域内の連携を培っている。明治の頃から続くといわれる盆踊り「まねき」や、大正の初期から始まったとされる「地唄（じゅうたい）」はかつて盛んに唄われ踊られていたが、第二次大戦の頃に途絶えてしまった。昭和30年頃から各地で少しずつ復活し始めたが、その後盆踊り自体がはやらなくなり、子供向けの新しいものは別として、伝統的な踊りは引き継がれない状況になっていった。そこで、昭和59年に公民館長の香川清美氏が働きかけて、盆踊り保存会を結成。三野町ではその年から毎年、小学校の校庭で盆踊り大会を開催するようになった。保存会の活動が本格化したのは平成3年。大見分館長の佐藤義憲氏（現町長）が、伝統芸能を子供たちに指導することの必要性を訴えて各方面に協力を呼びかけ、対象を小学生全員に広げて盆踊りの指導を行うようになった。平成9年からは幼稚園でも指導を始めている。

事例名	3-2-10 秘窯の里、伊万里市大川内山の活動		ジャンル	住
地域	香川県三野町	地域的特性	窯業	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

伊万里焼は、遡ること遠く江戸時代、鍋島藩の御用窯として、その卓越した技法を守るため、大川内山に優秀な細工人や画工を集め、色鍋島など当時としては技術の粋を結集させて製陶にあたらせたのが始まりである。先人たちが築き上げた「鍋島」の伝統を受け継ぎながらも、それぞれの窯元が独自の持ち味を出しながら作陶に取り組んでいる。30数件の窯元が立ち並ぶ大川内山では、各窯元が一体となった「大川内山振興協議会」が、毎年春と秋に、春の窯元市・藩窯秋祭りとして陶器市を開催。お気に入りの焼き物が格安で手に入るため、この時期は大勢の焼き物ファンが来訪している。「大川内山振興協議会」では、藩窯秋祭りの一つとして「献上の儀」を開催。窯元たちは、先人たちが築き上げた技術を再現しながら、世界に一つしかない焼物を全て手作業で製作。当日関係者は袴姿に身を包み、かつての将軍家等への献上の模様を再現し、本市と縁のある自治体へ赴き、「献上の儀」という形で焼物を贈呈し親交を強化。大川内山では夏、各窯元オリジナルの絵付けによる風鈴が軒を飾り、透明感溢れる風鈴の音色を創出。各窯元の軒先では、直径約20cmもの風鈴が、来訪者を出迎えている。大川内山は山水画を思わせる大屏風岩に囲まれた中に歴史ある窯元が立ち並ぶ風情ある観光地。今年4月からは、ふるさと伊万里を愛する市民による観光ボランティアガイドが発足。「秘窯の里大川内山」や「伊万里市街地」をお勧めコースに熱心な案内を展開している。

3-3 発信

事例名	3-3-1 小樽ガラス市		ジャンル	住	
地域	北海道小樽市	地域的特性	商業都市		
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信	

◆概要
 小樽市では、明治時代から、燈火用品、薬瓶、漁業用浮き玉などが製造されてきた。今日でも多くのガラス職人やガラス作家が工場や工房を営んでおり、様々なガラス製品は、小樽市を代表するブランドの一つになっている。このきっかけを作ったのは、浅原健蔵氏と浅原千代治氏という同じ姓をもつ二人の人物である。浅原健蔵氏は、小樽で初めて石造倉庫を店舗に活用し、販売拠点としての成功例を示した。また、浅原千代治氏は、自ら工房を開業して、制作過程の公開や制作体験という方式を取り入れた。二人の店舗や工房は、観光客を中心に評判となった。その後、市内外で修行を積んだガラス工芸作家といわれる人たちが独立し、小樽に工房を開業するようになった。現在では10を超える工場や工房が集積しており、こうして小樽市の「ガラスのまち」としてのイメージが強化されてきたといえる。この「ガラスのまち」小樽市の活性化を図るため、小樽商工会議所は、平成17年度から3年間中小企業庁の「JAPANブランド育成支援事業」を受託した。この事業は、産学官連携による「OTARU-ガラス工芸品の世界ブランド化プロジェクト」を通して、小樽市のガラス製品のブランド化に取り組むものであった。この事業の受託期間が終わりに近づいた頃、関係者が集い、新たな方法で小樽市のガラスをPRすることができないか検討した。すると、浅原健蔵氏との取引が縁で東京から小樽市に移った出口新一郎氏から東京の「すみだガラス市」のような事業を小樽市で実施できないかという提案があった。これを契機に検討が行われ、開催が決定されたのが「小樽がらす市」である。

事例名	3-3-2 8000点の民具を只見町方式で整理しインターネットで検索できるエコミュージアム		ジャンル	住	
地域	福島県只見町	地域的特性	山村豪雪地域		
目的	発掘・再興	連携・交流		発信	●

◆概要
 福島県南会津郡只見町は、福島県の北西部に位置している。只見町は特に雪が多く、3m以上も積雪することがある。生業は、農業を中心としているが、只見町の大半が山林であるために、これを利用する伐採業も盛んに行われていた。冬季は、雪におおわれ農業を行うことができないため、雪を利用した木材搬出、関東稼ぎと呼ばれる出稼ぎによる屋根葺等が行われ、春～秋までは農業、冬季には別の職業という具合に兼業を行う家が多く、それらの職に関する民具が多く確認されている。こうした只見町の豊富な民具であるが、使用者が整理作業を行うという独特な整理スタイルを確立し、一般的に“只見町方式”という呼び方で、これから民具整理を行う自治体の注目を浴びてきた。只見町では、使用者＝調査者になることで、細かい民具の情報までがカードに記入され、今まで、研究者が着目してこなかった民具の情報が盛り込まれている。
 “只見町方式”によって整理された民具は4,417点にのぼり、1992年に『図説 会津只見の民具』という報告書にまとめられている。それ以降も継続して整理作業が進められ、現在では8,000点以上の民具が収蔵・整理されている。神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の地域統合情報発信班では、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」を中心に、只見町の豊富な資料を体系化し、わかりやすく総合的に提示できるようなインターネット上のシステムを開発することにした。1960年代にジョールジュ＝アンリ・リヴィエール (G. H. Rivière) によって提唱されたエコミュージアムの概念にならってこのネットのエコミュージアムは民具を通して自然と人間の相互関係を紹介している。只見町インターネット・エコミュージアムは「只見町の風景」「自然と暮らし」「只見町の屋根葺職人」「只見町所蔵民具検索」の四つの部門で構成されている。

事例名	3-3-3 小江戸川越国際都市化支援継続プロジェクト		ジャンル	住
地域	埼玉県川越市	地域的特性	城下町	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

東京国際大学による「現代的教育ニーズ取組支援プログラム通称：現代 GP (Good Practice)」というプログラムを活用して行った活動である。川越市は、江戸時代に徳川の守りを固める城下町として発展し、今日でも歴史的な町並みや寺院など多くの文化財が保存され、「小江戸川越」とよばれて親しまれている。年間 600 万人を超える観光客が訪れ、川越祭りは関東 3 大祭りの 1 つに数えられている。また、豊かな歴史的、文化的資産があるだけでなく、2003 年に埼玉県内で初めて中核市に指定され、海外に 3 つの姉妹都市がある。その 1 つがアメリカのセーラム市です（1986 年 8 月 1 日姉妹都市提携）。この取組では、プロジェクトワーク型の実践学習を通して、学生と市民が共に学びながら、これらの文化資産をとらえなおし世界に向けて発信する力＝「地域まるごと翻訳力」を伸ばすことを目指している。世界に通用する英語コミュニケーション能力は、こうした実践的な教育の中で身につけていく。さらに、この実践的な教育から大学と地域との連携を「双方向の知財循環・相互協力による新たな知的価値の創造」という新たな概念で捉える。相互連携型教育活動として再構築し、この循環型の連携の中で、持続的な地域活性化が可能となるとともに、大学における教育・学修の質的向上も図る。

事例名	3-3-4 古民家再生プロジェクト		ジャンル	住
地域	石川県	地域的特性	農産漁村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

石川県では現在、県内に残っている使われなくなった、古民家（農家や町家など、概ね昭和 20 年以前に建てられたもの）を再生し、現在のニーズに合わせた形での有効的な活用を検討するために、「古民家再生活用推進プロジェクト」である。60 年以上の長い年月にわたり、風雪に耐えてきた古民家は現代の住宅には決して真似することのできない、風格と魅力に溢れている。長い年月を経て、地域の風景や景観をつくり出しているものもある。太い柱や梁などの部材は、いまでは手に入れることが難しい立派な部材が多く、また建物に用いられている大工棟梁や職人の技術は、現代の匠でも真似することができないものもある程、レベルは高い。これら古民家は大変貴重で、価値があり、石川県の誇れる地域財産である。この事業では、古民家情報をホームページで公開し、古民家を求めている人に対して、広く古民家情報を公開・発信し、今後も古民家を有効に使っていくためのサポートをしています。U・I ターン希望者に対して、広く空家等の情報を公開することにより、その便宜を図るものである。

事例名	3-3-5 「新七条寺子屋」活動		ジャンル	住
地域	京都府京都市	地域的特性	商業都市	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

この事業は京都市立七条中学校で日常的に行われている授業を一般に開放し、多感な年頃の生徒とともに受講する先生の自主的な取組。“学校文化の発信”と“地域からの学び”という互惠性の視点を大切にしながら、地域に根ざす開かれた学校教育を推進していくなかで、子どもたちの心の成長に寄与することを目的としている。普段の授業に社会人を受け入れる京都市下京区の七条中の「新・七条寺子屋」が、2007 年から行われている。国語や数学、理科など毎月 10 前後の授業を公開しており、中学生と机を並べた受講者は昨年 12 月末で延べ 100 人を超えた。参加した地域住民や保護者からは「中学校の学び直しができる」「普段の中学生の姿が見られる」と好評な上、教師の授業改善や保護者の学校理解にもつながっているという。

事例名	3-3-6 襖文化の振興活動		ジャンル	住
地域	大阪府大阪市	地域的特性	商業都市	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

和室を構成する重要な部材に襖、障子があるがこの歴史は古く平安時代にまで遡る。この時代の代表的な建築である寝殿造り建築は太い柱で支え、間を仕切る壁のない広間様式で造られ、開放的空間を日々の生活や、季節の変化・行事祭礼・接客饗宴に応じて、屏風や几帳など障子を使うことにより内部を仕切った。やがて、絹織物を張った「衾障子」は「襖障子」と称されるようになっていった。襖は用いられる素材、部材、意匠などは日本固有の伝統技術の結晶である。日本独特な気候の中で快適に過ごせ、また、季節、間合いを感じながら過ごせる日本建築になくはない機能性溢れる部品であるとともに、表面は何度でも張り替えが可能なエコロジカルな部材でもある。しかし、洋式建築の普及によって襖の普及率は下降の一途を辿っておりこのままの状態が続くと技術者が途絶え正しい技術的伝承もできなくなることが懸念されることから、伝統的な和室文化の伝承を行うべく、関西の内装材会社を中心となり襖振興会（会員数46）を結成し、和襖の良さを伝えるホームページを開設し、各種展示会への出展、広報活動、襖や日本建築の部材に対する知識の普及、張り替え需要の掘り起こし、PR活動、施工等を行い襖の情報提供、普及活動を行っている。

事例名	3-3-7 葉歌人柿本人麻呂と地域の歴史、観光を見つめ直すシンポジウムの開催		ジャンル	住
地域	島根県江津市	地域的特性	歴史的観光地	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

江津市は、万葉歌人・柿本人麻呂ゆかりの地として知られており、多くのファンの方が訪れます。江津市内には5カ所に万葉歌碑があり、全国に例を見ない多さを誇っています。

石見地域は、万葉の歌人「柿本人麻呂」のゆかりの地として多数の神社があり、公園や施設もある。また、歌に詠まれた「石見」を観光や文化の振興に活かそうとイベントも開催されている。江津市は、文化資産として人麻呂・依羅娘子像の建立や絵本の作成など、市内外に情報発信をしてきた。観光客の誘致には市民の皆様一人ひとりが人麻呂を観光資源として理解することが必要であることから、専門家から一層深い知識の提供をいただき、人それぞれの思いを語り合う場を設けて、観光資源としての価値を高めるために人麻呂シンポジウムを開催した。参加者からは地域に密着した話を聞いたので、人麻呂が身近に感じた。「万葉集」に江津の地名が残っているのがすごい。子どもたちが、故郷の自慢として話が出来ようになれば、次世代には「石見」は万葉の故郷と呼べるようになる。「ボランティアガイドの会」の皆様は、興味の無い人や薄い人に案内するときの参考となる知識を得た。などの声が寄せられ万葉歌人を後生に伝えるべく活動を行っている。

事例名	3-3-8 島全体が博物館「竹富島フィールドミュージアム」		ジャンル	住
地域	沖縄県竹富町	地域的特性	島しよ	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

古来からの先人の知恵と伝統を感じる赤瓦の家並み、聞こえてくる民謡や芸能。これらは島人の生活の積み重ねから生まれ、継承されてきたものである。NPO法人「たきどうん」では、多様化した現代の生活の中で失われつつある、これらの文化遺産を、次の世代へ継承するための研究と保全を行っている。竹富町の指定文化財である旧与那国家住宅の改修に合わせて、同住宅周囲の石垣や豚小屋付便所の修復を島民総動員で行った。これにより島民の自分たちの文化財の保存、維持管理への意識の向上が図られた。この施設を活用した島の古老による生活体験プログラムを行っていくことで、若い世代の島民への文化の継承を図る。また、観光客にもこのプログラムに参加してもらうことで、竹富島の文化とその保存の大切さを理解してもらうことを目指している。観光客に竹富島の島ならではの文化、生活習慣を体感してもらうとともに、旬の情報、島でのマナー等を提供する場として、竹富島ゆがふ館を中心とした6つの施設を、竹富島フィールドミュージアムのサポート施設として整備。各館では観光ガイドによる解説の他、各種生活体験プログラムも実施。また、竹富町の指定文化財である旧与那国家住宅の改修に合わせて、同住宅周囲の石垣や豚小屋付便所の修復を島民総動員で行った。これにより島民の自分たちの文化財の保存、維持管理への意識の向上が図られた。さらに、先祖から脈々と伝わる、竹富島独自の三味線や方言等の文化を来訪者との交流のひとつの材料とすることで、島の活性化につながると考えている。このため、各種講座等を設け、主に島の子供達への伝統文化の継承に努めている。

4. その他関係事例

1. 発掘・再興

事例名	4-1-1 レンガのまちの歴史と連帯感を見つけた「かみゆうべつ 20世紀メモリープロジェクト」		ジャンル	住
地域	北海道上湧別町	地域的特性	農業地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

オホーツク海沿いの海岸から道を少し入ると、5月上旬から6月にかけて120万本のチューリップ公園で知られる上湧別（かみゆうべつ）町がある。ここはレンガの町でもある。湧別町はかつて屯田兵の町であり、地元の土で焼くレンガ工場があった。あちこちにレンガの建物があり住居や牛舎、倉庫、牧場の古いサイロ、工場の煙突、古い祠もレンガで作られていた。現在、65にのぼるレンガ作りの建物が確認されている。このレンガの町の「まちおこし」を行っている熱いグループが、「かみゆうべつ20世紀メモリープロジェクト」の6人の仲間である。グループ結成のきっかけは、平成11年に町が実施した「ふるさと診断プロジェクト」で、網走支庁に属する26市町村が21世紀を考えようと設立したオホーツク委員会（平成2年）活動の一環で市民主体の活動「オホーツクの街並み再発見」のフィールドとして上湧別町が名乗りをあげた。そのワーキング会議に半ば強制的？に集められた30人が、3日間泊り込みで町の風景の再発見に取り組んだ結果レンガの建物にこだわったグループがこの6人である。調査の成果はデジタル・マップにまとめられた。6人は言う、「レンガをネタに町に連帯感が出てきたと感じる。建物の所有者、年配者と話が弾む。レンガを通じて、皆が町の歴史や風景に関心を持つようになった。

事例名	4-1-2 信玄堤の保存・再興		ジャンル	住
地域	山梨県甲斐市	地域的特性	農村地域	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

山梨県甲府盆地は日本三大急流の一つである釜無川（富士川本流）が運ぶ土砂によってもたらされたが甲斐市には、その氾濫に立ち向かった武田信玄の工夫による、最古の治水土木遺産「信玄堤」がある。信玄堤は江戸時代をとおして修復が繰り返され、本邸は良質な粘土を固めた連続堤に造り替えられた。不連続の堤防がくいちがいがながら伸びる霞堤と呼ばれる方式は今もなお河川土木工学の手本とされている。堤を強固にするために植えられたケヤキは巨木の並木で現存し「お林」と呼ばれサクラやモミジと合わせて美しい自然に触れあえる地域の憩いの場となっている。伝統祭礼である「おみゆきさん」は甲州三大信幸の一つである。この土木構造物を後世に伝えるため信玄堤に詳しい達人が案内している。

事例名	4-1-3 「彩漆会」女性の視点で地元で漆器ファン作り		ジャンル	住
地域	石川県輪島市	地域的特性	漆器産地	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

千年もの歴史がある「朝市」で有名な能登半島先端のまち、輪島市（わじまし）。平成18年2月に門前町と合併し、人口は3万5千人ほどになった。輪島の代名詞といえば伝統工芸の輪島塗。だが後継者不足や高齢化などで従業者数、事業所数ともに落ち込み、生産額はピーク時の半分になったといわれている。そんななか、現代の生活の中に輪島漆器を取り入れてもらおうと活動しているのが「彩漆会（さいしつかい）」である。彩漆会のメンバーはそれぞれ何らかのかたちで輪島塗に関連している女性達である。彩漆会は輪島塗の職人ではないが、伝統を誇る輪島塗を少し遠巻きにおそるおそる眺めている人達に「もっと漆器を身近に、生活の中で使ってほしい、そして漆器の魅力を知ってほしい」と活動している。しかし、私達があたりまえだと思っていた漆器の扱い方の常識を知らない人が余りにも多すぎる、と思い知らされ、重箱にサンドイッチやケーキを入れてティータイムに、煮物椀を小鉢やスープカップにみたくて夕食のおもてなしになど、輪島塗を使った食卓を提案した。地元で漆器ファンが育ち、そのつながりで漆器の魅力が全国に広がっていく。その結果、輪島塗など伝統文化で輪島のまち自慢ができるようになればという精神で活動を行っている。

事例名	4-1-4 町人ゼミで、「城下町・岐阜」の歩みを体験			ジャンル	その他
地域	岐阜県岐阜市	地域的特性	城下町		
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信	

◆概要

織田信長の城下町として栄えた金華山のおもとの町並みを歩き、座禅やお座敷遊びなどを体験する企画「古今金華町人ゼミ」。ふだんは気がつかない街の一面に触れられるため、「自分のまちをもっと知りたい」という若者の心をつかんでいる。

初回は、築100年を超える木造家屋の町家を訪れ、移り住んだ若者らの話をじっくり聞いた。第2回は、鶴匠（うしろう）の説明を受けながら鶴飼（うかい）を楽しんだ。第3回は、「若旦那（わかだんな）巡り 岐阜町散歩」として、商店の後継ぎらでつくる「岐阜町若旦那会」のメンバーが営む創業約300年の和菓子屋や、仏壇店などを約3時間かけて訪ねた。第4回は、信長とゆかりが深い岐阜善光寺で座禅をして、自分自身と向き合う。薄暗い部屋で食事をする「暗闇ごはん」も体験して、食べる喜びも実感する。第5回は、市内に唯一残るお茶屋で舞妓（まいこ）さんと一緒に、初心者でも楽しめるお座敷遊びの「超入門編」を実施。

「旧岐阜町（岐阜市金華、京町地区）」で暮らす人々と語らうことで、地元の文化を知ってもらうのがねらいで、参加できるのは18～35歳前後の若者。

■古今金華町人ゼミの内容

- 第1回 歴史ある町家に住む人々を訪問
- 第2回 鶴匠（うしろう）の説明で鶴飼（うかい）を船上観覧
- 第3回 老舗（しにせ）商店を巡って若旦那（わかだんな）と懇談
- 第4回 岐阜善光寺で座禅と暗闇ごはん
- 第5回 お茶屋でお座敷遊び
- 第6回 まちの未来を語り合う

事例名	4-1-5 “謎多き遺跡” 石城山神籠石の発掘・再興		ジャンル	住
地域	山口県光市	地域的特性	地方都市	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

山口県光市は、人口54,911人、面積91.94km²の市である（平成21年4月現在）。国指定史跡の神籠石は、佐賀県、福岡県、山口県内に所在している。神籠石は、山を取り巻くように列石が並んだ古代遺跡である。この遺跡は、古代の山城の一種とされているが、日本書紀や続日本紀に記述がなく、研究者の間でも謎の多い遺跡とされている。このうち光市にある石城山神籠石は、石城山（標高362m）の中腹から8合目あたりを約2.6kmにわたって列石が取り囲み、谷に水抜きの水門が設けられた大規模な遺跡である。光市は、全国的にも貴重な“謎多き遺跡”である石城山神籠石に着目した。光市は、平成16年度の集中豪雨により、石城山神籠石の石垣の一部が崩落したため、平成17年度から18年度にかけて、保存修理事業を実施した。そして、貴重な文化遺産・歴史資源である神籠石を文化財保護のみならず、地域の再生・活性化や地域おこし、まちづくりの推進に活用するため、神籠石の所在する関係自治体に呼びかけ、平成19年2月に「第1回神籠石サミット」を開催した。さらに、平成20年度からは、専門家や地元有識者を交え、石城山神籠石の保存管理や活用の指針となる保存管理計画の策定に取り組んでいる。

事例名	4-1-6 現代版組踊り「肝高（きむたか）の阿麻和利（あまわり）」		ジャンル	住
地域	沖縄県うるま市	地域的特性	島しょ	
目的	発掘・再興	●	連携・交流	発信

◆概要

沖縄県うるま市は、人口117,487人、面積86.01km²の都市であり、沖縄本島中部の東海岸に位置している。現在のうるま市は、平成17年4月1日に具志川市、石川市、勝連町及び与那城町が合併して誕生した。「うるま」とは、沖縄の言葉で「サンゴの島」という意味を持っている。市内には、世界遺産の勝連城跡をはじめとする歴史的遺跡のほか、緑豊かな公園、植物園、ゴルフ場等があり、県外からの観光客や県内の行楽客でにぎわっている。平成12年ごろ、当時の勝連町教育委員会教育長の上江洲安吉さんは、無表情で覇気がなく、控え目で挨拶もまともにできない子どもたちを見て、将来に危機感を募らせていた。上江洲さんが活用すべき地域資源として着目したのは、地域の宝である「勝連城跡」と「阿麻和利」であった。曲輪と舎殿跡勝連城跡は、旧勝連町にある世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一つである。「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は、平成12年に首里城、玉陵など9つの歴史文化遺産が世界遺産として登録されたものである。グスクとは、沖縄県の方言で城を意味する。この勝連城には、15世紀中ごろに阿麻和利という城主がいた。以前から勝連城跡と阿麻和利は地域の人々にとって「地域の誇るべき宝である」という認識が浸透していたのである。旧勝連町では、地域の誇りを再認識し、子どもたちの健全育成を図ることを目的として、町をあげて現代版組踊り「肝高の阿麻和利」の取組を始めることとした。「肝高」は、「きむたか」と読む。これは、「おもろさうし」に見られる古語で、「気高い」、「心豊か」などを意味するものである。

2. 連携・交流

事例名	4-2-1 人を育て、地域を育てる演劇工場の運営「ふらの演劇工房」		ジャンル	住
地域	北海道富良野市	地域的特性	農村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

北海道の中心「へそ」のまち、ラベンダー畑やテレビドラマであまりにも有名な富良野（ふらの）市は、人口2万5千人ほどの意外と小さな農業のまちである。

富良野市の市街地から少し離れた丘の上に、石垣と石畳がきれいなモスグリーンの建物が立っている。ここが、「ふらの演劇工房」の本拠地「富良野演劇工場」、運営をNPOが行う全国初の公設民営劇場である。「ふらの演劇工房」は、富良野を舞台にしたテレビドラマ「北の国から」の脚本家、倉本聰氏が設立した「富良野塾」や倉本氏のファンによる市民活動から始まった。「富良野はドラマで有名になったが、市民が何かをしてくださるだろうか」という問い掛け。本当に富良野に住んでいて良かったと思えるようにと、ファンクラブの一部が発起人となって会を結成、平成9年9月から演劇を中心とした文化活動を始めた。平成11年、NPO法案が国会で成立した年に、全国第1号のNPOとして認定された。「富良野演劇工場」は平成12年に完成。NPO設立当初12人であったメンバーは、今では社員150人、サポーターである友の会の会員350人という大きな組織に発展している。150人という大人数の社員は、必ずしも演劇好きというわけではないが、当会の活動に賛同し運営に積極的に関わっている人達で、7割方は地元の居住者である。職業も商店主、事業主、主婦など様々である。一方、友の会の会員は道内外の広範囲から集まっている。

事例名	4-2-2 市民手づくりの「街の映画館」を文化復興とまちづくりの拠点に「深谷シネマ（チネ・フェリーチェ）」		ジャンル	住
地域	埼玉県深谷市	地域的特性	宿場町・近代産業発祥地	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

深谷市は埼玉県北部に位置する人口約15万人の都市。江戸時代には旧中山道の宿場町や利根川の水運拠点として発展し、明治時代に入ると煉瓦産業の創設、鉄道の開通等により日本の近代産業発展の一翼を担った。深谷シネマの支配人で、館を運営するNPOの代表でもある竹石研二さんは、今年60歳の「団塊世代」である。10年前、それまでサラリーマン生活を送ってきた竹石さんは、50歳を迎えるに当たり、これからの10年間の生き方を自問した。昔からの映画ファンで、一時は映画会社に勤務したこともある竹石さんの立てた目標は、「映画を通じてまちを元気にしたい」というもの。共働きの妻の理解も得て、夢の実現に取り組むことを決心、仲間を募り、2000年4月、NPO（特定非営利活動法人市民シアター・エフ）を設立した。好評のうちにスターとした「手づくりの映画館」であったが、建物の老朽化と消防法の関係で、約1年で撤退を余儀なくされることとなった。新たな映画館は、元銀行の空き店舗を市が借り上げ、TMO事業の補助金で改装を行った。費用節約のため、映写機、音響機器、椅子など全てを中古で調達した。設備費用約250万円の調達には「シネマ基金」を立ち上げ、一口1000円での参加を呼びかけたところ、市民や地元企業から300万円もの寄付が集まった。こうした経緯を経て、2002年7月、市民、企業（商工会議所・商店街等）、行政の協働による全国初の「街の映画館（コミュニティ・シネマ）」として、「深谷シネマ（チネ・フェリーチェ：イタリア語で“幸せな映画”の意）」がオープンした。オープン当初はお客も少なく、竹石さんと映写技師のNさんの2名のスタッフは無給状態であった。そんな苦しい時期には、「映画館のお客さんや近隣商店からの差し入れが何よりありがたかった」と竹石さんは振り返る。2年目からは興行組合に加入してフィルムの調達がスムーズになり、お客も増え、採算ベースに乗るようになった。2008年秋時点では、月2500～3000人の来館者がある。

事例名	4-2-3 小学校で開催される住民総出の冬のイベント「たけだじょんころ雪まつり実行委員会」		ジャンル	住
地域	福井県丸岡町	地域的特性	豪雪地帯	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

日本最古の天守閣を持つ丸岡城をシンボルに、農業（コシヒカリのふるさと。越前おろしそばで有名なそばは生産量県内一位）と繊維産業（ゆかた帯とマジックテープのシェア日本一）で栄えてきた福井県丸岡町（まるおかちょう）は、企業や大学の誘致が進み、3万3千人の人口増加地域である。その中で町の山側に位置する500人ほどの竹田地区は、町指定無形民族文化財の「竹田じょんころ」で知られ、8月の15、16日には優雅な踊りがみられる。「たけだじょんころ雪まつり」は、毎年雪に覆われる竹田地区の住民が総出で冬を楽しもうと行っているもの。「雪はとってもあったかいんです」を合言葉に、2月上旬の日曜日に竹田小学校で開催される。地元テレビ局や新聞社などマスコミでも報道され、来場者が1万人を超えることもある。このまつりが始まったのは20年もの前。当時、国道の整備や大型保養施設の開設など、地区を取り巻く環境が大きく変化した。便利さは増したものの住民のまとまりが薄くなったと始めた公民館まつりがきっかけである。これが青年団を中心とした若者達の主体的な取組みの中で、「音と光の雪まつり T A K E D A じょんころファンタジア」として雪まつりに進化し、地元体育協会や婦人会など多くの団体との連携で今日の形が作られてきた。費用や体制面で開催の危機が来るたびに、雪中花火はたびたび中止になったが、来客数はあまり大きく減らなかった。雪に覆われる時期の数少ないイベントとして地域に定着している。

事例名	4-2-4 盆踊りの継承活動で世代と地域をつなぐ「大見盆踊り保存会」		ジャンル	住
地域	香川県三野町	地域的特性	農産漁村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

香川県の西部にある三野町（みのちょう）は、人口1万人の農林水産業の町。「三野町大見盆踊り保存会」は三野町大見地区の公民館を活動拠点として、子供達に昔から伝わる盆踊りを継承する活動で、世代間、地域内の連携を培っている。明治の頃から続くといわれる盆踊り「まねき」や、大正の初期から始まったとされる「地唄（じゅうたい）」はかつて盛んに唄われ踊られていたが、第二次大戦の頃に途絶えてしまった。昭和30年頃から各地で少しずつ復活し始めたが、その後盆踊り自体がはやらなくなり、子供向けの新しいものは別として、伝統的な踊りは引き継がれない状況になっていった。そこで、昭和59年に公民館長の香川清美氏が働きかけて、盆踊り保存会を結成。三野町ではその年から毎年、小学校の校庭で盆踊り大会を開催することになった。保存会の活動が本格化したのは平成3年。大見分館長の佐藤義憲氏（現町長）が、伝統芸能を子供たちに指導することの必要性を訴えて各方面に協力を呼びかけ、対象を小学生全員に広げて盆踊りの指導を行うようになった。平成9年からは幼稚園でも指導を始めている。盆踊りの指導では、踊りの歴史とともになぜ昔の踊りを練習することが大切かを生徒に話している。8月13日の盆踊り大会には、子供達の参加が増えたことで、地区の盆踊りとしては盛況といえる7～8百名もの参加があり、3世代での参加も見られるようになった。盆踊り大会は年に1回だが、4年に1回開催される三豊ふるさと祭りに、三野町代表で参加し、伝統の盆踊りを披露している。

事例名	4-2-5「冠太鼓」女太鼓が町に元気を取り戻す		ジャンル	住
地域	宮崎県東郷町	地域的特性	地方都市	
目的	発掘・再興	連携・交流	●	発信

◆概要

宮崎県東郷町（とうごうちょう）は日向市の西隣に位置する人口5千人強の町。明治の歌人、若山牧水が生まれた町。町には牧水の生家、牧水記念館、牧水公園のほか、歌碑が数多くある。この町に、平成6年、女性だけの太鼓のグループ「冠太鼓（かんむりだいこ）」（代表：田原千春さん）が生まれた。きっかけは、保育園でチビッコ太鼓をやっていたところ、保護者が「面白そうなので自分達も叩きたい」といいだし、平成5年に先生と母親による太鼓たたきグループを作ったこと。「大人の叩ける太鼓が欲しいが？」と町にいったところ、町から「郷土芸能保存と町の活性化策として独立して活動すれば補助する」といわれ、平成6年7月、町内の13名の女性で「冠太鼓」を作った。名前は、東郷町のシンボルでもある冠岳（標高438m、町の中心部に近く、周囲に森や滝、椿の群生地などもあり、いくつもの登山ルートが整備されている町民の憩いの場）のように町民に親しまれるようにと名付けた。町の補助はふるさと創生資金の一部500万円。このうち460万円で太鼓を買い、残りの40万円を育成費として和太鼓専任の講師に指導を5回受ける費用と、郷土の歌人若山牧水をイメージした自分達の曲の作曲費用に当てた。宮崎の延岡周辺は昔の内藤藩で、「ばんば太鼓」という伝統的な太鼓があり、地域の人には太鼓に馴染みがある。宮崎県下で和太鼓のチームは75団体くらいあるが、女性だけのグループは珍しく、いろいろな機会にお呼びがかかる。地区の祭り・イベントのほか春の牧水つつじ祭り、秋の産業文化祭にまで出演している。

3. 発信

事例名	4-3-1 のへじ昔っこ編集事業		ジャンル	住
地域	青森県野辺地町	地域的特性	農村地域	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

青森県野辺地町は人口 1 万 5 千人の町である。町には古くから伝わるいくつかの伝説や民話があるが、本としての媒体がないことから、世代が変わるにつれ、親から子へ語り継がれることが少なくなり、町の歴史・文化の継承が薄れていくことが危惧されていた。そこで町では、町の伝説・民話を本として制作し、子どもたちに伝えていくことで、郷土「野辺地」に対する興味や関心、愛着を深めるとともに、子どもたちの豊かな情操を培うことを目的としてこの事業を実施することになった。町に伝わる 6 つの伝説・民話の掘り起こしを行い、「のへじ昔っこ」として本を制作し、教育・福祉等関係機関での活用を図るものである。併せて、うち 2 ～ 3 話を紙芝居形式で CD-ROM 化し、インターネット上で電子紙芝居として閲覧できるようにした。地域の歴史・文化の継承につながることはもちろんであるが、本の読み聞かせを通して、親と子のコミュニケーション、さらには地域のお年寄り子どもたちとの世代間交流も図ることできる。本の冒頭に伝説場所のマップと写真を添付し、本を手にした人たちが訪れてみたくなるような工夫を図る。また、紙芝居形式で制作する CD-ROM は、共通語のほかに野辺地の方言でも吹き込みし、町民の誰もが親しむことができるようにする。町で過去に制作した、「野辺地方言集」と「のへじふるさとカルタ」とも連動した事業展開を図ることにより、相乗的な効果が期待される。

事例名	4-3-2 みずさわ観光サポーターの会		ジャンル	住
地域	岩手県水沢市	地域的特性	歴史的街並み	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

水沢は幕末の医学者・蘭学者である高野長英や後藤新平の生まれ故郷であり、古代より要衝の地として栄えたことから史跡も多い。最近では、1200 年前に当地域で勢力を誇り、大和朝廷に抗して坂上田村麻呂に捕らえられたエミシの指導者アテルイが注目を浴びている。水沢は南部鉄器や米などの産地としても知られるが、近隣地域に宮沢賢治や温泉で知られる花巻と藤原三代の平泉があり、これまで観光地としては、あまり陽の目をみることはなかった。この水沢の観光振興に一役買おうと奮闘しているのが、ボランティアで観光案内を引き受けている「みずさわ観光サポーターの会」である。観光サポーターの会の結成は、平成 12 年に市が開催した歴史勉強会がきっかけになっている。当時、市では観光振興を目的として武家屋敷通り等の歴史景観の整備を進めていたが、観光の受け入れ側である市民に水沢の歴史をもっと知ってもらふ必要があると、専門家を招いて月 1 度のペースで勉強会を開催した。勉強会はかなり専門的でレベルの高いものであったが 50 人ほどが参加している。研修を終えた受講者の中から、この経験を生かそうと有志が集まり、その年の末にボランティア「みずさわ観光サポーターの会」が結成された。

事例名	4-3-3 民有歴史文化資産の保存・活用 プチミュージアムの郷プロジェクト	ジャンル	住
地域	石川県能登町	地域的特性	農山漁村地域
目的	発掘・再興	連携・交流	発信 ●

◆概要

平成 18 年 2 月、民家の土蔵に眠る古文書や書画などを地域振興に生かそうと地域住民の有志で構成される「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」が発足。町総合計画策定にあたり、審議会公募委員を務め「プチミュージアムの郷プロジェクト」を提唱し、まちづくりのアイデア特別賞を受賞。これを受けて、町公益信託助成事業の助成金を使用するなどして、町全域に 50 館のプチミュージアムの建設、郷の整備に地域住民が取り組んでいる。プチミュージアムとは、地域に眠る個人所有の歴史文化資産を民家や店舗の一角に展示するミニ博物館のことを称している。地域に眠る個人所有の歴史文化資産を民家や店舗の一角に展示するミニ博物館を、地域全域に 50 館を目標に整備する。整備にあたっては、すべて「民有『歴史文化』資産の保存活用を考える会」が費用を負担する。町の予算書には一切これにかかる費用は計上なし。(1)「プチミュージアム」の建設整備により①あまねく町内全域に整備するゆえに、周遊、散策するルートができる。②プチミュージアムをルート化することによる新たな観光コースが生まれる。③プチミュージアム間のつながり、及び交流人口の増加。④観光客等入込み客増加にともなう、温泉施設、宿泊施設などへの経済効果などが期待されている。町広報誌、CATV、観光情報誌などに掲載し側面的に支援。また、「いしかわ地域づくり表彰」や、「『新たな公』によるコミュニティ創生支援モデル事業」への推薦など積極的な情報発信を行っている。

事例名	4-3-4 伝統のものづくりと音楽のお祭りでコミュニティの活性化「天神芸術まつり実行委員会」	ジャンル	住
地域	山口県防府市	地域的特性	地方都市
目的	発掘・再興	連携・交流	発信 ●

◆概要

山口県防府市は山口市の東隣に位置し、山口県中央部の瀬戸内海に面した風光明媚なところである。天神様として親しまれている天満宮は、京都の北野天満宮と福岡の大宰府天満宮が有名だが、この2つとともに三大天満宮となる防府天満宮は知名度がやや低い。ここが最初の天満宮だと知る人はさらに少ないだろう。学問の神様、菅原道真を祭る天満宮だが、道真が九州へ下る途中で防府に立ち寄り、死んだら魂となってここに帰ってくると約束したことから、没後の翌 904 年に日本最初の天満宮として創建されたという。その防府天満宮の境内を借りて、手作りのイベント「天神芸術まつり」を開催し、地域の活性化と住民の交流拡大を目指しているグループが天神芸術まつり実行委員会である。「天神芸術まつり」は9月の3連休に開催される。まつりの実行委員会は平成 15 年 5 月に設立されたが、地元の重要な観光資源でありながら、正月の参拝以外に人出の少ない防府天満宮に観光客を呼び込もうと、秋にイベントを行うことにした。もう一つの柱はものづくり。伝統のぞうり作りも埋もれようとしている技術の1つである。まちづくり活動のネットワークを活かして、伝統技術に関心のある若者をぞうり職人さんに紹介し、お互いの刺激材料としたこともある。松村さんの会社の社員もイベントに参加し、伝統の鋳物に少しでも馴染んでもらおうと、子供たちに鉛のクワガタムシ作りを教えている。日常では人と触れ合う機会が少ない技術者には、それが自分達の勉強にも喜びにもなっている。この他、この地域には、染物、木工(面細工)、焼物(真山窯)、竹細工などの伝統工芸があり、徐々に出し物を広げていきたいという。

事例名	4-3-5『ザビエルの道』ウォーキング大会		ジャンル	住
地域	大分県日出町	地域的特性	地方都市	
目的	発掘・再興	連携・交流	発信	●

◆概要

大分県日出町は、人口28,532人、面積73.23km²の町である（平成21年4月現在）。歴史を振り返ると、1551年9月に、フランシスコ・ザビエルが、府内（今の大分市）の大友宗麟の招きに応じ、山口県から日出町の西鹿鳴越道を通り、日出の浜に出てポルトガル船に乗り移り、府内に入ったとされている（『日出町誌』、『イエズス会の歴史アジア篇』及び『ルイスフロイス日本史』より）。日出町では、ザビエル生誕500年に当たる平成18年10月に、フランシスコ・ザビエルに由来する景観美豊かな史跡コースを活用して第1回「ザビエルの道」ウォーキング大会がスタートした。この大会で用いられるウォーキングコース内には、平成20年11月にローマ教皇庁により福者に列せられた江戸時代初期の日出藩家老「加賀山半左衛門」とその子ども「ディエゴ」が祀られている殉教公園がある。また、町内にはトラピスト修道院もある。こうした日出町の地域性も、この大会を運営するうえで魅力的な素材になっている。事業の成果を見ると、これまで知られていなかった歴史的価値のある「ザビエルの道」を全国に広く周知することができ、「ザビエルの道」ウォーキング大会自体も毎年全国各地から多くの参加者に恵まれるようになってきている。さらに、「ザビエルの道」については、町内のトラピスト修道院を通じて毎年国外にも情報発信してもらっている。その結果、第4回大会直前には、ローマ教皇庁から「フランシスコ・ザビエル」の遺骨の一部が贈られ、修道院内に祀られることとなった。

Ⅲ. 活動事例から見た現状と課題

1. 発掘・再興

1-1. 現状

- ・衣関係では、地域の織物、繊維関連の保存会を中心に歴史的な衣服や織物を保存、紹介する活動が多くなっている。
- ・食関係では、食材をはじめ、食器などを再発見・発掘し、利活用について自治体単体、または行政区域を越えて連携しながら行っている例が多い。
- ・住関係では、住まい（住宅）、道具、生活色などを発掘、保存している例が多く、また、地域住民が連携して保存会や保存のための活動グループによって行われている例が多い。
- ・発掘・再興に関する活動のきっかけは、特に興味をもった地域のリーダー的な人材（機関）が活動を牽引するケース、地域住民や事業者の発意によるケース、行政と住民・事業者が連携して取り組むケースなどが衣食住の各領域に共通して見られる。また、マスコミの報道が地域資源発掘・再興のきっかけとなった例もある。

1-2. 課題

① 暮らしの文化資源の発掘・再興を行うきっかけづくり

- ・地域に伝わる衣食住の産品、素材、技術等の情報の蓄積
- ・身近に残る暮らしの文化について見直し光を当てるための着眼点
- ・地域に残る暮らしの文化資源の発掘・再興を促す体制づくり
- ・広域的に資源を結集する工夫
- ・マスコミの活用など広報・PRの充実

② 技術の伝承や開発

- ・衣食住それぞれに関わる伝統技術の伝承
- ・単に発掘するだけでなく、自立的にその動きを展開するための試み、例えば、製品化に向けた技術開発の体制整備
- ・現状でも県が認定制度を構築している例があり、県から情報を吸い上げる仕組みを制度化したり、個人の技術を伝承する仕組み等人材の育成が必要

2. 連携・交流

2-1. 現状

- ・衣関係では、大学、行政、民間企業がそれぞれの立場で衣に関わる文化を発掘し保存にむけた活動を行っている。
- ・食関係では、食材オーナー、行政、農業協同組合、旅館、企業組合、農事組合法人等が連携して地域の食について研究、紹介、レストラン開業等の活動を行っている。
- ・住関係では、まちづくりの一環として地域の資源や地場産業・地場技術、暮らしの中で作られた道具や施設などを行政、NPO、関連産業の団体等が中心となって連携交流活動を行っている。

2-2. 課題

①連携の主体となる組織・体制づくり

- ・活動のきっかけが個人という傾向が衣食住に関わらず見られる。しかし、個人が担える範囲には限界があることや個人の生活が優先されること等から、活動を継続させるためには地域が一体となった組織化・体制づくりが必要である。
- ・衣食住それぞれで若干異なるが長く続かせるには経済的にも軌道に乗せる必要があり、そのためには、民間の参画を得るための事業者のメリットやインセンティブに配慮する必要がある。
- ・連携活動を長続きさせるためには、一部の熱心な住民だけでなく、高齢者や主婦層を巻き込む工夫を行い地域全体で取り組む体制づくりが必要である。
- ・活動を広げるための地域への普及・啓発活動が必要である。

②活動主体以外の団体との連携の必要性

- ・活動の主体だけではなく、他の団体との連携交流を図ることで関心を高めたり、資金的な支援の輪が広がったりする可能性があり、テーマ・活動の共通性等から連携活動団体同士、その地域における他の活動団体との連携が必要である。

③自治体との連携の必要性

- ・民間や住民有志だけの活動は限界があり、資金面、情報面からも行政と連携を図り、それぞれの役割分担の下に活動を活性化させることも必要である。

④都市地域との連携の必要性

- ・連携交流活動の主体となるのがイベントであるが、こうした活動の実施においても発信力という点でも都市と農村の交流、上下流交流、地域特性を共通キーワードにした交流等他の地域との連携・交流は必要である。

⑤地域性を踏まえたサポートの必要性

- ・各地域でどのようなくらしの文化があるのかの実態を把握しつつ、地域性を重視した振興を行う観点からサポートを行うことが必要である。

3. 発信

3-1. 現状

- ・衣関係では、衣にまつわる地域をバスツアーで回る催し、地域の観光資源とタイアップしたイベントの実施、衣装をフル活用しての発信、伝統技術で織った服をテーマにしたファッションショーの開催といった事例が見られる。
- ・食関係では、食材、料理をブランド化して発信している例が多い。また、農村レストランを開業して情報発信を行っている例もある。
- ・住関係では、長年蓄積・分類した地域に伝わる民具に係る情報をネットを通じて一般に供するシステムや、業界関係者の活動によって伝統的な暮らしの部材を発信している例などが見られる。
- ・全体に共通して、インターネット等の媒体を利用した情報発信、イベント、シンポジウム、講習や研修の開催といった手法が用いられている例が多い。

3-2. 課題

①発信するための体制

- ・衣食住の領域によって発信する方法、体制は異なるが個人が始める例が多く見られる。やがて、団体となり、規模も大きくなるもの、一定規模で止まるもの、個人の生活が優先されるため離合集散する団体等が見られ、一定の成果をあげるためには発信するための体制整備が必要である。

②継続的に発信するための方法

- ・発信手法としてはイベント活動を行って内外に発信する方法を行うものが増えている。イベントは観客動員という点でもすぐれているが一過性の効果に止まることが欠点でもあり、継続的な発信手法については地域やテーマに応じて検討する必要がある。

③発信力を如何に強化するか

- ・くらしの文化の性格やテーマによって発信するための手法は異なるが、どの段階で発信するか、どのような方法で発信するか、どの範囲でどのような人にどのような内容の情報や活動を発信するかの検討が必要である。また、より多くの人にくらしの文化を理解してもらうためにはより効果的な発信が必要でありどのように発信力を高めるかという検討が必要である。

IV. 研究会の開催

本調査研究を進めるに当たり受注者において「くらしの文化の実態及び振興方策に関する調査研究研究会」を設置して学識経験者の意見を踏まえて調査研究を進めた。

研究会は、平成23年3月28日に開催し、以下の意見をいただいた。

くらしの文化の実態及び振興方策に関する調査研究

研究会 議事要旨

日時：平成23年3月28日(月)13:00～15:00

場所：文化庁特別会議室

出席：委員 浅田和幸（日本経済新聞社編集局産業地域研究所主任研究委員）

江原絢子（（社）日本家政学会食文化研究部会部会長）

古家信平（筑波大学教授）

事務局 （株）日本能率協会総合研究所 近藤、白鳥、沢江

オブザーバー 文化庁長官官房政策課 滝波企画調整官、能見係長

古家：報告書の原案にキーワードのひとつとして「景観」がある。文化庁の文化財指定に「文化的景観」があり、今回の報告書で言うところの景観とどこが違うのかという点を見て行くと、新たに提起された「くらしの文化」の性格が分かるかもしれない。同様に文化庁の指定に「民俗技術」もあり、これも今回の調査で類似する内容が見られるので、その違いを見て行くと「くらしの文化」をどうとらえようとしているか、分かってくる。例えば、沖縄のかりゆしウエアを取り上げており、これをピックアップしたのはその前の段階があってどんなきっかけでああいうものになったのかという現代の様相に着目している、ということが分かる。報告書には古民家再生プロジェクトも入っており、これも民俗文化財の調査とある面でオーバーラップしてくる。こういった文化財の指定案件と比較してみると、現在作り上げられている過程にも注目するという点が、「くらしの文化」の一つの性格かと思う。学校教育の現場も取り込んでいるが、それらは現代民俗論的な着眼と通じ合うものがある。

浅田：取り上げているのはまちづくり事例、まちおこし事例である。答申を読むと基礎的な資料を得るとか、まとめるとか、活動のデータベース化するとか、データベース化する際の基準が必要だという点を指摘していて、「くらしの文化」を全体的に把握する、その上で振興するための課題検討が必要だという認識をしている。ここの事例を取り上げることで課題を見つけ出すために今回の調査があるのか。取組事例集を作成して何をしようとするのか分からない。地方伝統料理について言えば、どういふのがあって地域の特性なり伝統に支えられているのか…的な本は沢山でている。それを「くらしの文化」として捉えようとしていると私は理解している。夏祭りがある、秋祭りがある、それは寒い地域だからこうなんだ、とか、米がとれたら

こうなんだ…等それぞれの地域特性があって、それは大事であり、それをトータルに捉えようとしているのではないかと思っている。白川村も固まりであるから世界遺産の候補となった。茅葺き屋根は村総出でやるから「くらしの文化」だ。「くらしの文化」は各地で色々あるはず。沖縄も「結」のコミュニティが独自の文化を創っている。そういうものをトータルとして捉える作業を始めようということなのか、たまたま活動していることを紹介しようとする調査なのか、その辺が分からない。

能見：文化庁としては、くらしの文化WG意見のまとめにあるとおり、なるべく包括的に実態を捉えた上でそこから抽出されるもので振興方策を講じられればという方向性で調査研究を始めた。ただ、今年度は時間的制約もあるため、主な事例をとりまとめてもらったという認識である。

近藤：消えゆく〇〇とか自分だけで守っているものが多いと思うが、最初からそういうものに焦点を当てて日本中くまなく調べようとするところに埋没してしまうのではないかと思った。自分達だけで守っていこうとする文化は自然に無くなってしまいうようなものなので、ここにあげた事例の半分くらいは「くらしの文化」とは直接関係しない事例かも知れないことは認識しながらも活動という点からヒントになるようなものを見つけたということでもまとめているところもある。認識としては視点を広げて事例をとりまとめた方がヒントになるのではないかと思っている。襖のように業界の人が手弁当で守る活動をしている例もあり、日本の伝統文化を守るという話も聞いた。数集めれば良いというものではないが、概観した上で「くらしの文化」を見つめ直すというアプローチで行った。

浅田：文化的に意義を見つけ出そうということと、それを維持・継承していくための手法を浮かび上がらせようとする方法は1つの方法ではある。ただ、もう少し数を選別した方が良くないかなと思う。どこでもやっているような例、取組の説明でない内容も多い。あれもこれも入れてしまうとこの報告書で何が言いたいかわからなくなるのでないか。「住」にはいろんな分野のものが入っていて、その他もあるが、答申には創造都市とか創造産業もあり、住の中に産業遺産も見られるが、紋別の駅や彦根の赤は住なのか。歴史そのものではないのか。地域産業と「くらし」の素材が例えば「食」であって、長崎のブリ漁は漁業の手法であって食べ物ではない。衣食住とか、発掘・再興…とかで切られてしまうと何を守ろうとしているのか分からない。例えば、大分の鉱山があってそれを祭で表現している。祭は地域の文化である。農産物の豊穰を祝う祭と鉱山の人々が働いて無事で終わった祭の切り口とは違う。

江原：P2のキーワードの定義であるがくらしの文化について食だけを切り離すこと難しい。食生活という形で考えてみると、通常単独で成立するものはなく、生産したものを消費者が買って料理や盛りつけを行う。食器の選び方、食べ方とか、料理の仕方も地域で異なる。1つずつの料理をある地域で開発しているという例は全国で大変多い。それらをデータベース化するのは意義があると思う。各料理などがどのような

くらしの中で使われてきたのか、それがコミュニティの中でどう享受され^てきたのかという視点もあった方がよい。それを含めて残すべきもの、残すために支援をしていくもの、そのためにどんな支援が必要かということなどについて考えるのであれば意味があるのではないか。具体的なことを取り上げるのはいいがそういう視点が必要ではないか。質問であるが事例はどうやって取り上げたのか？。

白鳥：今回は活動事例であり、資源を活用してどういう風に発掘したかという人の活動を重視して集めた。調査方法は出典資料を後に提示している。インターネット、事例集などから出している。

近藤：当初、議論の中で「くらしの文化」は素材じゃないかと話があった。それを集めようとしたら今回のアプローチとは違っていただろう。「くらしの文化」そのものを集めるという調査ではないという認識を持っている。むしろ、どういう活動をするのかという問題意識で調査した。手法論を勉強するのが今回の調査の視点であるという認識を持っている。ただ、衣食住を独立で取り扱うのはどうなのかとは思っている。

浅田：答申では振興策を出すというのが目的だと思う。衣食住、活動の面、課題という切り口で調べたと思うが、別の切り口で再構成することが必要ではないか。地元の人による観光ガイド、ボランティアがあるが、それを自分達の街の文化として大事にしたい場合色々なアプローチがある。市民が守るという手法もある。今回、自然や風習についてあまり触れられてないが、風や松林や鳴き砂とかは文化だと思う。じゃがいもの花は集団で咲くと綺麗だが、観葉植物として植えた訳ではないが観光的な面、改めて別の視点で見るとじゃがいも生産として見ていたものが別の経済的価値を持つことで一つの文化として守られていく。こういう手法論があるというまとめの方の方が資料としては役立つのではないか。

古家：「くらしの文化」はその対象は際限がない。この調査報告でまず衣食住から始めたのは第一歩として正しいのではないか。民俗学でも最初は目に見えるもの、第2段階は伝説など言葉を介して伝えられるようなこと、第3段階として心を取り上げる。第1段階の資料として文化庁が行った祭行事調査とか職人の調査も参考になる。ただ、何をもち「くらしの文化」とするのかという点では、現代性と実践性ということではないか。第2段階として何をどこまで具体的な事例として加えて行くのか、検討が必要である。つまり、「くらし」という言葉は使い勝手がいいけれども、何を実態としてとらえるかという点で難しい。

江原：今後、事例収集を継続する場合に、事例の公募（例えば、地方や団体に投げる、一般公募、コンテスト形式など）も可能なのか。取組主体も含めて考える中で新たな課題も見えてくるように思う。ただ、その際には、投げ方について十分検討する必要がある。

近藤：「くらしの文化」は個人レベルで伝わっているものが多いのかと思う。そうすると

連携・発信という団体でやるのは馴染まないのではないかと思う。先進的な事例、観光の活性化策等があり、一方では「くらしの文化」があり、これを一緒にすると経済的活動もあり得るがそれを守っている人、家族とそういう考え方が馴染むのかという思いもある。

浅田：「人知れず」状態になっているのは廃れてきたからだ。その地域にあまねく伝承してきたから「くらしの文化」であって、個人的な活動は「くらしの文化」ではないだろう。村上の取組があるが、それぞれの家の奥に締まっていたおひな様やのれんが素晴らしいとは地元は気が付かなかった。それを吉川さんが素晴らしいと言ったから素晴らしいものになり、自分達が気づいた。気づくことが重要。宝があるから気づきましょうと当事者に知ってもらおう。それを誇りに感じる。手法の面から再整理した方がいいのではないか。取捨選択して整理した方がいいのではないか。

江原：P54について食文化について例えば…という文章があり各県で認定の仕組みがある。私も神奈川県のみさと文化伝承者の認定に関わったが、各県で認定制度を作っているところが多い。食文化の関連では、日常の食をつくってきた女性たちや色々なものを手作りしてきた人が伝承者に認定されている例が多いのでは。認定された人に小学校などでえるような仕組みを作っている自治体がある。自治体ごとに伝承者を吸い上げる仕組みを作ったり、各県を連携する仕組みが出来たりすると、個人の技術の重要性に気づくことができる。食文化研究部会でもその地域の食を守っている伝承者の人と出来るだけ交流している。

古家：出典を見ると、地域活性化や街づくりの事例集から選んでいる。それらの事業と「くらしの文化」の対象とはやや違うイメージがある。

古家：くらしの文化を切り取ってくるのは難しい。食事とかは日常食なのでそれをある地域を特定して取り上げるのは難しい。衣も地域性があって成り立っている訳で地域性があってデザインや機能があって成り立っている。民俗学は非日常のことばかりやってきたので日常的なくらしの文化に弱い。こういう形で取り上げるのは興味があって外国にも発信しようとする野心的な試みでもある。くらしの文化として何を具体的に取り上げるのかは難しい。資料としてまとめるのは難しいと思う。

浅田：何年かかるか分からない試みだが、私は期待している。日本のくらし方を西洋文明と対峙するのは重要。今回は活動の面からアプローチしたということだが、それが素晴らしいことだという気づきが見える。こういう風に継承しているという手法、祭や食文化はこういうやり方をしているとか、軒先を借りてミュージアムにしたり、検索しやすいような情報データベースをつくったとか、自ら伝承者を育成したり子ども達に伝えるとか、何通りかのアプローチのやり方が見えるように再編して、本格的な調査のステップになればいいと思う。

古家：住生活については団地の生活を入れるかどうか。昭和30年代が見直されているが、松戸市立博物館が団地の展示の走りだ。常盤台団地を博物館の中に再現した。住生

活の「くらしの文化」を考え出すと古民家だけでなくかなり広がることになる。海外の人は華道とか歌舞伎は知っているが団地生活は知らない。日本は伝統的な文化を持ちつつ最先端なものも受け入れる。それも含めて「くらしの文化」に含めるのかどうか。答申 P58 に華道、茶道の生活文化が出ているが、これは一面にすぎず、もっと普通の生活がくらしではないか。

浅田：でも、ニュータウンは失敗例ですからね。

古家：P58 に華道、茶道の生活文化が出ているがこれは一部でもっと普通の生活がくらしではないか。

白鳥：食文化について、例えば、県にアンケートをしても DB があるところはいいがそうでないところは回答が難しいのではないかと思う。

江原：一般公募するなどはどうか。前に審査を経験したことがあるが色々事例が集まった。コンテスト風にし、それに応募する。郷土料理の選考などを見ると選ばれた背景がいつも明確とはいえない場合もあるが。

近藤：文化庁が何らかの関わりを行うということを前提でくらしの文化の調査として次のステップをどうすれば良いか。今年度はくらしの文化として集めてない。次はもう少しくらしの文化の事例を調べた方が良いのか、そういうことは郷土資料館とかでやっているので別のアプローチをするのか。

江原：各地域で活動をしているが、それを全体的に把握することがこの調査の目的ではないのか。全体像を把握するというのがこの調査の目的だとしたら、各県がやっている伝承のための施策や活動を集めることは重要だ。どこかで全体像を把握する必要があり、それが今回の調査で行うべきことではないか。

古家：答申 P53 に「我が国の生活に根ざした文化を「くらしの文化」として包括的にとらえ…」とあるので、生活に根ざしたということをこちらで決めてしまうことが必要ではないか。「くらしの文化」という言葉の定義だが、民俗文化財は後ろ向きである（過去のを保存していく側面が強い）のに対し、「くらしの文化」は創造する面がある。廃れていくものもあるが変化したり新しいものを生み出したりという現代的な面もあり、そこに注目すべきではないか。新しく生み出されていく文化はあまり議論されてこなかったと思う。これまでの政策の中ではあまり触れられて来なかった部分ではないか。

浅田：最終的に文化庁が何をしたいのか、アーカイブ、担い手の育成、さらなる振興、創造都市の推進だとしたら、「くらしの文化」は地域ごとに違いがあって、価値を再発見することは地域での継続性という点では大きな意味があるだろう。海外への発信ということではお花だけではない、庶民の生活の中にあるということを説明できるものが欲しいのかなと思う。海外と日本だと同じことをしても文化の違いがあり、それが誤解につながるのをそれを正しく伝えるという意味でこの「くらしの文化」

は重要だと思う。食だけでなく、これはお祝いの時に使うものだというようなところまで伝えられるならいいのではないかと思う。

江原：各地域にはそれぞれの暮らし方に特長がある。その地域性を重視しながらその実態をどこかで把握する、課題が何かを知るのは国としての役割ではないか。それぞれの暮らしには地域性があり、それを踏まえたサポートをしなければならないので、日本の暮らしとはこういうものだということを創り上げるのが目的ではない。ただ、外国に対してはそれぞれの地域のことを吸い上げて全体としてはこうだという発信はすべき。1つのパターンを地域に当てはめるのは良くないと思うので、その辺のことを踏まえてサポートをする仕組みを作ることが重要だと思う。

古家：民俗学が対象としてきたものの現代的なもの、実践的なものが「暮らしの文化」だと思っているが、まだ言語化されてないことが課題だ。海外に発信するにはなおさらである。例えば、5月の節句には人形が送られるとは書いてあっても長男だけだということは書いてない。我々は分かっていることだが表現されていることだけではないことを言語化することが重要な時期にきていると思う。日本の文化は、江戸の中期から幕末までに庶民生活の枠組みが出来上がり、それが昭和30年代頃、昭和中期以降に大きく変わったと言われている。その頃以降のことを把握する必要があるがあまり行われていない。それを「暮らしの文化」として把握することは意義がある。民俗文化で注目される地域性については、例えば沖縄の琉球ガラスがあるが戦後ガラスが足りなかった時代にコカコーラの瓶を溶かして始めたと言われている。それがだんだん土産物で重宝されるようになり工芸師に指定されて賃金が高くなったためベトナムに製法を持って行きメイドインベトナムのガラス製品として安く製作したのを逆に輸入している。そのようなことが「暮らしの文化」の中で行われている。地域性ととも国際性があるのが特長である。民俗学では地域性や伝承性で考える癖になっているが、新しい視点で「暮らしの文化」を考えていくことが重要だ。

以上

v. 本調査研究を継続する上での今後の課題

本年度の調査研究では、全国で行われている「くらしの文化」に関わる各種活動事例について収集整理したところである。今後、本調査研究の趣旨を踏まえつつ、研究会で指摘された以下の課題についてさらに精査する必要がある。

1. 「くらしの文化」に関わる事例の精査と取捨選択

「くらしの文化」に関わる様々な活動が全国各地で行われているが、発掘・再考、連携交流、発信を行っている事例について多面的な捉え方で事例を精査し取捨選択することも必要である。

2. 「くらしの文化」を整理する視点についての精査

本年度は事例を収集する際の効率性、的確性を重視し、衣食住という分類で収集整理した。しかし、衣食住単体による切り分けを行ったことで「くらしの文化」の関係づけが切られてしまう場合等もあり衣食住の視点について詳細化する、項目化を行う等それぞれから派生する文化的な事象や事例についてさらに検討することが必要である。

3. 「くらしの文化」の定義と含める事例（活動）の精査

本年度は画一的な事例に偏ることを防ぐため詳細な定義付け等を行わなかった。今後、「くらしの文化」振興を図る際の範囲や内容を検討するに当たり、時代的な背景や歴史性、創造性、海外への発信性といった観点から精査することが必要である。

◆参考文献

- 日経テレコム新聞各紙（日本経済新聞社）
D-ファイル新聞各紙（イマジン出版）
地域団体商標登録案件（特許庁）
ふるさと体験事例集 2001（（財）地域活性化センター）
平成 21 年度 地域活性化事例集 地域資源を活かした地域の活性化（（財）地域活性化センター）
地域再生大賞-47NEWS（よんななニュース）
各ホームページ情報等
わが町元気（内閣府）
地域伝統文化総合活性化事業（文化庁）
地域団体商標登録案件（特許庁）
ふるさと体験事例集 2001（（財）地域活性化センター）
都市と農山漁村の共生・対流 2004（（財）地域活性化センター）
あしたのまち・くらしづくり 2006（（財）あしたの日本を創る協会）
あしたのまち・くらしづくり 2007（（財）あしたの日本を創る協会）
あしたのまち・くらしづくり 2009（（財）あしたの日本を創る協会）
地域いきいき観光まちづくり 2009（国土交通省）
立ち上がる農山漁村 選定事例（農林水産省）
地域再生大賞-47NEWS（よんななニュース）
地域いきいき観光まちづくり 100（国土交通省）
地域いきいき観光まちづくり 2009（国土交通省）
地域再生リニューアル事例集 2005（（財）地域活性化センター）
月刊地域づくり（c-1 253号）
手づくり郷土賞（国土交通省）

